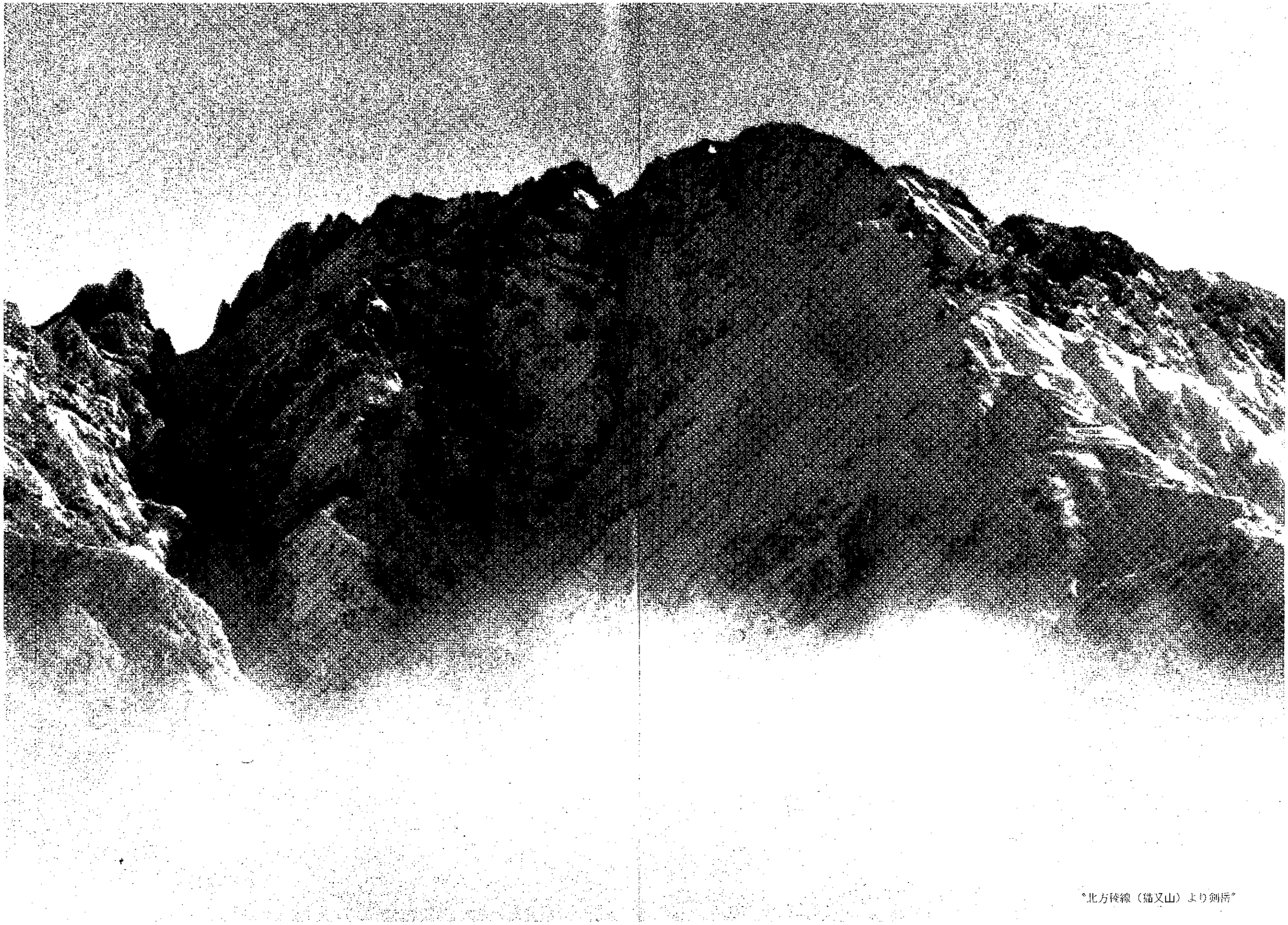
時報 第19号

大阪大学山岳会



〝北方稜線（猫又山）より剣岳〟

'85・夏

剣・真砂のＢＣにて

(行動が終ってのどかな午後)

'86・冬

白馬・天狗原にて

（９日目の下山直前）

'87・冬

奥穂山頂にて

（条件よく楽勝）

◄ '87・夏
甲斐駒・赤石沢・ダイヤモンドAフランケ
恐竜カンテ上部の偉容

▼ '87・夏
剣・北方稜線、赤兀付近

▲ '87・冬
明神Ⅱ峰の懸垂

'87・夏
剣・チンネ gcd クラック ►

巻頭の言

「今はなき先輩岳人を想う」

大阪大学山岳会会長　徳　永　篤　司

昭和63年11月28日、恩地　裕先生が肝癌で急逝された。先生は篠田軍治先生の退官の後をうけ、昭和42年より約10年間当会の山岳部長として、２回のＰ29 峰遠征や白馬での遭難未遂などに対して実にきめ細かく当会を指導され、援助を惜しまれなかった。山岳部長時代の先生が本業では医学部附属病院長を始め特殊救急部の整備と麻酔学科主任教授という一人何役もの激務を兼ねておられたことを私達はよく知っており、先生の生真面目なまでの責任感の強さにただ感謝する他はないのであります。今にして思えば前穂高東面に刻み込まれた松高ルート、松高ルンゼを始めとする松本高校全盛時代の頃のお話をもう少しお聞きしておくべきであったということが心残りとなってしまいました。

1946年（昭21）10月末、中又白奥壁をやろうということになって佐谷健吉氏（浪高、東大ＯＢ、故人）、松丸秀夫氏（弘前高、東大ＯＢ）のお供をして出掛けたことがありました。上高地で松本高校の冬山偵察の一行と出合い、そこで彼らの輝ける先輩である恩地　裕という名前を聞いたのが先生のお名前を聞いた最初でありました。旧制最後であろう一行のリーダーに小谷さんというお名前が聞かれましたが恐らく京都の小谷隆一氏ではなかったかと思います。徳沢小舎から梓川を渡って直ぐに始る荒れ果てた岩壁の登攀はすさまじく、ホールドもステップも見つからない風化した壁面をずるずる滑り落ち乍ら登る絶食の何時間かの後、私達は日没寸前に辛うじて奥又白の池に達し、松高ルンゼの途中で寒気と空腹でのビバークをすることになりました。その夜私は両氏から明神最南峰より前穂高へと連る東壁の華々しい登攀史を聞かされました。北穂高滝谷を中心とする東京農大、甲南高校、早稲田などによる所謂ジャンダルム飛騨側の開拓後、昭和10年より15年に至る前穂高東面という新しい目標に向った慈恵医大、東京商大、大阪薬専、慶応、早稲田の各隊の中で最も注目すべき活躍をしたのが昭和13年秋松高によって行われた四峰正面オーバーハングを突破する「松高ルート」の完登とそれにつゞく厳冬期の東壁Ａフェース、Ｂフェースなどの直登であり、その原動力の一人が若き恩地先生でありました。その時の記録は先生の遺稿として本紙に転載しました。これをお読みになれば先生が当代一流のアルピニストであったこと

がお判り頂けると思います。行年68才。

恩地先生を失う4年前の1984年（昭59）5月10日、私達は水野祥太郎先生という偉大な先輩に先立たれました。先生の当会々長は昭和 57 年より僅か2年間でありましたが、創生期より本学山岳部のバックボーンであったことは云うまでもありません。「用件は3分以内に願います」と大書された市大整形外科教授室で何時間も山の話をされたこと、毎週土曜に聞かれた阪大教授室でのＪＡＣ関西支部長時代の集りのこと、ＪＡＣ会長候補に指命され受諾の意向を尋ねたとき狭心症で入院されていた川崎医大学長の時代のこと、そして何よりもうれしかったのは何年振りかで帰阪された先生が大よろこびで私達山岳会の会長をひきうけて頂いたときのことでありました。「医者のすすめで入院してしまったのでカラコルム遠征隊のことをよろしく頼みます」と云うお電話が先生との最後になってしまいましたが、その頃病床でしたゝめられたであろう阪大第一外科同窓会々誌への原稿と、ＪＡＣ会報に載せた私の追悼文を本紙に移して先生を偲ぶよすがにしたいと思います。

そしてもう一人私と同級であった松久　博氏（M26）が1988年（昭63）3月になくなられたことをお知らせしなければならなくなりました。

考えてみますと、最近私達はたくさんの偉大な登山の先輩達を失っているのに気付きます。3回に亘るＪＡＣマナスル遠征隊の主力クライマーであった慶応ＯＢの加藤喜一郎氏が1987年（昭62年）12月肝癌で急逝されました。彼のことは長い在阪時代に当会の客員の様な形でゴルフや集会に来ていただき、あの豪放で磊落（らいらく）な気性に触れた会員も多いことゝ思います。

海外ではエレベスト東北稜のＮ・Ｅ・オーデル（1890－1987）が98才でなくなっています。彼は1924年の第3次エレベストでマロリーとアービンをサポートし、酸素を背負った2人がセカンドステップの8,573ｍを登ってゆくのを見た最後の目撃者であったことで有名でありますが、そのアクジデントのあと下のＣ6より2人を捜しに2度に亘り8,200ｍを超えて登っていることや、この遠征で7,000ｍ以上に11日間滞在したこと、そして1936年のＢ．テイルマンとのナンダデビー初登の時46才であったことは高処医学上貴重なる記録でありました。

ヘルベルト　テッチー（1912－1987)、あの当時（1954）としては極めてユニークであったアルパインスタイルによるチョーユー（8,210ｍ）の第一登をしかも強力なレイモン・ランベールのスイス隊と競合しながらポストモンスーンに登り切ったオーストリアの登山家も亡くなりました。一緒に登頂したパサンダワ

ラマも既に不帰の人になっています。そして日本でも有名なシェルパのアンニマ（1931－1986）も故郷のダーグリンで死亡しました。55才であったとヒマラヤンヂャーナルは書いています。彼は1952年のあの厳しかったスイス隊のエベレストに参加し、ルネ　デッテールによって「死の臭いのする」と書かれた11月のサウスコルに初めて立った1人であり、翌1953年のハントのエベレスでは登頂前日に8,500m近く迄荷上げをして登頂の途を拓いた後、その年の秋には今西寿雄氏の京大アンナプルナⅣの最終キャンプへの荷上げを行った本当の意味での優れたシェルパでありました。私はこれらの方々が山で死ななかったから良かったとは思っていません。水野、恩地両先生も加藤喜一郎氏も別の山登りをしていてそして亡くなられたと思われるからです。人類最初の八千米峰に登頂した後、モーリス　エルヅオーグは足と手の指の全てを失って再び山に登ることはなかったけれども、フランス山岳会の会長を経て最後にはスポーツ大臣に迄なりました。一方、ルイ　ラシュナルはスキー事故で死亡し、リオネル　テレイは国内の岸壁で命をおとしました。私達にとっては山岳部を卒業した後にこそ本当の山登りが始まるのかも知れません。エルゾーグは「処女峰アンナプルナ」の終章を次の文章で結んでいます。

“人間の生涯にはさまざまなアンナプルナがある”つまり人夫々に別々の山登りがあるのかも知れません。

1985年度を振り返って

水　川　朋　吉

まずは事故の非常に多かった事をお詫びしなくてはならない。安全登山をテーマの一つに置く我部を率いた者として誠に恥しい思いである。幸い死亡にまでは至らなかったものの、事故を機に二名の退部者を出した事は悔やんでも余りある。僅かな慰めは彼等が退部後も独自に山岳活動を楽しんでいる事だ。

処で、これらの事故で痛感したのは、幾ら注意しようとも予測の仕切れない山の危険の多様さと、安全登山を標榜し、事故を未然に防ぐ事に注力してきた我部が、いざ起きてしまった事故への対処のノウハウが蓄積されていなかった事である。何も本当に事故を経験せずとも日頃の研究と訓練、他の事故の教訓から多く学ぶ事が出来たはずであった。この年の事故が、これらの反省に繋がり、事故を起こさない事はもとよりいざという時に、適格な判断、行動のとれる、強いクラブの育成に生かされれば幸いである。（特に前後して、中之島山岳部の橋本氏、そして私の学舎での先輩であった水戸氏の遭難は見逃す事なくよく研究されたい。それが亡き学友へのはなむけともなると信じている。）私が在学中も遭難研究のレクチャーへの取り込み、救助募金の設立等、山岳会の助力を得ながら試みてきたが、私の力不足でまだまだ充実したものとは言えないままであった。後輩諸氏が引き継れ、更に発展されん事を切に願うものである。

さて、1985年は一言で剣の年であった。最上級生の指向がその年の山行に深く影響するものであるが、こと私の同期は一回生の時より剣の魅力に憑かれ後輩にも剣愛好者（？）が多かったせいもあり、現役全員であの頂を見詰めつづけた感がある。一回生の初めての冬山、早月尾根の2600ｍ　BCで時ならず晴天に恵まれ、月光に輝く北方稜線の嶺を真の当りにした時から、私達の剣への思い入れが始まった。特に雪の北方稜線は積雪量、走破に要する時間、天候の厳しさ、技術面での困難さといったあらゆる面から、学生山岳生活の最終目標の一つたるべき課題であった。残念ながら赤谷までで敗退となったが、今でもあの時、違う決断をしておればと考えると、心が締めつけられる。己れの実力を省みない又、女々しい話ではあるが私達のあの稜への思いを汲み取って欲しい。

この様に書いていくといかにも私が四年間岳生生活に打ち込み続けた様に思

われるかも知れないが、恥かしながらそうとも言い切れない。一つの大きな転機は１９１４年のサンゲ遠征であった。山の世界の大きさ、すばらしさを改めて知ったのである。日本の山とはまったく違った世界への感動が逆に又、日本の山への再認識となった。本来ならこの海外の山を後輩にも紹介すべき立場にいながら、別の道を歩み始めてしまった。今春、戸叶を中心にヒマラヤへ right expechition を計画中とのことで、私としてはできる限りの助言、助力を惜しまないつもりである。同時この遠征が大きな目標へつながってゆく事を願っている。

大きな目標の設定……これこそ今の我部に欠けるものの一つではなかろうか。それは常に８０００ｍへの挑戦や新規ルート開拓ばかりを意味しない。だが己れが「これぞ」と思う目標の設立は非常に重要であると思う。その目標に拘束されるマイナス面はあるが、日々の努力がその目標へ繋がり、仲間の力が集結されてゆく感動に学生時代の山の意味を私は見出す。現在の学生山岳部衰退の原因の一つにもそういう面があるのではなかろうか。山岳部に限らず体育会系運動部の不振にはこの様な目標の喪失、固定化、陳腐化が作用していると思う。私の入社した企業に同期として東大山岳部の主将を務め、Ｋ７初登の牽引力となった神沢氏、慶応の主将であった小川氏が入り、一年後には上智の主将の服部君が入社してきた。彼等の話を通じて受けた彼等のクラブの印象は実に agressivel で challengable だということだった。我部以上に伝統を重んじ、ともすれば、その伝統にあぐらをかいてしまいやすい体質の中で、常に新たな、そして己れにとっての山を模索し続けていたのだ。そして、他大学の更には社会人クラブとの交流を通じ、外部からの刺激を求めている。人員的に苦しく、少数で閉鎖されがちな現在の我部で、この事実は参考になるかと思う。

本来１９８５年を総括すべきページを後輩諸氏にはおせっかいな、先輩方にはうさんくさい稚拙な山論議まがいなもので埋めてしまったことをお詫び致します。同時に我部が「更なる高み」を目指して発展されん事を切にお祈り申します。日々を雑事に埋沈させている私ですが、心は岳友達と伴に、あの銀嶺の上にあります。

1986年度をふり返って

戸叶　聡

部員構成からくる制約、前年度である８５年度に事故が大なり小なり続いたこと、以上の２点により、クラブの態勢を立て直し来年度以降へとつながる活躍の基礎をつくる年と８６年度をとらえ、地道に山行を行って実力を養っていくことを目標に活動を行っていった。しかしリーダーである私自身の力不足もあり、全体に萎縮気味の内容に終ってしまったようだ。春山は直前に２年部員がケガをして合宿に参加できなくなったこともあって、当初予定していた表銀を放棄して笠～槍の従走に変更したし、５月の岳沢、夏の涸沢定着も、ともに決まり切ったメニューを繰り返すことに終始した。冬は全員で突坂尾根から白馬岳を目指したが、好条件に恵まれたこともあって、６８年度を常に意識して計画を立ててきた我々にとっては、少々手応に欠けた感じは否めない。最近の正月前後の好天と装備の著しい向上を考えると、登頂後の日本海までの縦走は十分可能であったと思われるし、それが進歩というものであろう。

大学山岳部は、十分な時間も若さによる体力もある訳で、もっとおもしろい活動が出来て当然であろう。経験や判断力はともかくとして、体力と技術ではかなりいい線までいける筈である。部員構成の制約を乗り越えて、今後もっと創造的でユニークな活動が行われることを期待したい。

１９８７年度をふり返って

来　村　宗　紀

本年度を振り返ってまず思うのは、退部者のことである。近年、部員が減少する傾向が続き、なんとかその傾向にストップをかけなければならないと思っていた。

そこで春の部員の勧誘の時期に工夫を凝らそうと思っていた。しかしなんだかんだと思ったようにはできずどうなることかと思っていたところ、昨年度より多くの入部希望者がきて喜んでいた。

しかし彼らもまず夏までに消えてしまうのもいて、夏合宿では４人になっていた。それでも近年では上出来なので安心していたところ、冬山までに３人がやめて寂しいことに一人だけになってしまった。

そこにはいろいろな個人的理由があって、途中退部者を出してしまったわれわれリーダー層にも十分責任はあると思うが、基本的に個人のやる気の問題であるのと感じられた。それも我々に問題があると言われたらそれまでである。

実際、最近の傾向として各自の山行日数が減ってきていることにも表われているように、山に対する打ち込みかたが足りないような気がする。それは自分にも言え、まずいと思っているところである。一方正直なところそれはそれでいいのではないかという気持ちもある。しかしそのように流されていては、なんの進歩もない。ＯＢになって山からはなれてしまうのも、忙しさを理由にしてただ流されているような気がして、最近の自分のことを振り返ってそれではだめだと強く思う。いま１９８９年の３月にネパールに行く計画を進めているが、現役からの参加が無いのが寂しい。

とにかく後輩に伝えたいことは、なんでも良いからやりたいことを積極的にやって欲しいという当り前のことである。ついでに言うと我々の学年と１年下の学年で上級生になってからの途中退部者がでたが、今後はそのようなことがないことを期待する。

さて本年度を振り返るとやはり冬山が大きな山場であったが、異常な気象で拍子抜けになってしまった。しかしその過程においてでてきた問題をなんとか処理したことは、今後につながると思っている。

目　　次

Ⅰ　大阪大学山岳部（現役）の部

1985年度（昭和60年度）活動記録

１９８５年度現役部員

５月山行

表銀座～裏銀座 縦走 …… 1

新歓合宿

別山平 …… 3

夏山合宿

真妙定着 …… 5

夏山縦走

朝日岳～室堂 縦走 …… 11

南アルプス縦走 …… 12

上高地～親不知 縦走 …… 13

個人山行

八ケ岳 縦走 …… 14

黒部下ノ廊下 …… 14

頸城 縦走 …… 14

偵察山行

剣岳・北仙人尾根偵察 …… 15

燕～槍～中崎尾根 …… 16

アイゼン合宿

木曽・御岳 …… 17

冬山合宿

剣岳・北仙人尾根 …… 18

1986年度（昭和61年度）活動記録

１９８６年度現役部員

プレ春山

八ケ岳定着 …… 21

春山合宿

笠ケ岳～槍ケ岳 …… 21

ポスト春山

天狗尾根 …… 22

５月山行

穂高・岳沢新歓合宿 …… 23

白馬主稜 …… 24

春山偵察山行

黒部五郎南西尾根～裏銀 …… 25

夏山合宿

涸　沢 …… 25

夏山縦走

尾瀬～平ケ岳 縦走 …… 33

谷川岳定着 …… 34

大雪山系縦走 …… 39

後立山縦走 …… 39

個人山行

大峰・孔雀又谷 …… 39

穂高屏風岩 …… 40

剣山・三嶺（四国） …… 41

偵察山行

白馬・突坂尾根偵察 …… 41

赤谷尾根～剣岳 …… 42

白馬～八方尾根 …… 44

アイゼン合宿

木曽・御岳 …… 45

冬山合宿

白馬・突坂尾根 …… 46

1987年度（昭和62年度）活動記録

１９８７年度現役員部員

プレ春山

八ケ岳定着 …… 49

春山合宿

遠見尾根～白馬岳 …… 49

赤谷尾根～剣岳 …… 51

新歓合宿

涸　沢 …… 52

Ｓ字峡横断・ガンドウ尾根偵察と

八ツ峰敗退 …… 55

夏山定着

剣岳・真砂 …… 57

夏山縦走
甲斐駒赤石沢と北岳バットレス … 63
東北岩井又谷 …… 67
南アルプス縦走 …… 68
個人山行
大峰・下多古谷 …… 69
台高（東ノ川本流）敗退 …… 69
アイゼン合宿
御　岳 …… 69
偵察山行
明神西南稜～槍ケ岳 …… 70
明神西南稜～槍 …… 75

大阪大学山学部現役名簿 …… 79

Ⅱ　大阪大学山岳会の部

追　　悼

水野祥太郎先生 …… 81
パウル エルニ氏の便り … 水野祥太郎 81
追　悼 …… 徳永篤司 84
恩地裕先生 …… 85
恩地裕氏の前穂奥又白側に於ける行動
記録及び登攀記 …… 85
恩地裕先生を偲ぶ …… 大工原恭 93
松久博君を偲んで …… 徳永篤司 95

昭和62年度行事報告

・総　会 …… 97
・栂ノ木寮例会 …… 98
・東京支部懇親会 …… 100

栂ノ木寮開設25周年記念

・記念式典 …… 102
・栂ノ木寮建設からＵＳＡ ……
山本彰三 103
・栂ノ木寮建設時の山岳部 ……
梶本孝治 103
・私の青春25年 …… 畑中　薫 104

会員寄稿

・篠田先生語録（その一）……
山本光二 105
・ヒマラヤ・トレッキング雑感 ……
辻川　真 106
・谷川岳 滝沢リッジ ……
越智栄次郎 108

会員の近況 …… 109
山岳会記録 …… 114
名簿の訂正ならびに変更 …… 116

I　大阪大学山岳部の部

１９８５年度（昭和６０年度）活動記録

〝奥大日尾根より剣岳・東大谷〟
（記録は、時報前号）

１９８５年度　現　役　部　員

C・L	水川朋吉	理物	4	(4)	
	今村義弘	工機	M2	(4)	
	大西啓之	人	3	(4)	
	宮田俊一	工化	3	(4)	
S・L	戸叶　聡	経	2	(3)	
	奥山慎也	基生	2	(2)	
	来村宗紀	工物	2	(2)	
	鈴木寛道	工精	2	(2)	
	藤田繁雄	医	2	(2)	
	紫藤圭介	理物	1	(1)	
	柴田　強	基物	1	(1)	
	東條公資	基機	1	(1)	
	南　志人	人	1	(1)	
	内山久敏	理生	1	(1)	(退部)

注）左から
役職・氏名・学部・学科・学年・学年（山岳部）を示す

5　月　山　行

表銀座～裏銀座 縦走

期　間　　4月28日～5月5日
参加者　　戸叶（L）、藤田

4月28日　①
出発（7：15）－合戦小屋（10：35）－燕山荘（12：10）
燕岳アタック　出発（12：50）－燕岳（13：20）－帰幕（14：10）
爽やかな五月晴れの中、中房温泉を出発する。はっきりしたトレースもあり、快調にとばす。樹林帯を抜けると急に日差しがきつい。合戦小屋からの登りは雪がくさっていて辛どいが、稜線まで上ると、すぐ燕山荘。アタックは奇岩の間を縫うように行くが、問題はない。

4月29日　①　沈澱
藤田が夜半より雪盲。昨日サングラスをしなかったためで、激痛に苦しむ。予防できるものを怠慢でなってしまい、折角の好天をフイにしてしまった。

4月30日　①
出発（5：50）－大天井岳（9：00）－西岳（14：55）
雪盲も回復したので出発する。まず蛙岩は、第1岩峰を右から巻き、第2岩峰は中央の割れ目を越え、第3岩峰を右から巻く。大天井への登りはきつく、積雪期であれば完全にウインド・クラストしそう。赤岩岳は所々岩が露出しており、しかもそれらが全て脆い。ずっと稜通しに進んだので、ピークからのリッヂは、テープを手掛りにして下る。ここから西岳迄は問題ナシ。

5月1日　①
出発（5：25）－水俣乗越（7：10）－槍の肩（11：50）
アタック　出発（12：05）－槍ケ岳（12：25）－肩（13：05）
肩発（13：20）－千丈乗越（14：00）
水俣乗越への下りは急でクラストしていて、懸垂2P。東鎌はずっとやせている。ルートは槍沢側にとってある。2595mからの下りはかなり急だ。そこからはどんどん迫ってくる槍の山姿を楽しみつつひたすら高度を稼ぐ。アタックは問題ナシ。まだ早いので千丈乗越まで下ってドン。

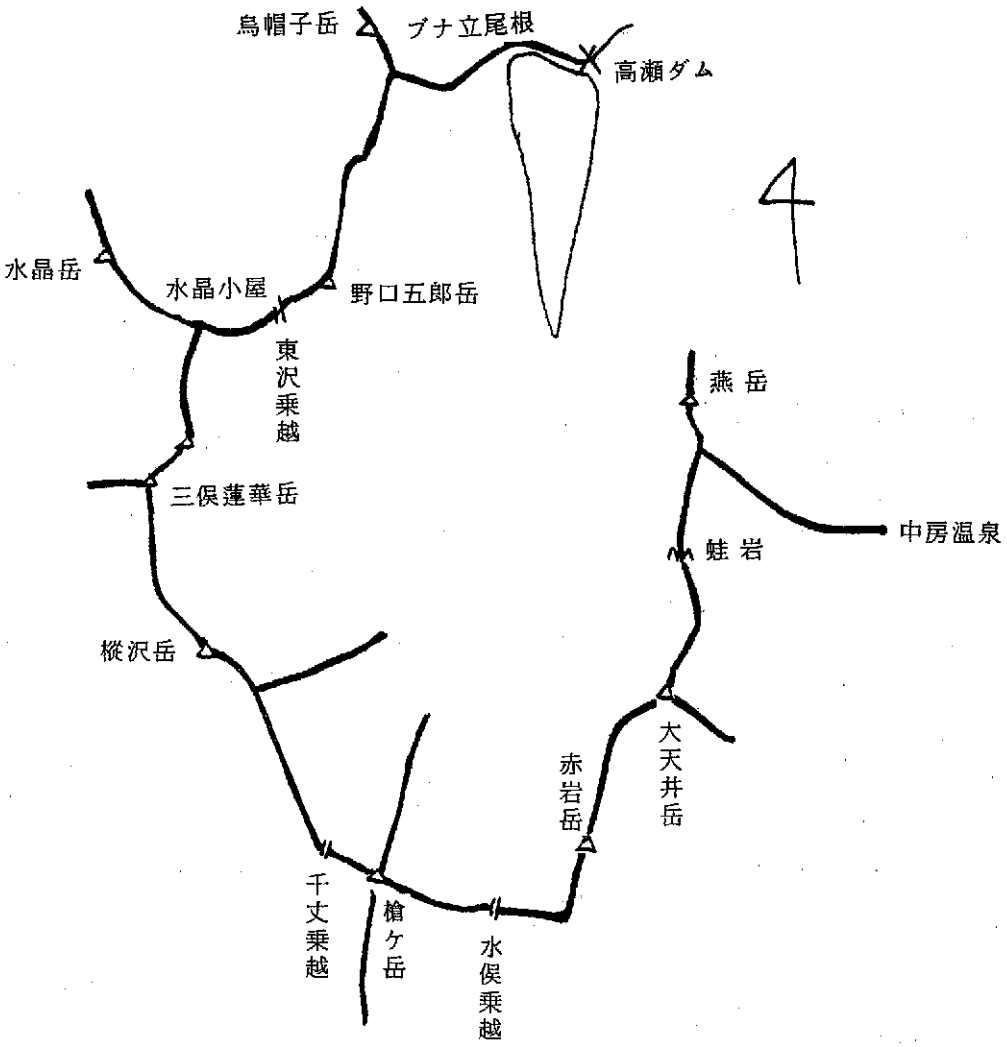
5月2日　①
出発（5：45）－双六小屋（9：40）－三俣山荘（13：45）
西鎌はアップダウンの繰返しが多いが、雪が少なく、苦もなく下る。樅沢岳への登りがやや細い他は問題ない。ルートは全て尾根通しにとったため、ラッセルを所々強いられる。三俣のピークからはシリセードで一気に小屋へ。連日素晴しい天気で気分も明るい。

5月3日　①
出発（5：55）－水晶小屋（9：25）－水晶アタック（9：45～11：30）－東沢乗越（12：50）－真砂岳手前TS（14：25）
ワリモ岳からのルートファインディングに注意する他は、小屋までラッセルが続く。山スキーヤーが楽しそうに滑るのを横目に見てのラッセルはまた格別だ。水晶アタックは、左から回りこんでルンゼをつめた所で敗退。同じルンゼを下るのにザイル1Pだす。弱気だったのが敗退の原因で、もっとしつこく強気にとりくめば行けたはずだ。水晶小屋からの下り口付近はやや急で、乗越までやせ尾根が続く。

5月4日　①
出発（5：40）－ブナ立尾根下り口（9：25）－烏帽子アタック（9：40－12：00）－降り口発（12：20）－ブナ立取付（15：50）
ブナ立降り口まで快調にとばす。烏帽子は楽しい山だ。アタック自体は全く問題ナシ。ブナ立尾根には、はっきりとしたトレースがあり、赤布も所々に打ってあり迷うことはない。

5月5日　◎
出発（7：00）－七倉（8：45）

長いトンネルを幾つもくぐって七倉の登山指導所へ。タッチの差でバスに乗り遅れたが、指導所の人の車に乗せて貰えた。連日の好天で顔は日焼けでボロボロ、足は靴ずれでベロベロだが、充実した山行であった。　　（記　藤田）



☆表銀～裏銀概念図

新　歓　合　宿

別山平

期　間　　4月29日～5月5日
参加者　　水川（L）、今村、大西、宮田、奥山、来村、鈴木、紫藤、柴田、東條

4月29日　○
天狗平（10：10）－別山平B.C（14：20）
4月30日　①のち◎
BC（5：50）－雪上訓練－B.C（12：00）
前剣の斜面でアイゼン歩行、キックステップ、B.C上部の斜面で滑落停止、確保の練習を行なった。
5月1日　○
・剣御前遠足　大西、紫藤、柴田、東條
B.C（5：45）－剣御前（6：40）－別山（7：50）－B.C（8：35）
・本峰遠足　宮田、鈴木、来村
B.C（5：45）－本峰（8：35）－B.C（12：00）
・立山中央稜　水川、奥山
B.C（5：30）－富士折立（15：05）－B.C（17：05）
5月2日　○
・雪訓　大西、奥山、来村、鈴木、紫藤、柴田、東條
B.C（5：45）－B.C（9：50）
・今村入山
室堂（9：30）－B.C（14：30）
・八ツ峰主稜ビバーク　水川、宮田
B.C（5：40）－三稜取り付き（6：40）－一峰（12：15）－5.6のコル（15：30）
三稜ではP4，P6でそれぞれザイル2ピッチ、一峰直下で1ピッチ、八ツ峰の主稜に入ってからは、こまめな懸垂下降を繰り返した。1峰の下り20m、3峰の下り15m、4峰の下り25m、5峰の下りで計60m、5・6のコルでのツエルトビバークは、さほど寒くもなく快適だったが、今日入山した今村の差入れの食料を逃したのは痛かった。
5月3日　○
・八ツ峰主稜ビバーク
5．6のコル（5：40）－本峰（9：00）－B.C（11：00）
八ツ峰の主稜にはしっかりした踏み跡があり特に問題なし。
・黒部別山遠足　今村、奥山、来村、紫藤、東條
B.C（5：50）－別山北峰（9：55）－B.C（15：20）
・立山中央山稜　大西、鈴木
B.C（5：20）－富士折立（12：30）－B.C（13：45）
5月4日　○
・立山遠足　今村、水川、紫藤、柴田、東條
B.C（5：30）－大汝山（9：05）－B.C（11：50）
・源次郎尾根主稜　大西、宮田、奥山、来村
B.C（5：20）－一峰（8：15）－本峰（10：45）－B.C（13：10）
この日鈴木が下山、又今村の足の調子がおもわしくないため、明日全員下山と決まる。
5月5日　①
B.C（6：50）－室堂（9：00）
連日の快晴のおかげで、計画をすべて消化し、充実した合宿となった。

（記　宮田）

夏山合宿行動概要

	今村	大西	水川	宮田	戸叶	奥山	来村	鈴木	藤田	内山	柴田	紫藤	東條	南	森藤
16・17		入山													
18		雪訓						TK	雪訓						
19		八ツ峰	下廊下	チンネ敗退		八ツ峰	チンネ敗退	八ツ峰	下廊下			八ツ峰	チンネ敗退	八ツ峰	
20		魚津高～左方		Aフェース	八ツ峰ビバーク	魚津高～左方	八ツ峰	Aフェース	ビバーク			Aフェース	八ツ峰	Aフェース	
21	人山	別山沢	RCC	大窓ビバーク		別山沢		TK	Cフェース RCC			別山沢		大窓ビバーク	
22	マイナースラブ	中央チムニー	チンネ敗退		マイナースラブ	雪訓		TK	チンネ敗退	TK	雪訓		中央チムニー		
23	内山搬出														
		～	～					～		～下山		～			
24	源次郎	立山ビバーク	富山付添	源治郎	TK	源治郎		立山ビバーク	TK		源治郎	立山ビバーク	源治郎		
25	下山	丸東緑	TK	丸東緑	Bフェース	TK	Bフェース 京大				Bフェース 京大		TK		入山
26			源治郎		本峰南壁 A 2		久留米	源治郎			TK	源治郎	本峰南壁 A 2		久留米
27		源 I	雪訓			源 I	雪訓	左稜線	雪訓		雪訓				左稜線
28		本峰南壁 A Ø		左稜線	北新～左方	TK	左稜線	TK	北新～左方		本峰南壁 A Ø		Cフェース 剣稜会		
29		仙人池		富大	久留米	仙人池	TK	富大	久留米		仙人池	TK	仙人池	TK	仙人池
30		下山									下山				

夏　山　合　宿

真砂定着

期　間　　7月16日～7月30日
参加者　　水川（L）、今村、大西、宮田、戸叶、奥山、来村、鈴木、藤田、内山、紫藤、柴田、東條、南、森藤（OB）

7月16日　①
ダム（9：30）－内蔵助谷出合（13：00）－内蔵助平（18：30）

7月17日　◎→●
出発（7：15）－ハシゴ段乗越（13：20）－真砂BC（17：00）
増水のため内蔵助平付近で時間をとられたことと、バテる新人の出たことにより時間がかかった。

7月18日　◎
BC（6：40）－雪訓（7：30～11：00）－BC（11：45）
長次郎Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ出合付近で、キックステップ・アイゼン歩行・滑落停止を行う。雪がしまっていて、よい雪訓になった。

7月19日　◎→●→◎

〈八ツ峰上半〉

BC（5：05）－V・Ⅵのコル（7：40～9：10）－池の谷乗越（11：40）－BC（12：50）
V・Ⅵのコルでルートを間違え、Aフェースの頭へ登ってしまい、懸垂でコルに戻る。Ⅵ峰の下りで15mの懸垂をし、トラバース気味に三の窓の頭とチンネの頭のコルに出て、池ノ谷ガリーへ出る。ガリーへの下りでザイル20m。

〈チンネ敗退〉

BC（4：55）－チンネの取付（9：45）－下降終了（11：00）－BC（14：30）
宮田・東條が中央チムニー、戸叶・来村が北新ルートに各々取付くが、1P登った頃より雨がひどくなり敗退を決め、懸垂下降後二股経由でBCに戻る。

〈下の廊下ビバーク〉

BC（5：10）－内蔵助谷出合（9：15）－新越沢出合（12：20）－敗退決定（13：15）－内蔵助谷出合BS（17：30）
内蔵助谷出合の橋は崩壊しており、fix通過をする。新越沢出合を過ぎた辺の左岸の雪渓の処理に困る。まず登山道を進みスノーブリッジをくぐり雪渓の下にもぐりシュルントから上に出たが亀裂が多く引き返す。次に雪渓の下を巻こうとしたが、途中通れない所があり、そこから雪渓に上がりこれを越すが、そこからの道が見当たらず、藤田topで岩を20m登り偵察するが、適当なルートが見つからず敗退する。

7月20日　◎→◒

〈下廊下ビバークの続き〉

BS（4：50）－ハシゴ段乗越（8：20）－BC（9：40）

〈Ⅵ峰Aフェース魚津高ルート〉

BC（5：10）－取付（7：10）－宮田・南開始（8：10）－鈴木・紫藤開始（9：20）－終了（11：30）－BC（12：50）
魚津高は人気が高く待ち時間が長いので、朝早く出で一番に取付くのが良い。全体に気持ちのよいルートで、1P目はⅢ⁺の割には易しい。

〈チンネ魚津高～左方カンテ〉

BC（5：00）－取付（8：50）－開始（9：15）－終了（14：45）－BC（16：20）
1P：快適なフェースクライム

2Ｐ：気持ち悪いＡØのトラバース
3Ｐ：奥山トップでバンド状の所に取付こうとして新しいピンを不用意につかみ、ピンが抜けてビレーポイントまで４ｍのフォール。トップを大西に代わる。残置ピンはほとんどなく、２本ピンを打つが、岩が脆くあまり効かない。
4Ｐ：易しいがピンはない。
5～8Ｐ：左方カンテに入る。快適な人工２Ｐで左稜線に出、ザイルの流れに注意しながらナイフリッジをいくと終了。

〈八ツ峰ビバーク〉

ＢＣ（５：１５）－Ⅰ峰（８：２５）－八ツ峰の頭（１３：４５）－小窓ＢＳ（１６：１０）

Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼの出合付近の雪渓の状態が不安なので左側の草付の斜面を登り時間をくう。巻くにしても出来るだけ早くルンゼに戻った方がよい。小窓の頭から小窓への下降路は、小窓の直前で２つに分れるが、どちらにしてもブッシュが少しある。

7月21日　①→◎→◒

〈八ツ峰ビバークの続き〉

ＢＳ（４：３０）－池の平山（５：５０）－二股（９：１５）－ＢＣ（１０：１０）

我々は池の平山を通ったが、小窓雪渓を下り右岸に滝のある辺から池の平小屋へトラバースする道もあり、エスケープルートとして使える。北股は雪渓の状態がやや悪く、ガレ場のトラバースを強いられた。

〈別山沢遠足〉

ＢＣ（５：３５）－別山（９：２０）－剣沢（１０：３０）－ＢＣ（１１：３０）

１Ｐ目の途中で鈴木の調子が悪くなり、一人どＢＣに引返す。別山沢源頭から頂上までの間は少しルートがわかりにくい。

〈Ⅵ峰ＣフェースＲＣＣルート〉

ＢＣ（５：３５）－取付（７：３０）－水川・柴田開始（８：１０）－藤田・内山開始（９：２５）－終了（１１：４０）－ＢＣ（１４：００）

Ｃフェースはどこでも登れそうなので却ってルートファインディングが難しく、しかもルートをはずすと意外といやらしい。３・４Ｐ目はルートを間違え（もしかしたら右方ルート？）時間がかかる。登攀終了後長次郎を下降中、内山がグリセードに失敗しケガをする。

（新人感想）

初めての岩登りということもあり緊張気味であった。「次は何をすべきか」ということが、なかなか頭に浮んでこずもたついたのは、反省すべき点であった。特に、その場その場に適したセルフビレーの取り方を、すぐに見極められるようになるには、時間がかかりそうである。登攀そのものについては、岩トレの成果が発揮できたと思う。

〈大窓ビバーク〉

ＢＣ（５：２０）－仙人池（７：１５）－池の平山（９：３５）－大窓ＢＳ（１２：５５）

池の平山以北では何度かザイルを出し、南を確保する。大窓には早く着いたが、大窓より先へ行くと遅くなりそうなので、ここまでとする。大窓には水場はなく、汚い雪渓の雪を融して使用する。

7月22日　①→◎

〈大窓ビバークの続き〉

ＢＳ（４：３０）－小窓（９：３５）－二股（１１：０５）－ＢＣ（１２：００）

小窓雪渓経由でＢＣに戻る。

〈雪　訓〉

ＢＣ（５：３０）－雪訓（７：２０～９：００）－ＢＣ（９：４５）

平蔵谷Ｓ字雪渓下でキックステップと滑落停止を行う。中央ルンゼは水が流れ登れそうにない。

〈チンネ中央チムニー〉

ＢＣ（５：１５）－取付（９：０５）－終了

（１２：３０）－ＢＣ（１４：４０）

１Ｐ目はチムニー内部より取付き、中程で右側のフェースをトラバースしリッジへ出るが、このトラバースがぬれており岩も脆く不快。２Ｐ目はほとんどチムニー内を登り、３Ｐ目は傾斜も落ちてくるが落石に注意が必要。ａバンドの出だしは完全なトラバースである。ｂクラックの取付は、ビレー点の方が上にあるので少々苦しい。

〈チンネ敗退〉

ＢＣ（５：１５）－取付（９：３０）－敗退決定（１１：４０）－ＢＣ（１４：３５）

アプローチの左方ルンゼからハング下テラスまでのバンドの取付が崩壊したらしく、ザックをかついだままではバンドに回りこめず、水川がザイルを付け偵察するが、戻れず支点を打ってテンションをかけて戻るような状態で、敗退を決定する。なお予定ルートは左下左方でした。

〈マイナースラブ〉

ＢＣ（５：２０）－取付（６：４５）－終了（１１：５０）－ＢＣ（１８：００）

三の沢は雪渓の状態が不安定で側壁のへつりを強いられた。マイナースラブは、濡れた外傾ホールドを登る２Ｐ目と、核心の１１Ｐ目を除けば、易しく楽しいスラブ登りに終始する快適なルートで、ピンも少なくルートファインディグが楽しめ、また楽な下降路もないので、岩登りというよりもむしろ山登りの楽しめる好ルートである。下降は二の沢を懸垂５Ｐを交え下った。

７月２３日　①

〈内山搬出〉

ＢＣ（５：５０）－剣沢（９：００）－別山乗越（１０：４５）－ＢＣ（１２：００）……今村、来村、柴田、東條、南
－ＢＣ（１６：１５）……宮田、戸叶、藤田
－室堂（１４：２０）……水川、大西、鈴木
紫藤

２１日にＡフェース終了後、長次郎雪渓を下降中転倒して内山がケガをする。自力では歩けない状態なので、とりあえず２１日にはＢＣまで下ろし、２２日は様子を見、２３日に搬出することにする。内山を背負子にのせ交代でかついで行く。室堂からは救急車で富山へ。水川が付き添う。診察では、右足くるぶし外側に骨にヒビが入っているということで、２５日まで石膏を固めるため入院。

〈立山ビバーク〉

室堂発（１５：１０）－大汝ＢＳ（１７：５５）

内山を室堂まで下ろしたのち、ビバークに行く。

７月２４日　①

〈立山ビバークの続き〉

ＢＳ（５：１５）－剣沢（６：５０）－ＢＣ（８：００）

３０００ｍでのビバークはやはり寒かった。朝は御来光が鹿島槍より昇り綺麗だった。

〈水川帰幕〉

室堂（１３：５０）－ＢＣ（１６：０５）

〈源治郎遠足〉

ＢＣ（５：１５）－Ｉ峰（１０：１０）－本峰（１２：２０）－ＢＣ（１５：２０）

ルンゼより取付こうとするが、かなり難しいので、左側のブッシュ帯を登り、途中からルンゼに戻る。ルンゼ内で一ケ所ザイル使用。

７月２５日　①

〈Ｂフェース京大ルート〉

ＢＣ（４：５５）－取付（６：４０）－来村・紫藤開始（８：００）－戸叶・柴田開始（８：３０）－鈴木・藤田開始（８：５０）－終了（１０：５０）－ＢＣ（１２：３０）

取付で順番待ち中、雪のブロックの崩壊があり、危うく難をのがれる。両端が壁に接してい

ないブロックは要注意だ。ルートはやや脆いものの階段状で易しい。

〈丸山東壁緑ルート〉

ＢＣ（４：３０）－取付（７：００）－中央バンド（１２：００）－終了（１５：３０）－懸垂終了（１８：１５）－内蔵助平ＢＳ（１９：４５）

１Ｐ目このルート唯一のフリーの多いピッチだが濡れておりＡ１でいく。最後の４ｍの凹角は凹角内に草がありフリーとＡ１のミックスとなる。右のリッジにはボルトラダーがあった。４０ｍザイルでは苦しいくらい。２Ｐ目スラブのＡ１。Ｔ２手前の草付を右にトラバースする所はいやらしく手間どる。３Ｐ目快適なＡ１。三日目ハングの下でビレー。４Ｐ目ハングは容易。４～５Ｐ目のスラブは高度感があり素敵。６Ｐ目はＡ１で直上後、右へフリーとＡØのミックスでトラバース。８０㎝程の小ハングの乗越で時間を食う。８Ｐ目の右壁のＡ１は効きの悪いピトンが２，３あり注意が必要。９Ｐ目が核心。ハングは３段に分かれ計５ｍの張り出し。１段目は大きく手強いが、２・３段目はそれ程でもない。１０～１１Ｐ目はＡ１と木登りのミックス。１１Ｐ目の終了点から上部４Ｐ下部６Ｐの懸垂。大ハングの懸垂は４０ｍザイルでは怖く、少なくとも４５ｍ出来れば５０ｍザイルを使うべきだ。

７月２６日　①

〈丸東の続き〉

ＢＳ（６：００）－ＢＣ（８：１０）

〈源治郎遠足〉

ＢＣ（５：０５）－Ⅰ・Ⅱのコル（９：３０）－ＢＣ（１１：４０）

Ⅰ・Ⅱのコルで岐阜大からコールがあり、遭難救助の手伝いを要請されたので、Ｓ字雪渓から平蔵谷へ降り、水川・藤田が手伝う。鈴木は紫藤を連れ帰幕。

〈本峰南壁Ａ２〉

ＢＣ（５：００）－取付（７：３０）－開始（８：２５）－本峰（１１：２０）－ＢＣ（１３：２０）

Ａ２で岩登りらしいのは最初の２Ｐのみであとはガレ場みたいな所を登る。計６Ｐザイルを出す。本峰南壁を岩登りルートとしてとらえずに、本峰への登路の１つとしてとらえると、明るくアルペン的な雰囲気のある快適なルートである。平蔵谷を下降中水川等からコールがあり戸叶が遭難救助に参加する。

〈Ⅵ峰Ｄフェース久留米大〉

ＢＣ（４：５０）－取付（７：００）－終了（１０：４０）－ＢＣ（１２：３０）

１Ｐ目は直上が難しく、一旦左に逃げたあと戻ってクラックを登る。２Ｐ目はクラックを左上バンドまで。３Ｐ目ハング下まではフリーでＡ１で右へトラバース後、ＡØで直上する。４・５Ｐ目は易しい。

〈遭難救助〉

ルート工作（１２：３０～１３：２０）－遺体を平蔵谷出合に下す（１６：１５）－ＢＣ（１８：００）

岐阜大・山岳警備隊に協力して、Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼの中から平蔵谷出合まで搬出する。

７月２７日　①

〈雪　訓〉

ＢＣ（５：２５）－雪訓（７：２０～１１：００）－ＢＣ（１１：４０）

平蔵谷Ｓ字雪渓出合付近で、キックステップを中心に行う。

〈チンネ左稜線〉

ＢＣ（５：００）－取付（８：４０）－終了（１５：３０）－ＢＣ（１７：３０）

長くピッチ数も多いので、各ピッチの少しのもたつきが、全体としてかなりの時間の遅れになる。Ⅲ～Ⅳ級を多く登りたい人にお勧めで、またＴ５からエスケープもできる。

〈源治郎Ⅰ峰　下部中央ルンゼ～上部成城大〉

ＢＣ（４：５５）－中央ルンゼ開始（７：００）－成城大開始（９：４０）－Ⅰ峰（13：２０）－ＢＣ（１５：３０）

取付へのシュルントの下降は怖い。中央ルンゼは完全に乾ききっており、ルンゼなので高感度もなく、快適に登っていける。

上部フェースはルートファインディングが難しく、我々はどうやらダイレクトルートに入り込んでしまったようだ。１１Ｐ目凹角を少し登りフリーでトラバース。Ａ０ラインもフリーでいく。Ａ１トラバースが１０ｍ程ある筈であるが、３ｍ程のボルトラダーの後かぶり気味のフェースをボルトラダーにそって直上する。その後３Ｐの草付を登ってⅠ峰に出る。ルートグレード５級下としてはお買い得。

７月２８日　①

〈本峰南壁Ａ０〉

ＢＣ（５：００）－取付（６：５０）－本峰（１１：００）－ＢＣ（１４：３０）

Ａ１を登る予定であったが、その手前に取付いてしまった。ルートになっていないだけあってほとんどブッシュ登りに終始した。

〈チンネ左稜線〉

ＢＣ（４：５５）－取付（８：０５）－終了（１３：３０）－ＢＣ（１６：２０）

〈チンネ北新～左方〉

ＢＣ（４：５５）－取付（８：００）－終了（１４：５５）－ＢＣ（１６：２０）

北新は先行パーティーが遅くかなりの時間待ちをさせられた。このルートは４５ｍザイルなら２Ｐで十分抜けられる。左方は快適だが、やや脆い所がある。

〈Ⅵ峰Ｃフェース剣稜会〉

ＢＣ（５：００）－取付（６：４５）－終了（１０：４５）－終了（１０：４５）－ＢＣ（１２：００）

７月２９日　○

〈仙人池遠足〉

ＢＣ（５：３０）－仙人池（７：２５～９：００）－ＢＣ（１１：００）

仙人池の小屋で「はね駒」を見せて貰う。久し振りに見るＴＶは新鮮だった。

〈Ⅵ峰Ｄフェース久留米大〉

ＢＣ（４：５０）－取付（６：５０）－終了（１０：００）－ＢＣ（１３：２０）

〈Ⅵ峰Ｄフェース富大ルート〉

ＢＣ（４：５０）－取付（８：３０）－終了（１１：２５）－ＢＣ（１３：３０）

ＢＣに鈴木がヘルメットを忘れ、取りに戻っていた為、取り付くのが遅れる。１Ｐ目暗い感じの凹角。２・３Ｐ目、凹角で浮石が多い。５Ｐ目はリッジを登るが、高度感もあり岩質もよくこのルートのハイライト。

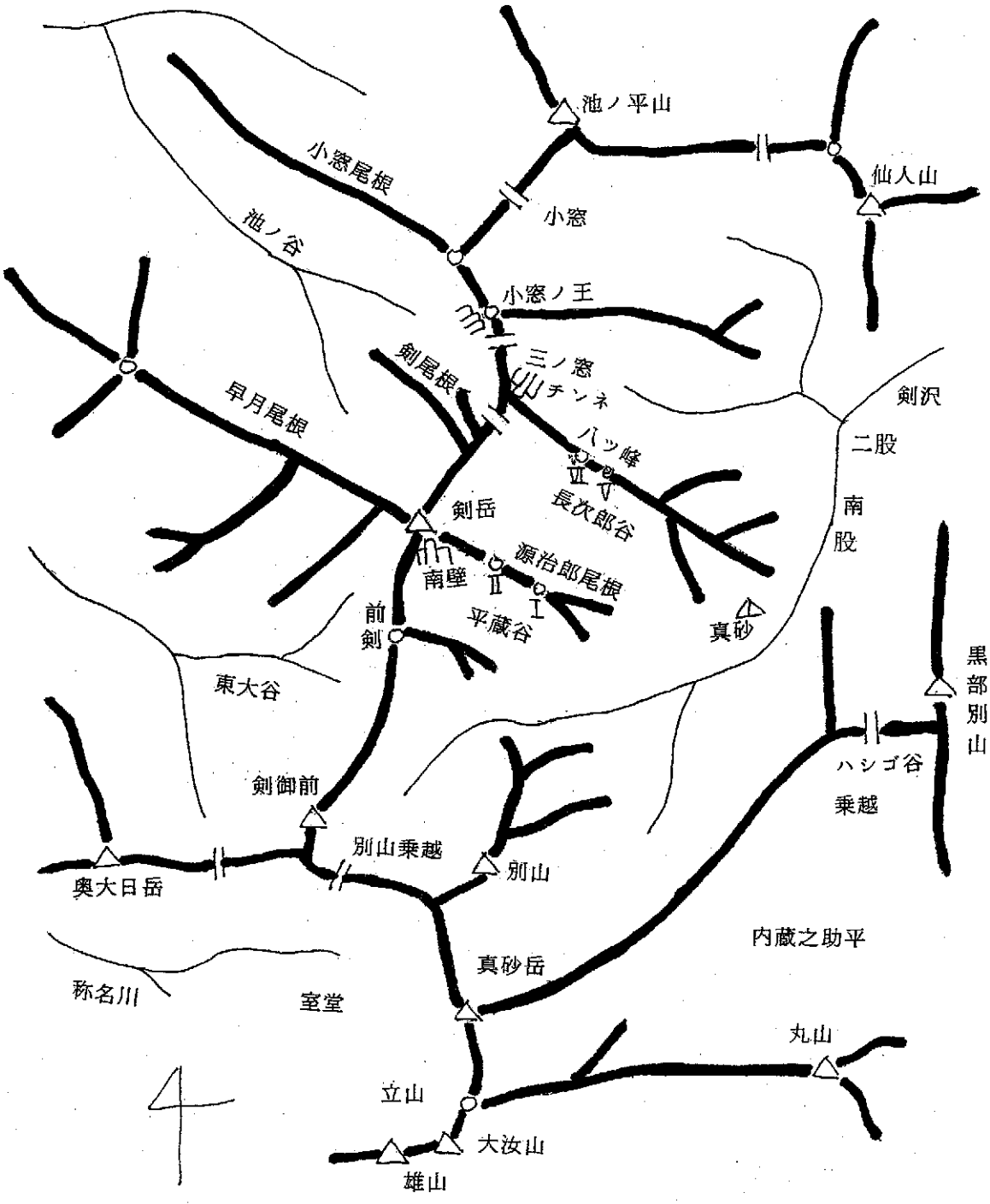
７月３０日　①

〈室堂下山〉

水川、大西、宮田、奥山、藤田、東條、森藤
出発（８：３０）－室堂（１３：３０）

〈黒四ダム下山〉

戸叶、鈴木、来村、紫藤、柴田、南
出発（８：３０）－黒四ダム（１４：３０）


池ノ平山
小窓尾根
仙人山
池ノ谷
小窓
小窓ノ王
剣尾根
三ノ窓
チンネ
早月尾根
剣沢
二股
ハッ峰
長次郎谷
剣岳
南股
源治郎尾根
南壁
平蔵谷
前剣
真砂
東大谷
黒部別山
ハシゴ谷
乗越
剣御前
別山乗越
別山
奥大日岳
内蔵之助平
真砂岳
称名川
室堂
丸山
立山
大汝山
雄山

☆ 真砂定着概念図

夏　山　縦　走

朝日岳～室堂 縦走

期　間　　８月１日～８月１２日
参加者　　奥山（L）、藤田、東條

８月１日　◎
越道峠（１５：００）－北又小屋（１５：５０）
泊から大型１ＢＯＸタクシーで越道峠まで。ここから１ピッチで北又小屋につく。

８月２日　◎
出発（５：３０）－イブリ山（９：３０）－朝日小屋（１１：４０）
イブリ山まで単調な登りが続く。イブリ山からはきれいな野原である。

８月３日　①→⊙
出発（４：３０）－朝日岳（５：２０）－雪倉岳（９：１０）－白馬岳（１２：３０）
朝日、雪倉へは楽に登る。後半での白馬の登りはかなりきつい。白馬のテント場は超満員で、テントとテントのすきまへ強引にわりこむ。

８月４日　①
出発（３：５５）－唐松岳（１０：００）－五竜山荘（１３：３０）
キレットでの渋滞を避けるため早めに出発する。それでも鎖場では少々またされた。唐松岳から五竜山荘まではうんざりするようなバカ尾根である。

８月５日　①
出発（４：３０）－五竜岳（５：３０）－キレット小屋（８：４５）－鹿島槍ケ岳（１０：４０）－冷池山荘（１２：１０）
八峰キレットから鹿島槍にかけては道が険しく落石に注意しなければならない。冷池山荘で水を１０リッターたのんだところ、勘違いしたのか２０リッタータンクに満たんくれたので、余った水を他のひとに売りさばいた。

８月６日　●→◎→●
出発（４：１５）－種池（６：１０）－鳴沢岳（９：０５）－赤沢岳（１０：００）－ズバリ岳（１１：５０）－針の木岳（１２：４０）－針の木峠（１３：０５）－テン場（１３：５０）
出発前から雨が小降りであったがまもなくやむ。赤沢からは黒部湖がきれいにみえる。スバリ、針の木ではガスで視界がまったくなかった。また降りだした雨のなか、針の木谷への下りをそそくさといそぐ。

８月７日　①→◎
出発（４：５０）－針の木出合（５：２０）－南沢出合（７：２０）－船窪出合（９：35）－船窪テン場（１２：０５）
船窪出合を見逃し、針の木谷を２ピッチも下ってしまった。往復で４時間ものロスである。

８月８日　①
出発（４：３５）－船窪岳（５：２０）－不動岳（１１：２０）－烏帽子岳（１２：０５）－烏帽子小屋（１３：００）
船窪の崩壊地はかなりきけんである。このあたりの山々はなだらかで高原的な雰囲気をもっており後立の山々とは対照的である。烏帽子岳は空荷でアタックする。

８月９日　○
出発（４：３５）－三ツ岳（５：２０）－野口五郎岳（７：００）－水晶小屋（７：１５）－鷲羽岳（１０：３５）－三俣山荘（１３：００）
単調な上り下りの道を快調にとばす。槍ケ岳がみるみるうちに大きくなってくる。

８月１０日　○
出発（４：２５）－黒部五郎小屋（６：１０）－黒部五郎岳（８：１５）－薬師峠（１２：２０）
黒部五郎岳のカールを登り荷を置いてアタックする。それからさきは退屈な山ばかりだ。

８月１１日　◎→①→●
出発（４：０５）－薬師岳（６：００）－スゴ小屋（８：２０）－五色ケ原（１４：００）
薬師の登りは風が非常に強くとばされそうだ。

ガスのきれめから富山湾が見える。

8月12日 ●

出発（6：25）－獅子岳（7：50）－室堂（9：45）

獅子岳をこえたあたりから雨が強く降りはじめ室堂まで休まずにとばす。

（記　東條）

南アルプス縦走

期　間　　8月1日～8月8日

参加者　　来村（L）、鈴木、柴田

8月1日 ◎

駒ケ岳神社（6：45）－五合目小屋（11：45）－七合目小屋（13：20）

韮崎からバスで駒ケ岳神社へ。神社で山行の無事を祈願していざ入山。うっそうとしげる樹林帯の中を快調に歩く。当初、五合目小屋で幕営の予定であったが、禁止区域であったため七合目まで足をのばす。途中、木のハシゴがいくつもあり、荷の重さがこたえる。

8月2日 ○のち●ニ

出発（5：25）－甲斐駒ケ岳（7：40）－北沢峠（11：00）－長衛小屋（11：30）

前日の貯金も幸いして、展望の良い快適な登りを楽しみながら眼下に摩利支天をおさめた山頂へ。大休止の後、双児山を経て足元の悪い長い下りをひたすら歩くと長衛荘に着く。ここから幕営場までは20分の道のり。

8月3日 ○のち◎

出発（4：20）－小仙丈岳（6：50）－仙丈岳（7：50）－両俣小屋（13：10）

好天に恵まれ、まだ重い荷物に参りながらもそれを忘れさせるような美しい山頂の展望は何ものにも変えがたい。ただし、楽勝と踏んでいた下りでは、不快なハイマツ帯に続き、小きざみに上下するダラダラとした尾根にウンザリする。疲れ果てて両俣小屋へ。

8月4日 ○のち●ニ

出発（4：25）－北岳（9：20）－間ノ岳（12：20）－熊ノ平（13：50）

快適な幕営場を後に、左俣大滝を経て樹林帯を急登して抜けると、眼前に黒っぽく白根の山々がそびえ立っている。山頂からは富士も望まれ気分は上々である。後は三峰岳を経て熊の平へ。ハードなしかし充実した行程であった。

8月5日 ○のち①

出発（4：30）－塩見岳（9：20）－三伏峠小屋（13：10）

北荒川岳－塩見岳－本谷山と地図上の高度差こそ大きくないが、長い長い道のりをひたすら歩く。北荒川では西斜面崩壊が激しい。また、三伏小屋への道が通行止のため予定変更して峠小屋にて幕営。水場遠く苦労する。

8月6日 ◎のち●

出発（4：40）－小河内岳（7：00）－高山裏避難小屋（10：10）

半日行程ということもあって、十分休養が取れると思いきや、台風余波の雨にあって足取りは重い。全行程を通して西側斜面の崩壊が激しい。幕営後、天気図を取りながら夏台風の足の遅さにヤキモキする。一応次の日は荒川小屋までと決定。

8月7日 ●

出発（6：00）－荒川岳（9：10）－荒川小屋（9：30）－赤石小屋（1：30）

朝、天気予報を聴いてから出発。降りしきる雨の中をとぼとぼと、しかし気持ちはせかされながら歩く。ガスの中、ガレ場を急登して荒川岳へ。休む間もなく荒川小屋へと急ぐ。途中気象通報を聴き、下山を決定。小屋前で検討した結果、万一に備えて赤石小屋まで足をのばすことにする。視界が極端に悪い中を、大聖寺平、赤石岳と一気に駆け抜け赤石小屋へ。

8月8日 ●のち◎

出発（5：10）－椹島（7：25）－畑薙ダム（10：10）

降り続く雨の中を出発、高度差1300mもの道程を、ただただ下る。途中数回、林道と登山道が交錯しており、気を付けていないと道を間違えやすい。椹島からは林道を5時間の行程

であるが、途中の工事現場で、足止めをくっている時に、折良くリムジンバスに拾ってもらいダムへ。

（記　柴田）

上高地～親不知 縦走

期　間　　8月2日～8月14日
参加者　　戸叶（L）、南、紫藤

8月2日　①
上高知出発（4：30）－蝶ケ岳ヒュッテ（10：35）
紫藤が腹をこわしていて不調。ひどい暑さ。
8月3日　①
CS（4：00）－常念岳（7：35）－大天井（11：40）－西岳ヒュッテ（15：40）
荷がまだ重く、一年も歩き慣れないため、ひどくバテる。西岳では座り込んでしまった。
8月4日　①
西岳ヒュッテ（4：10）－槍山荘（7：40）－槍ケ岳アタック－双六小屋（12：20）
東鎌を朝、気温の低いうちに快調に抜け、ペースはよかった。素晴らしい好天であった。
8月5日　①
CS（4：10）－三俣蓮華岳（5：55）－黒部五郎岳（9：15）－薬師峠（13：45）
赤木岳の手前ですれ違った縦走パーティーの中に戸叶の父が参加しており、しばし談笑す。
8月6日　◎
CS（4：00）－薬師沢左俣出合（6：25）－薬師峠（11：55）
薬師沢左俣を溯行する。途中 Seil 1P 20m を出す。明るく楽しい1日。これが休暇となった。
8月7日　◎
CS（4：35）－薬師岳（7：05）－スゴ小屋（9：35）－五色ケ原（15：10）
この日の日程はずい分長い。スゴ小屋から越中沢岳の登りは急登で、しかもピーク手前に無数のポコがあり、精神的に参った。五色ケ原に着いた時はもうへとへとであった。
8月8日　①
CS（4：05）－一ノ越（7：50）－大汝（9：05）－剣沢（11：00）
真砂までの予定を変更し、剣沢に泊。
8月9日　①
CS（4：30）－仙人池（9：10）－阿曽原（12：45）
仙人谷は下部へ下る程猛暑となって、気が狂いそうである。はしごだらけのいやらしい下りである。阿曽原の手前で南が転倒し、3m程転がり落ちた。怪我はひどくなかったが、様子を見て下山させることにする。
8月10日　①
CS（4：30）－欅平（9：40）－祖母谷温泉（11：35）
南下山。黒部峡谷鉄道にて帰る。残りの二人は祖母谷温泉に入った。
8月11日　◎→①
CS（4：15）－不帰避難小屋（8：15）
よいペースで進む。後立山が見わたせて気持ちよい。
8月12日　◎→●
CS（4：05）－白馬岳（8：05）－雪倉避難小屋（9：20）－前朝日（13：30）
ひどい風雨となった。雪倉の避難小屋で休憩しようとしたが、人でいっぱいであり、すぐに出発する。前朝日のトラバースは道が悪く、紫藤がバテた。
8月13日　①
CS（4：30）－犬ケ岳（11：25）
再び晴天となり、日本海を目指して出発する。暑くてたまらない。道は割といいが、標高が下がってきて、樹林帯らしくなってきたのには閉口した。犬ケ岳の無人小屋に泊。
8月14日　①
CS（4：35）－親不知（11：35）
犬ケ岳から白鳥山までは快調であったが、そこからの下りはダラダラと長い。そして最後の

最後に、日本海を見ながら、大入道山を登らなければならないのがたまらなかった。親不知から駅まで1ピッチ歩いて、夏山の長い縦走が完結した。

（記　紫藤）

個　人　山　行

八ケ岳 縦走

期　間　　10月9日～10月12日
参加者　　鈴木（L）、東條、南

10月9日　①
竜源橋（8：00）－双子池（11：30）
今日は地形的にも時間的にもハイキングのような一日であった。午後のひとときは、双子山へ散歩にいったり、だれもいない静かな湖畔にねそべって、雲をみながらうとうとしたりしてすごした。

10月10日　①
出発（5：50）－横岳（8：00）－麦草峠（19：05）－中山峠（13：25）
北部の山々は総じて高原状のなだらかな山容をしており、気分を和ませてくれる。縞枯山はその名のとうり幾すじにも枯れ木の帯が山腹に分布している、不思議な山である。麦草峠では車の騒音が静寂な高原の雰囲気をぶちこわしにしている。また高見石小屋では広場をうめつくしている人の多さにうんざりした。

10月11日　●
出発（6：00）－天狗岳（7：15）－横岳（10：55）－赤岳（12：20）－キレット小屋（13：05）
昨日までとは一変して、森林限界を超えた岩稜をいく。雨で岩が濡れて滑り、なかなか気がぬけない。ガスで景色は全くみえなかった。

10月12日　●→①
出発（6：40）－権現岳（7：50）－観音平（11：00）－小淵沢（13：30）
権現岳からの展望は素晴らしく、北アから富士山まで見渡すことができる。編笠山にたつと牧場のかなたに小淵沢が見える。これからの長い行程を思うと少々うんざりする。

（記　東條）

黒部下ノ廊下

期　間　　10月8日～9日
参加者　藤田（L）、奥山、柴田

10月8日　●
黒部ダム（8：05）－十字峡（12：45）－阿曽原（17：00）
夏合宿で見慣れた景色の中を出発する。しょぼしょぼ降る雨が不快である。夏には行手をはばんだ雪渓も、右岩にわずかに残るのみで、快適な日電歩道を行く。黒部川の豪快な瀬音に耳にしながらの雨の幽幻な十字峡は、心にしみる素晴らしいものであった。

10月9日　○
出発（6：20）－下山決定（6：55）－阿曽原（8：20）－欅平駅（15：10）
この月仙人池アタックの予定だったが、1P目で藤田が嘔吐したため、下山を決定して欅平へ向かう。水平道を延々歩くと、しばらくして奥鐘の壮大な岩壁が迫る。欅平から残り2名で白馬越えを狙うことも考えられたが、積雪量が予想以上有り断念。

（記　柴田）

勁城 縦走

期　間　　10月9日～10月12日
参加者　　来村（L）、紫藤

10月9日　①
山口発（8：03）－梶山新湯（11：15）
糸魚川下流の根知駅下車、バスで根知川を上り、山口から入山。雨飾山がそびえるようだ。

秋の田園風景が実に美しい。梶山新湯では温泉に入るのも楽しい。

10月10日 ①

CS（5：55）－雨飾手前の分岐（8：30）－雨飾山（8：45）－分岐（9：20）－金山（13：18）－泊岩（15：10）

晴天に恵まれ、雨飾山頂までとばす。金山までの稜線はタラタラとうっとおしい。泊岩は岩穴に小屋がはまり込んでいて、快適である。

10月11日 ●

CS（6：00）－焼山（6：50）－火打山（9：10）－高谷池（10：30）

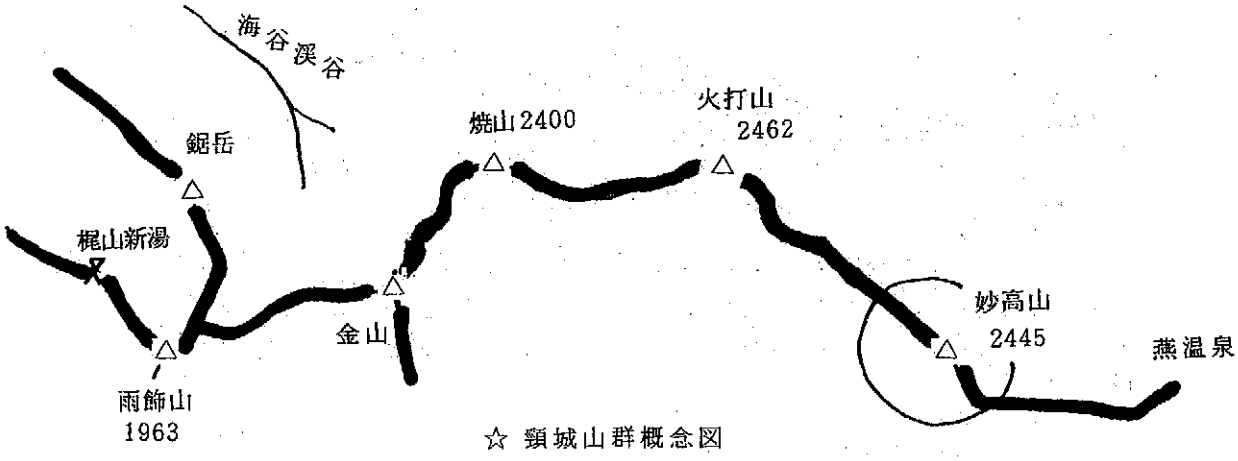
朝からガスと雨で視界はきかず、体が冷えてしまう。焼山では山頂でガレ場となり、いやらしい。火打から高谷池まで続く木道は、実に爽やかであった。

10月12日 ◎

CS（6：25）－妙高山（9：00）－燕温泉（12：10）

黒沢池のあたりの紅葉は実に見事である。妙高が突然視界に入ると、その異様な山容に圧倒された。山頂は180度絶好の展望である。燕温泉で無料の露天風呂に入浴し、のんびりした下山を楽しんだ。

（記　紫藤）



☆ 頸城山群概念図

偵　察　山　行

剣岳・北仙人尾根偵察

期　間　　11月1日～11月7日
参加者　　水川（L）、宮田、藤田、紫藤、東條

11月1日 ●

欅平駅（10：30）－1200m付近（15：00）

水平道をしばらく行き、940m付近の鉄塔をまわりこんだあたりから取り付く。不快なブッシュをつき進むことに終始する。鉄塔から尾根はやせており、テン場は極悪、節水のためとはいえ、夕食が釜めしのみとは寂しい。デポは雪崩止めの基部。

11月2日 ●のち⊛

CS（6：30）－1668mピーク手前（15：45）－ルート偵察（15：45～16：05）

いたずらにブッシュをこぐ。所々に岩峰があり、巻くのがうっとおしい。1100m付近で右隣の尾根に移るのに注意を要す。テン場から1668mのピークへ宮田と藤田が行くが、ブ

ッシュひどくテン場にならない。雪がつけば良いサイトになるだろう。

11月3日　○

CS（6：30）－1668mピークとP1の最低コル（9：00）－P1（13：10）－P1、P2のコル（14：50）

ブッシュひどく1668mピークからの降り口を間違いかける。最低コルからP1の肩まではやや細く、大木や岩峰のリッジ。P1からの下りは急で状態によっては要fix、本日も窮屈なテン場。晴れたことだけが救いか。

11月4日　○

CS（6：00）－P3（9：25）－P3と坊主山のコル（10：40）－坊主山のリッジ出合（14：00）－2100m付近のポコ（16：30）

P3からの下りは細くFix 10m。最低コルからは、まず岩峰を右から巻き、そこから雪壁。しばらく登るとテラスに出る。ここから藤田トップでザイル2P、リッジに達する。リッジはナイフ状で小黒部谷側は下まで切れ落ちている。凄い高度感。ここを慎重にしばらく登ると、左手に雪壁があらわれ、途中からそちらへ移ってテン場へ。

11月5日　①のち◎

CS（6：05）－坊主山（11：05）－仙人山手前のポコ（16：30）

出発早々、ザイル1Pを要す。今日もブッシュが不快だ。岩峰が所々にあるアップ＆ダウンに富んだ尾根である。2051mのコルへの下りに手間取る。こうした不快なブッシュからのがれて、明日無事下山できることを皆願う。

11月6日　●のち◎

CS（6：00）－二股（10：30）－長次郎出合（13：20）－剣沢の武蔵谷をこえたあたりの別山支尾根上（7：00）

今日の下山は苦しいとしても、雷鳥沢あたりまではいくだろうと思っていた。真砂に着いた時、誰もが楽勝だと考えた。が、剣沢の雪渓は至るところに亀裂を入れ、さらにルートミスを犯し、結局は剣沢小屋にもたどりつくことができなかった。思えば二股で橋がなかったあたりからケチがついていた。

11月7日　◎のち①

CS（6：00）－室堂（10：00）

この日は当然問題なし。雷鳥沢からの競走はいつもの如し。

（記　宮田）

注）概念図は、冬山の項参照

燕～槍～中崎尾根

期　間　　11月1日～11月5日
参加者　　大西（L）、戸叶、奥山、来村、柴田、南

11月1日（金）　●

中房温泉（7：05）－合戦小屋（9：55）－燕山荘（11：20）

雨の中の不快な入山となる。

中房温泉からすぐに急登となり苦しいが、雪もほとんどなくじきに燕山荘に着く。アラレが降ったり惨々な天気であった。

11月2日　⊛→①

出発（6：55）－大天井手前コル（9：55）－ヒュッテ（11：25）－デポ作業14：30～15：00）－西岳ヒュッテ（15：20）

視界が悪い中をアイゼンを着けて出発する。なだらかな稜線だが蛙岩等の悪場が所々現れてペースは上がらない。

切通し岩とコル周辺が、やせてもいて悪く感じた。コルを越えてから大天井をトラバースして、以下雪も少ないので夏道を行く。午後から晴れてきて明るくなる。デポは、9人×4日分＋fix 200mを赤岩岳を下った所に置く。

また赤岩岳～西岳までやせていて難しそうである。

なおこの日阪神タイガースが日本シリーズを制す。今世紀最後であろう。

11月3日　①→○

出発（6：05）－水俣乗越（7：15）－ヒュッテ大槍（9：00）－殺生小屋（10

：１０）

水俣乗越までの下りが所々氷化していて２Ｐザイルを出す。雪が少ないのですべて夏道通しで、ハシゴ等を利用して快調に抜けてしまう。ただし雪がつくとかなり難しくなりそうではある。

ヒュッテ大槍からは、ラッセルぎみのトラバースをして殺生小屋に着き、快晴の中のんびりする。夜、星がたいへんきれいであった。

１１月４日 ①

出発（６：１５）－槍の肩（６：５５）－大槍アタック－千丈沢乗越－中崎尾根奥丸山手前（１０：０５）

大槍アタックでは、下りに２Ｐ ｆｉｘ した。その後の下りは、中崎尾根上部も含めて雪崩の危険もあり気は、抜けないだろう。

雪が少ないので、あまり下らずに泊した。滝谷をながめながらこの日ものんびりする。

１１月５日 ◎

出発（６：１０）－新穂（１２：３０）

夏道は、奥丸山まではしっかりしているがそれ以後は、廃道となっていて、特に中崎山から新穂への急降下は、少々危険であった。奥丸山から１Ｐの地点にハシゴのあるギャップがある。懸垂になりそうである。

偵察については、５月山行の項を見てもらいたいが、苦戦が予想された表銀は、春山直前のアクシデントで計画変更となっている。

ともあれ明るくのんびりした山行であった。

（記　来村）

アイゼン合宿

木曽・御岳

期　間　　１１月２３日～１１月２７日
参加者　　水川（Ｌ）、今村、大西、宮田、戸叶、奥山、来村、柴田、東條、南

１１月２３日 ●→①→⊛

田ノ原手前（６：３０）－田ノ原（７：４０）－８合目（９：２５）－一ノ池（１３：３５）

問題なく入山。頂上に近づくにつれ、風が強くなり、気温も下がってきた。

１１月２４日 ⊛

出発（６：４０）－お鉢廻り－二ノ池（８：３０）－雪訓（１０：１５～３：４０）

朝から風が強い。二ノ池の斜面で、キックステップ・滑落停止・アイゼン歩行・確保（スタンディング・アックス、コンテ）の練習をする。

１１月２５日 ⊛

第１次捜索隊　出発（７：１０）－ＢＣ（７：５５）

第２次捜索隊　出発（７：４０）－剣ケ峰（８：００）－ＢＣ（８：３０）

第３次捕索隊　出発（９：５０）－サイノ河原－ＢＣ（１１：１０）

ビバーク隊帰幕（１０：１５）

雪訓（１３：００～１５：３０）

ビバーク訓練に出ている大西、東條の２人が朝になっても帰ってこない。２人は夜道を迷いサイ、河原付近でビバークした後、摩利支天付近を漂った末、コンパスワークで自力で帰幕。昨晩から当日にかけては、風が強烈で視界もゼロの状態であった。雪訓は岩場でのフィックス。

１１月２６日 ⊛

出発（７：１０）－剣ケ峰（７：５０）－下山隊と別れる－一ノ池（８：１０）

雪訓（１０：４５～１３：００）

１１月２７日　○
出発（７：００）－お鉢廻り－田ノ原（１０：０５）－八海山荘（１１：３０）－王滝村（１５：４０）
八海山荘では、バスが前日に途切れており、王滝村まで歩く。
（記　藤田）

冬　山　合　宿

剣岳・北仙人尾根

期　間　　１２月２５日～１月２日
参加者　　水川（L）、大西、宮田、戸叶、奥山、来村、藤田、紫藤、柴田、東條

１２月２５日　◎
宇奈月（８：２５）－欅平（１６：１５）
宇奈月から欅平まで約２０km、冬期歩道とトンネル内を歩く。３５kgのキスリングを背負い皆黙々とあの単調な歩きに耐えた、合計７ピッチで欅平駅へ。
１２月２６日　①時々◎
ＣＳ（６：３０）－北仙人尾根上１３００ｍ付近（１５：００）
北陸地方は１２月中旬の大雪のあと、ほとんど降っておらず、雪は良くしまっていた。ラッセルは快調、鉄塔の下に１１月デポした食料、ガスがあり、これを回収した。
１２月２７日　○
ＣＳ（６：００）－坊主山（地図では1667.9ｍピーク）（１３：００）－Ｐ１手前のポコ（１４：２０）
坊主山の手前まで所々急で、全体的にやせている。
１２月２８日　○
ＣＳ（６：００）－Ｐ１（９：００）－Ｐ３（１２：３０）、フィックス工作（１３：００）－（１６：５０）
Ｐ１手前でザイルを２ケ所フィックスするがザイルワークが悪く時間を食う、Ｐ３にテントを張ったあと、上級生でフィックス工作にむかう。Ｐ３の下りで合計１００ｍ、コルからの登りで５０ｍフィックスロープを使用する。４日分の食料、ガスをＰ３にデポ。
１２月２９日　○
ＣＳ（７：００）－北仙人山（地図では坊主山）手前１９００ｍ付近（１５：００）
いよいよ核心部の通過である。フィックス隊荷上げ隊、一年生とリーダー、３隊に分かれて行動する。この稜線の右側はスパッと切れおち非常に高感度があるが、ブッシュのおかげでフィックはやり易く安心できる、ロープは合計１５０ｍ使用、１５時全員がテント内に入る。

＊

〈事故発生〉
（１５：３０）
風が強くなってきたなと思っていると、突然ドカーンという衝激とともに、ミクロテックステントがつぶされた。テントの上に張り出した木の上から、ひとかかえほどもある雪の塊が落ちたと気づくまで、しばらく時間がかかった。テント内の４人のうち、柴田、大西が腰を痛める。柴田はしばらくの間呼吸をするのさえ苦しそうであった。
（１６：００）
今日の行動ですでに核心部を通過していること、柴田のケガがおもわしくないことから自力下山は無理と判断。翌日から天候が悪化することもわかっていたので、ただちにヘリ要請のための緊急通信をおこなう。
（１６：１５）
黒部ダムサル調査隊の宮川さんと交信がついた。（宮川さんからトランシーバーで、だし平の酒井さんへ。酒井さんから電話で富山県警、在阪連絡先の今村へと連絡は進んだ）この後２回の交信を通じて、こちらの状況を伝えるとともに、明朝７時５分、天候が良ければヘリが富山空港を発つこと。こちらはヘリポートの準備

が必要なことが確認された。

１２月３０日　◎のち●

（７：４０）

朝は高曇りで視界良好、ほとんど無風。朝日航洋のヘリで柴田、大西は無事救出された。

＊

ＣＳ（９：００）－Ｐ３（１３：００）

撤収してＰ３へ向う。低気圧通過のため午後は雨、夜半から雪に変わる。

１２月３１日　⊛

ＣＳ（７：００）－坊主山（１３：１５）

冬型となり雪がパラつくが行動には支障なし。Ｐ３のデポを回収。

１月１日　◎のち⊛

ＣＳ（６：３０）－樺平（１６：２０）

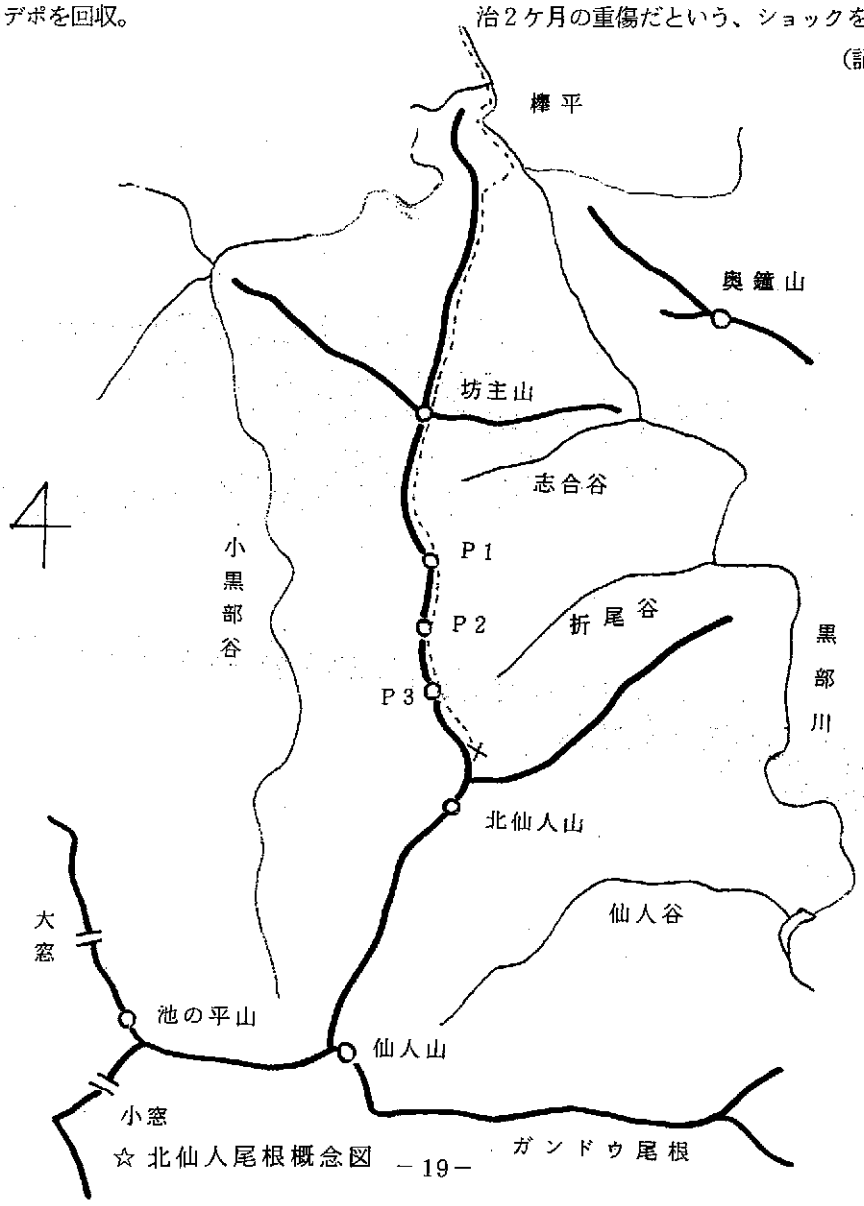
登りでザイルの必要がなかったところでも下りでは懸垂下降となり、合計６ピッチ。なんとか安全圏へたどりつきホットした。

１月２日　⊛

ＣＳ（７：０５）－宇奈月（１３：３０）

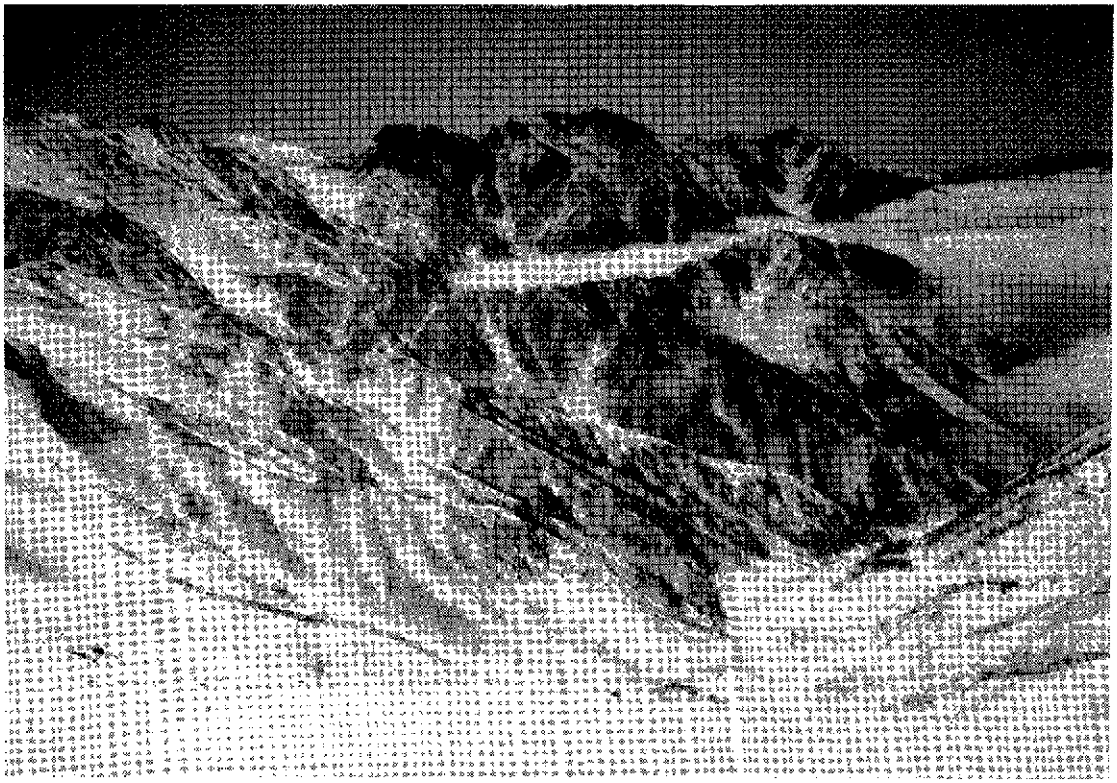
長い帰路を歩いた。トンネルの外ではさんさんと雪が降り続いている。１日でも行動が遅れていたら、こうスムーズに下山はできなかったであろう。樺平の手前で会った登山者も事故のことを知っていて、その人の話だと柴田君は全治２ケ月の重傷だという、ショックを受けた。

（記　宮田）



☆ 北仙人尾根概念図

１９８６年度（昭和６１年度）活動記録



〝樅沢より穂高連峰と中崎尾根〟

１９８６年度　現　役　部　員

Ｃ・Ｌ	戸叶　聡	経	2	（4）	
	奥山慎也	基生	3	（3）	（退部）
Ｓ・Ｌ	来村宗紀	工物	2	（3）	
	鈴木寛道	工精	3	（3）	
	藤田繁雄	医	2	（3）	
	紫藤圭介	理物	2	（2）	
	柴田　強	基物	2	（2）	（退部）
主　務	東條公資	基機	2	（2）	
	大倉徹雄	工化	1	（1）	

注）左から
役職・氏名・学部・学科・学年・学年（山岳部）を示す。

プ　レ　春　山

八ケ岳定着

期　間　　3月2日～3月5日
参加者　　戸叶（L）、奥山、来村、藤田、紫藤、東條

3月2日　◎→⊛
美濃戸口（7：45）－美濃戸山荘（8：45）－赤岳鉱泉BC（10：50）
小同心右稜敗退（12：05～13：10）
ラッセルはほとんどなく、快調に入山する。テントは他に2，3張りしかない。
小同心右稜を少し登ろうと出発するが行者小屋への登山道と分かれてすぐに、かなりのラッセルとなり、天気も悪化したので、ひき返す。

3月3日　◎（gas）
BC（6：00）－行者小屋（6：30）－敗退（8：30）－稜線（8：50）－阿弥陀岳（9：25）－赤岳（11：15）－地蔵尾根分岐（12：05）－BC（13：00）
阿弥陀岳北稜を目指して中岳沢をつめるが視界悪く左に行きすぎて、気付いた時は、北稜と稜線の間のかなり上部におり、あきらめて赤岳を回って、地蔵尾根を下降する。地蔵尾根上部のクサリ場は、いやらしい。
残念無念の1日であった。

3月4日　○
BC（6：00）－大同心基部（7：25）－主稜線（8：05）－地蔵尾根分岐（9：25）－BC（10：20
大同心稜をアタックする。トレースもあって、アッと言う間にまっ黒の大同心の基部に着く、右のルンゼから巻くが問題なくノーザイルであった。横岳主稜線には、トレースがあるにもかかわらずいやらしい所があった。

3月5日　①→⊛
BC（6：00）－硫横岳（9：10）－BC（10：00）－撤収－美濃戸口（12：35）
ジョウゴ沢をつめる。凍結の状態は、まずまずで右俣のF1など見事なものであった。ゴルジュ帝の途中でトップロープを張って遊ぶ。大滝は、あまり発達しておらず、左から巻いて適当に硫黄岳へ向って下山した。
春山・表銀をにらでの山行であったが成果は疑わしいものとなった気がする。
が、氷で遊べたしそれなりによかったのではないか。

（記　来村）

春　山　合　宿

笠ケ岳～槍ケ岳

期　間　　3月13日～3月23日
参加者　　戸叶（L）、来村、藤田、紫藤、東條

3月13日　①→◎
新穂（9：30）－弓折南尾根取付（13：40）－1874m（14：50）
トレースがあり、ラッセルは足首から脛くらい。天場に着いてからラジオを忘れたことに気が付く。

3月14日　⊛→●
出発（6：50）－新穂（10：05）
11日分の食糧・ガスを天場にデポし新穂に戻り、装備係の紫藤がバスで高山まで下り、ラジオを購入して戻る。

3月15日 ●→①
出発（5：30）－デポ地（11：30）－2303（15：10）
昨日の雨の為、弓折南尾根の取付までは、ものすごいデブリがいくつか出ていた。2303への上りは雪質が悪くfix 30m。

3月16日 ①→⊙
出発（6：00）－弓折岳（8：50）－秩父平（11：35）
弓折手前の急登でアイゼンを使用した他はワカン。弓折から大ノマ乗越への下りは双六谷側の斜面を巻き気味に行くのだが、雪質が悪くいやらしかった。

3月17日 ⊛→◎
出発（6：50）－板戸岳（8：50）－秩父平（9：50）
笠ケ岳アタックに出発するが、ペースが上がらないことと、天気がなかなか回復しないことを考え、ひとまず敗退する。

3月18日 ◎
出発（5：40）－笠ケ岳（9：05）－秩父平（11：35）－テント移動（12：15）
高曇りで視界はよくきき、快調なペースで難なく笠アタックを終える。雪庇に十分注意を張ったつもりであったが、天幕の延長線上に小さいながらも亀裂が見られたので、テント移動を行う。

3月19日 ⊛
沈澱。二ツ玉低気圧が通過した日だが、気温も高く、風もあまり強くなく、行動可能であった。

3月20日 ⊛
沈澱。強に冬型で、低温・強風で昨日より状態は悪い。

3月21日 ①→⊙
出発（6：50）－縦沢岳（10：35）－硫黄尾根JP（13：45）－2674の次のポコ（15：00）
縦沢の下りで30＋50m、次のポコの下りで50m、2674の下りで50m各々fixを出すが、何れも大して難しくない。弓折まではワカンで、その後はアイゼン。

3月22日 ①→⊛
出発（6：10）－千丈乗越（8：00）－大槍（9：40）－肩（11：30）－千丈乗越（12：00）－奥丸山 （14：45）
明日から天気が崩れ出すので、今日中に中崎尾根に入ろうと気合を入れて進む。千丈乗越にキスリングをデポし、槍をアタックをする。大槍の下りにfix 50m×2。

3月23日 ⊛
出発（6：05）－中崎山（10：45）－新穂（14：05）
2355手前のキレットへは25mのアプザイレンで下りる。2250m付近と、1650からの下りで迷い各々30分のロス。1650からの下りは赤布がベタ打ちなので、100m以上赤布を見かけなかったら、ルートを疑う必要がある。

（記 戸叶）

ポスト春山

天狗尾根

期間 4月2日～4日
参加者 水川（L）、戸叶、来村、紫藤

4月2日 ①→⊕
1027（6：25）－荒沢出合（8：00）－第1クーロワール（12：25）－天狗の鼻（15：50）
雪はしまっており、きれぎれながらトレースもあり、予想よりもはかどる。第1クーロワー

ルはノーザイルで通過するが、第２クーロワール手前の細いリッジで紫藤が不安を訴えたのでｆｉｘ５０ｍ×４を出して取付へ至り、更にｆｉｘ５０ｍ＋４０ｍで第２クーロワールを抜ける。この頃より風が強くなりはじめ、天場に着いた時には地吹雪となる。

４月３日　①→◎
　出発（５：４０）－第一岩峰取付（７：２０）－荒沢の頭（９：３５）－南峰（１１：０５）－冷池（１２：２０）
小舎岩へは急登。第一岩峰、第二岩峰ともにⅠ～Ⅱ級程度だが、傾斜が強いので重荷では苦しい。ｆｉｘ５０ｍ。荒沢の頭への急登でもｆｉｘ５０ｍを出すが不要であった。北峰直前のナイフリッジも今年は太っており、南峰直下の登りも楽勝だった。今日は何故か皆疲れ気味で、冷池で早目にドンする。

４月４日　⊛→●
　出発（５：３０）－爺ケ岳南峰（７：１０）－車道（９：３０）－料金所（１１：１０）
南尾根は下山路として最適で、降口に雪庇もなく、赤布がたくさんありルートも明瞭で、ゴジラも下部に少しあるだけである。

（記　戸叶）

５　月　山　行

穂高・岳沢 新歓合宿

期　間　　４月２９日～５月５日
参加者　　戸叶（Ｌ）、来村、鈴木、藤田、柴田、東條、内島、大倉

４月２９日　①→◎
　上高地（７：１５）－水呑沢出合Ｂ．Ｃ．（１０：１０）－雪訓（１１：４０～１３：５０）
　早い時間にＢ．Ｃ．に着いたので、間の沢下部でキックステップ・滑落停止を行う。

４月３０日
　出発（５：５０）－雪訓（６：１０～１１：５０）－Ｂ．Ｃ．（１２：１０）－藤田、柴田帰幕（１４：４０）
　水呑沢と奥明神沢の間のルンゼで、アイゼン歩行・キックステップ・滑落停止・確保（スタカットとコンテ）を行う。雪質・傾斜とも良くまずまずの成果があがる。雪訓終了後藤田、柴田で前明神沢の偵察に出る。

５月１日　①→◎

〈徳本峠遠足〉
参加者　　戸叶、鈴木、内島、大倉
　出発（５：１０）－徳本峠（８：５０）－Ｂ．Ｃ．（１３：００）
　峠からの展望もききき、のんびりした遠足だったが、上高地では観光客の多さに辟易する。

〈明神主稜〉
参加者　　藤田、柴田
　出発（４：３０）－主稜線（８：１０）－主峰（１２：１５）－Ｂ．Ｃ．（１４：００）
　前明神沢は複雑でわかりにくい。主稜線は２峰の下りで３０ｍのアプザイレンをする他は、易しい。

〈コブ尾根～ジャンダルム飛騨尾根ビバーク〉
参加者　　来村、東條
　出発（４：５０）－ゴブ尾根取付（７：１０）－終了（９：１５）－飛騨尾根取付（１０：１５）－終了（１５：１０）－Ｂ．Ｓ．（１６：００）
　コブ尾根はトレースも明瞭で問題なし。飛騨尾根も雪が付いてなく夏と同様であるが、長く、ｓｅｉｌ １２Ｐでジャンダルムへ。ジャンダルムとコブ尾根のコルに絶好のビバークサイトをみつけツェルトを張る。なおコブ沢で来村がヘルメットを落し、ノーヘルのまま登攀したことが、後日問題になる。

5月2日 ●

〈ビバークの続き〉

出発（6：00）－B．C．（7：35）

天気が悪いので、最短の天狗のコル経由でB．C．に戻る。

なおこの日の他の者は沈澱。

5月3日 ◎→⊛

〈奥明神沢～天狗沢〉

参加者　戸叶、鈴木

出発（4：35）－前穂（7：25）－奥穂（9：05）－ジャンダルム（12：10）－B．C．（13：50）

奥穂から seil 5P を出しジャンダルムへ。そこより天狗のコルまでは雪質が悪く予想外にいやらしかった。

〈コブ尾根〉

参加者　藤田、柴田

出発（4：40）－取付（6：50）－コブ尾根の頭（9：50）－ B．C．（12：00）

核心の1峰の登りは順番待ちがあり、正規より左のルートに取り付き、seil 2Pで抜ける。ノーマルルートより難しい。

〈雪　訓〉

参加者　来村、東條、内島、大倉

出発（5：15）－雪訓（6：15～10：10）－B．C．（10：30）

奥明神沢二股下で行うが、雪が固く新人にはシビアな雪訓となったようだ。

5月4日 ◎

〈疊岩尾根〉

参加者　戸叶、鈴木

出発（4：45）－取付（5：20）－主稜線（8：40）－B．C．（10：45）

尾根末端天狗沢側のルンゼから取付く。尾根を約半ピッチ登るとコブ沢側からのトレースにぶつかる。途中のハイマツ混りの岩場で seil 2Pを出すが、ノーザイルでも十分いける。

〈西穂遠足〉

参加者　来村、藤田、柴田、東條、内島、大倉

出発（5：05）－西穂（7：40）－B．C．（10：20）

西穂沢左俣より西穂を往復する。西穂から左俣の下り口までの下りで seil 2P。

5月5日 ①

出発（7：00）－上高地下山（8：20）

（記　戸叶）

白馬主稜

期　間　5月5日～5月6日

参加者　戸叶（L）、藤田

5月5日 ◎

猿倉（15：45）－猿倉台地B．C.（16：55）

松本で買物をしたあと、長走沢手前のB．C．へ。

5月6日 ◎ 出発（4：15）－取付（5：00）－白馬岳（10：00）－ B．C．（12：00～13：00）－二俣（14：25）

尾根末端から取付く。雪壁とブッシュを1p程登ると、左の沢からのトレースに合流する。あとは雪の階段をひたすら登っていくと頂上に出た。6峰の上り、頂上直下の雪壁もバケツのようなステップで問題はない。2峰の上りの10mの岩場も、雪がうまくつながっていて容易であった。今回は条件に恵まれすぎで、物足りない気持が先に立ったが、非常に気持ちのよい所であり、トレースのない3～4月初めにもう一度来たいものである。下降路の大雪渓は、本流は大丈夫だが、3合雪渓からはものすごいデブリが出ていた。連休が終わりバスがないので、二俣まで歩く。

（記　戸叶）

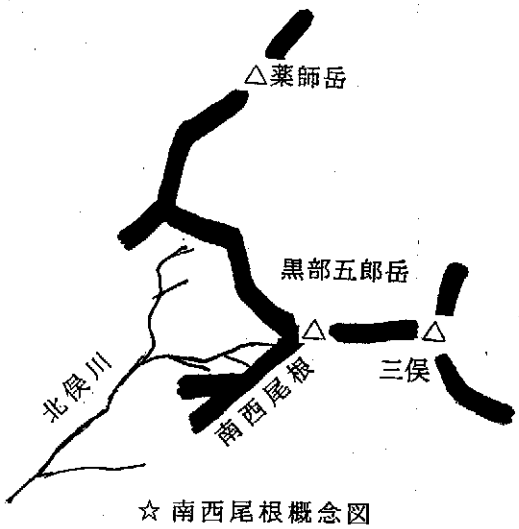
春山偵察山行

黒部五郎南西尾根～裏銀

期　間　　4月29日～5月3日
参加者　　奥山（L）、紫藤

4月29日　①
双六谷出合（8：40）－尾根取付（14：10）
双六谷出合まで営林署の車に便乗させてもらう。中俣川は左手の斜面をブッシュをこぎながら進み、尾根取付で膝上の徒歩。すぐに泊する。アプローチの雪崩の危険を判断した。
4月30日　①
CS（5：00）－2480m（10：40）－2650m（12：30）
下部はブッシュをこいでから単調でわるく、だだっ広い屋根は上部になってから快調となる。主稜線に出てからはさらに尾根は広くなり、C.S.はどこにでもとれる。
5月1日　◎
CS（5：10）－黒部五郎岳（6：00）－三俣蓮華岳（9：10）－水晶小屋
黒部五郎から下りはカール側に雪庇。三俣から雪が消え、夏道を進む。水晶小屋手前にテントを張るが、夜から風雨強くなる。
5月2日　●
CS（8：30）－野口五郎岳（12：00）
風雨が強く、水晶アタックはやめて野口五郎岳までびしょ濡れになりつつ進む。野口五郎岳手前ではゴジラの巣となり、二人共はまりまくっていた。
5月3日　◎
CS（4：45）－鳥帽子小屋（6：40）－七倉（11：30）
鳥帽子までは雪が皆無であった。ブナタテ尾根は所々崩壊しており、雪が少ないため、思ったより苦しんだ。赤布は多いが、実に疲労させられる下りであった。

（記　紫藤）



☆南西尾根概念図

夏山定着

涸　沢

期　間　　7月17日～7月31日
参加者　　戸叶（L）、奥山、来村、鈴木、紫藤、柴田、東條、大倉、大石（OB）

7月17日　◎
沢渡（7：10）－上高地（10：55）－横尾（16：10）
前日からの雨で沢渡から先は通行規制が敷かれており、仕方なく歩き出す。中の湯付近まで来た頃に開通し、バスで上高地へ。横尾へ着いた時はへとへとであった。
7月18日　●
出発（6：15）－涸沢B.C.（12：30）
東條がバテ気味で、3のガリー出合で荷分けをする。その後は快調なペースで涸沢へ。
7月19日　◎
B.C.（6：00）－雪訓（6：50～

夏山合宿行動概要

	戸叶	奥山	来村	鈴木	紫藤	柴田	東條	大倉	大石
17・18	入山				入山				
19	雪訓				雪訓				
20	奥穂北東稜		奥又白ビバーク		北東稜	奥又白ビバーク	奥穂北東稜		
21	中岳ビバーク	雪訓			雪訓		中岳ビバーク	雪訓	
22		北穂	TK		涸沢北穂～ビバーク	TK		北穂	
23	TK		北尾根			北尾根	TK		
24	右岩稜	北壁A	松高		松高	右岩稜	北壁～Aフェース		
25	北穂東稜	ドーム北壁	北穂東稜		北穂東稜		ドーム北壁	北穂東稜	
26	T1	屏風敗退			T1	屏風敗退		T1	
27	雪訓			入山	雪訓		TK	雪訓	入山
28	ドーム中央	ドーム西壁	4尾根～ツルム	ドーム中央	4尾根～ツルム	ドーム西壁	TK	ドーム中央	ドーム西壁
29	北新敗退	TK		北新敗退	ドーム北壁	TK			ドーム北壁
30	青白鵬翔		雲稜	TK	北尾根	雲稜	TK	北尾根	
31	下山								

10：50）－B．C．（11：10）

無名ルンゼ出合付近で、キックステップ・アイゼン歩行・滑落停止を行う。

7月20日　◎→●

〈奥穂北東稜〉

BC（6：00）－奥穂（12：15）－BC（13：50）

直登ルンゼ側より取付く。無名ルンゼのコルへの下りは懸垂20m。核心の3級の壁は右端の凹角からフェースを登るが、浮石が多くぬるぬるでピンも全く効いていない。

〈奥又白ビバーク〉

BC（5：55）－奥又白池（11：45）

中又白谷は水量が多く、雨も降り出してきたため断念し、中畠新道経由でBSへ。奥又の池は汚ならしい。

7月21日 ◎→●

〈ビバークの続き〉

出発（7：05）－BC（9：50）

7時まで時間待ちをするが前穂はガスの中で、北壁～Aフェースを断念し、V・VIのコル経由でBCに戻る。

〈雪　訓〉

BC（5：55）－BC（9：50）

雪訓も兼ねてVI・VIIのコルから最低コルまで北尾根下半を縦走する。

〈中岳ビバーク〉

BC（5：25）－天狗のコル（10：05）－槍の肩（13：10）－中岳BS（15：20）

横尾谷はかなり増水しており、右股出合で約1時間の大高巻きを強いられた。右股のカールは人手が入っておらず気持ちの良い所だ。疲労と天候の加減から小槍の登攀は中止する。

7月22日 ●

〈ビバークの続き〉

出発（5：15）－北穂（8：45）－BC（10：30）

雨続きで大キレットは岩も鎖もぬるぬるしており結構恐しい。

〈北穂～白出のコル〉

BC（7：30）－北穂（10：00）－BC（13：05）

この日紫藤がザイテン下部で、単独でビバークを行う。

7月23日 ●→◎

〈北尾根〉

BC（6：20）－V・VIのコル（7：20）－前穂（11：15）－BC（13：55）

前穂はガスに覆いつくされ我々を拒んでいる。III峰の登りで確保点を間違え、少し手間取る。1P目奥又白側をトラバース、2P目はチムニー左のフェースを登る。吊尾根を経てベースへ。

7月24日 ○→⊙

〈右岩稜古川ルート〉

BC（4：45）－取付（7：30）－右岩稜終了（12：05）－Aフェース（13：05）－BC（16：45）

1P：取付を間違え途中からAOで強引に登る。

2P：本ルートに戻る。快適な右上バンド。

3P：快適なフェースから凹角を登るが、ピッチを長くのばしすぎ、洞穴状のハング下でビレーする。

4P：ハング下を右にトラバースし、かぶり気味のクラックをA1で抜ける。

5～8P：5Pで右岩稜は終了で、北壁上部からAフェースを登る。

取付の誤り・ビレー点ミス・時間のかかり過ぎなど反省点の多い登攀で、総合力の欠如を感じた。

〈北壁～Aフェース〉

BC（5：00）－取付（8：30）－終了（12：15）－BC（15：50）

1P：松高カミンかどうかはっきりしない所を登り北壁大テラスの下へ。

2P：北壁大テラスを行く。

3P：チムニー状の所を登り、ハングを左から回り込む。

4P：Aフェースに取付く。

5P：ハング左のチムニーを登る。快適。

〈松高左ルート〉

BC（4：55）－開始（8：10）－終了（15：00）－BC（15：50）

松高ルートの左に一見そっくりなルートがあり間違えて取付く。結局ハング帯を抜けるまで判らなかった。核心のハングを紫藤がAOでリード中、ピンが抜けて約4mの墜落をする。けがはたいしたことなく、確保点まで降した後、ピンを打ち足して来村が同じ所をリードする。

ルートとしては、数ポイントだけが人工で、（もろくA1＋）、フリーの要素が強い好ルートだと思う。

取付きは、C沢のF1手前を左岸にあがり沢

沿いのカンテを登り右上するバンドに出る。出てすぐにビレイ点があるがもう少し右上するとボルト２本のビレイ点を取付きとした。

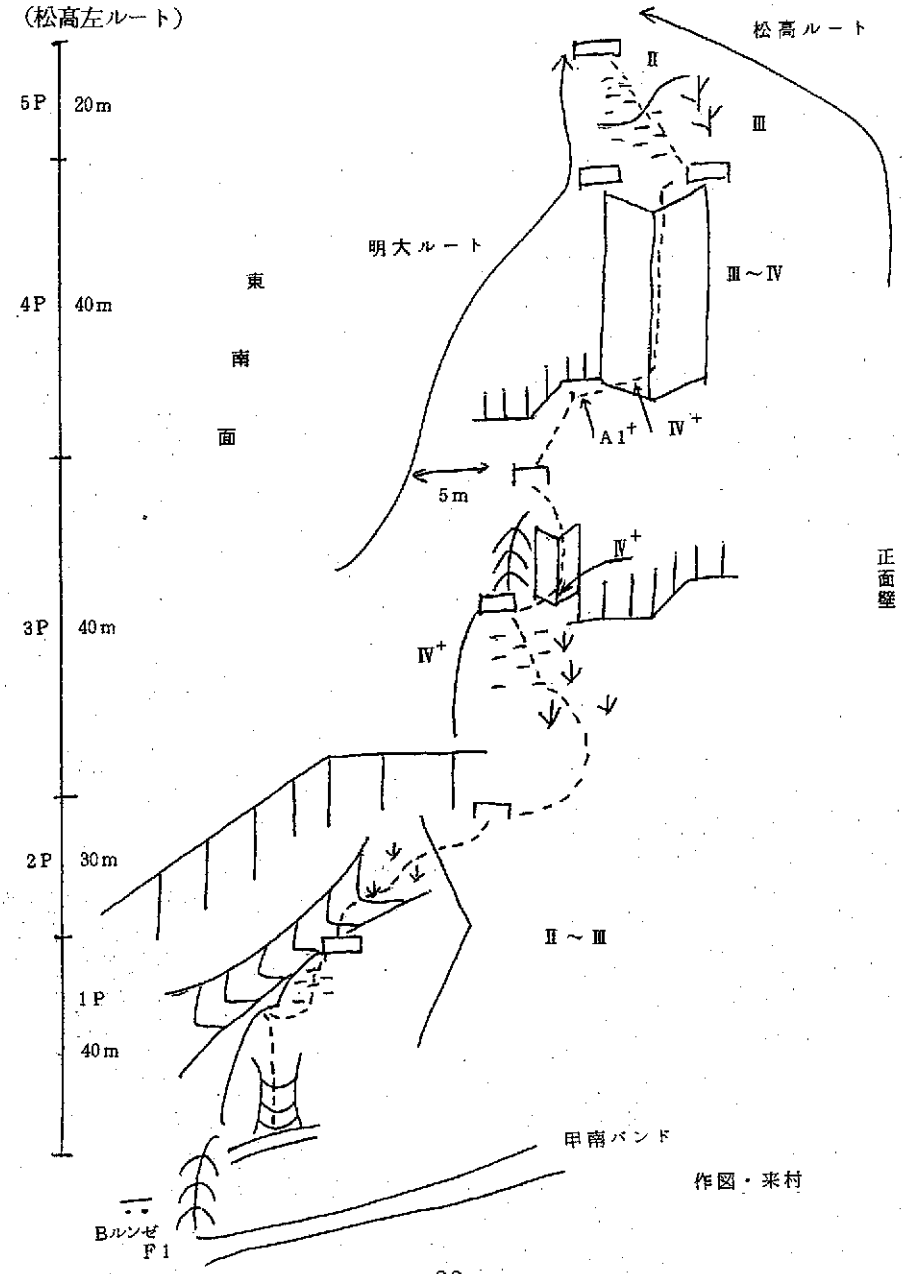
甲南バンドはもっと下の幅の広いバンドであった。

ラインは、東南面と正面壁のコンタクトにだいたい取ってあり、４Ｐの開始点は、東南面の明大ルートの５ｍ程横ですぐにエスケープ出来そうであった。

全５Ｐ　Ⅳ$^{+}$・Ａ１$^{+}$

〝北条・新村〟ルートにまつわる話のように（ＣＪ２３，岩雪７１号）いろいろなルートが埋もれているようである。

前穂Ⅳ峰正面・東南面コンタクトルート
（松高左ルート）



7月25日 ①

〈北穂東稜〉

BC（5：10）－北穂（9：30）－BC（11：30）

ゴジラの背から東稜のコルへの下りで、大倉を確保する。下降は北穂沢。

〈ドーム北壁右ルート～南峰チムニー〉

BC（4：50）－ドーム北壁（7：10～8：20）－南峰チムニー（9：00～9：20）－BC（13：20）.

いずれも短く快適なルートだが、両ルート共チムニーではザックがひっかかりうっとうしい。終了後南峰でのんびりする。

7月26日 ①→◎

〈T1フランケ左ルート〉

BC（4：45）－取付（9：15）－（14：40）－BC（17：00）

アプローチのセマ谷は浮石多く気を使う。

1P：ルートミス。左ルート右のふくらんだ所から取付き、ピン連打の凹角状からリッジを登る。A0。

2P：正規のルートに戻る。右上気味にチムニー・クラック・凹角を登る。

3P：不安定な草付を登り大テラスへ。

4P：ルートを右にとりすぎ難しい。クラックを登り左上後ピン連打のフェースを直上し左へトラバース。残置ピンとフレークをつかんで左上の狭いレッジに出る。Ⅳ+・A0位。

5P：ホールド豊富な凹角を5m上ると稜線に出る。

〈屏風敗退〉

BC（4：00）－T4尾根取付（5：40）－搬出開始（6：00）－来村先行(6：10)－柴田先行（6：40）－来村・柴田1ルンゼ押出（7：00）－来村帰着（7：10）－柴田横尾着（7：20）－柴田帰着（8：00）－奥山・東條BC着（10：50）－来村・柴田（12：00）

T4の取付で東條が小スリップし肩を脱臼する。東條は以前にも沢登り中に肩を脱臼しくせになっていた。直そうとするがどうしてもはいらずそのまま搬送を開始する。途中から来村が医者を呼びに横尾に先行する。東條の痛みがひどく、肩をはずしたままの状態での搬出は無理で、1ルンゼ押出の途中に休ませ、柴田が治療法を聞きに横尾へ先行する。横尾に医者はおらず、来村・柴田で打ち合わせをした後、来村は東條に合流し、柴田は横尾小屋から徳沢園日大診療所に、電話で治療法を問い合わせる。柴田合流後治療は成功し、奥山・東條はBCへ、来村・柴田は横尾へデポしたザックを回収しに戻る。東条は涸沢診療所で診察を受けるが、特に問題はないとの診断で、定着終了までTK（テントキーパー）をする。

7月27日 ①

〈雪訓〉

BC（4：50）－雪訓（5：50～10：30）－BC（10：50）

キックステップを中心に前穂下の斜面で行う。

〈大石・鈴木入山〉

上高地（7：00）－横尾（9：20）－BC（13：10）

7月28日 ①

〈4尾根～ツルム正面壁〉

BC（4：10）－取付（9：40）－終了（14：30）－BC（16：30）

C沢左俣の下降は、落石はもちろんのこと、所々細いスノーブリッジが残っており、沢通しには行けず、側壁のトラバースやクライムダウンを強いられるなど、運動靴の我々にとっては危ういものであった。出来るだけ急いで4尾根に取り付き、快適なABCカンテ（とりわけBカンテは美しい）を登り、Cカンテのコルから懸垂してツルム正面壁に取り付く。滝谷は大体においてそうだが、このルートもピンが多いのでさしたる威圧感は感じられず、天気もよく快適であった。ツルムのコルへ懸垂20mで下降し、出だしのクラックが美しいDカンテを登り、次

のピッチでA0で垂壁をトラバース気味に右上すれば終了。

〈 **ドーム西壁雲表ルート** 〉

BC（4：40）－取付（7：35）－終了（12：50）－BC（15：30）

1P：下部は体の入るチムニー。上部に行く程細くなり難しい。しかし岩は硬い。上部はクラックを右に出てA1。

2P：浮石だらけの草付を左上し、洞穴の上の浅いくぼみを目指す。

3P：もろい岩を登る。

4P：やや右にトラバースしたのち、凹角を直上。

5P：右に5m位トラバース。下り気味でホールドが細かく緊張する。次に徐々に狭くなるチムニーをA1で抜ける。

〈 **ドーム中央稜** 〉

BC（4：50）－取付（8：50）－終了（14：30）－BC（16：00）

アプローチは3尾根を忠実に下るより、右股側の斜面にある踏跡を適当に下った方がよい。最後は懸垂でT2付近に下りるのが無難。ドーム中央稜は岩も堅く楽しいルート。ノーマルルート以外にもバリエーションルートがいくつかあるようで、それらを登って遊ぶのも一興で、とりわけ最終ピッチ右上のダブルクラックは魅力的であった。

7月29日　①→◎

〈 **ドーム北壁左ルート** 〉

BC（4：40）－B沢下降点（7：00）－取付（8：30）－終了（10：30）－BC（13：30）

当初の予定はP2フランケであったが、B沢の状態が悪く変更する。B沢は幅も狭く、落石が起れば逃げ場はない。

〈**四峰北新ルート敗退**〉

BC（4：30）－C沢出合（7：00）－Ⅲ・Ⅳのコル（10：30）－BC（11：20）

C沢出合付近で戸叶の起した落石が鈴木の左肩に当たる。肩が上がらず力が入らない状態のため登攀は断念し、正面壁偵察後ベースに戻る。鈴木は涸沢で診察を受けるが、軽い打撲で別状はないということ。

7月30日　①→◎

〈 **北尾根遠足** 〉

BC（4：40）－前穂（9：45）－BC（12：00）

天気もよく快適な遠足であった。

〈**屏風・鵬翔ルート**〉

BC（4：10）－T4尾根取付（5：15）－鵬翔開始（7：30）－終了（12：40）－BC（15：00）

（T4尾根）

1P：左に張出した岩から取付き凹状フェースを登る。ややもろい所あり。

2P：ホールドは大きいが傾斜がきつい。

（鵬翔ルート）

1P：草付バンドのトラバース。容易。

2P：凹状フェース～オフィズス～フェースを右上。トポではⅢ級だが、Ⅴ級マイナス位に感じられる。

3P：A1とフリーのmixでかぶり気味のフェースを登る。ザイルが流れない。

4P：核心のA2。ピンは近く難しさはないがしんどい。狭いレッジでビレー。

5P：Ⅳ・A1だがA1でいける。

6P：A1でフェースを左上。

7P：A1で直上後、灌木帯に入る。

8P：草付～ブッシュを登っていくと、Ⅳ$^{+}$位はありそうなフェースが出てくる。気力もなくAOで登る。

9P：8Pで終了だが念の為もう1P出す。

〈**屏風・雲稜ルート**〉

BC（4：15）－取付き（5：20）－終了（13：45）－BC（16：00）

鵬翔パーティーに先行してT4尾根に取り付

く、１Ｐ目が意外に悪い。

Ｔ４から取り付く。

１Ｐ：ジェードルの左壁の快適なフリーで、〝Midnight Express〟の左上する美しいクラックでピッチを切る。

２Ｐ：ジェードルを進む。フリーでも行ける（Ｖ）ところを人工で行ったが操作がやりにくい。

３Ｐ：扇岩への左上バンドに入るまでが微妙で数ポイント人工となる。扇岩テラスは、扇岩と岩壁にはさまれた奇妙だが安定したテラスである。

４Ｐ：ボルトダラーでつるつるの岩だが後年フリー化されてびっくりした。一部のボルトはリングが欠損している。（細いシュリンゲ必要）

５Ｐ：リング下をトラバースしてルンゼに入り、さらに美しいスラブに出る。楽しいフリーだが一部難しく（Ｖ－）、登山靴だとスラブ状なのでさらに難しい。

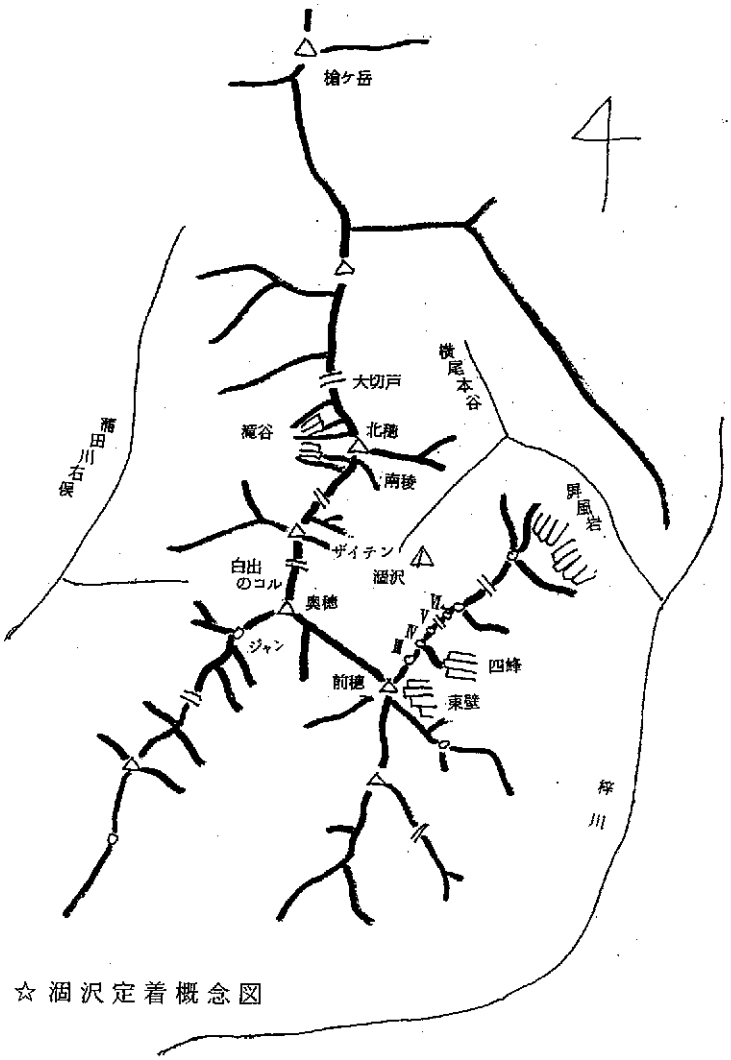
６Ｐ：さらに壁のどんづまりまで延ばす。

７Ｐ：左の樹林帯沿いに草付きまじりのルンゼを登って終了。

初登ルートだけあってラインも素晴しく楽しいルートだ。

フリーでさらりと登れたら楽しいだろうと思う。扇岩上の１Ｐを除くとＶ＋～Ⅵ－なので挑戦されたし。

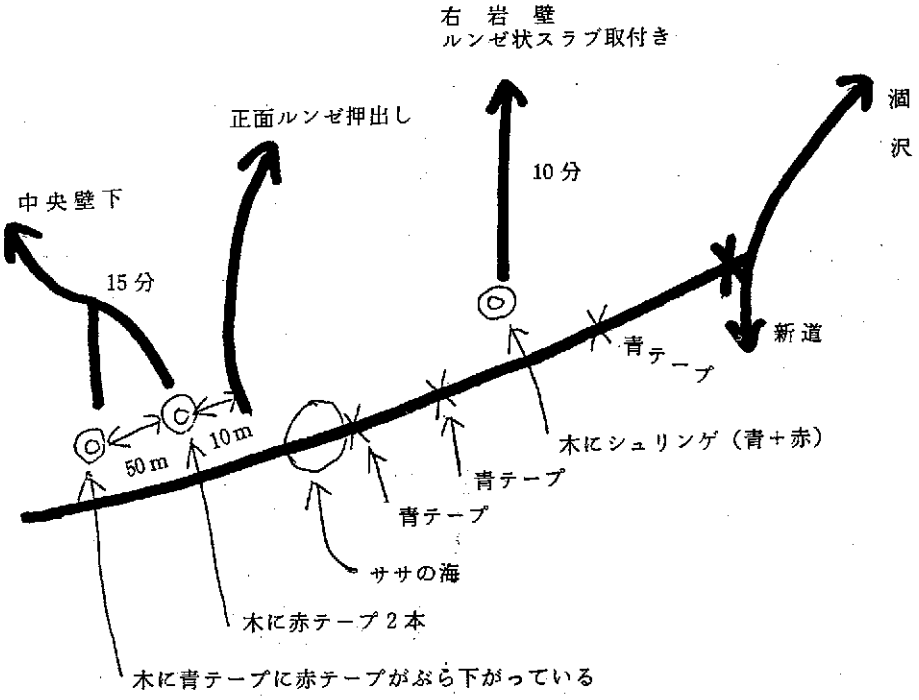
（記　戸叶、来村）



☆ 涸沢定着概念図

☆ふろく

〈 涸沢から屏風岩各岩壁へのアプローチ 〉



涸沢から約４５分で新道と旧道の分枝に着く、旧道は安定した山道で、５分程で右岸壁への入口、さらに１０分程で、対岸への橋が崩壊している樹林帯に着く。

東壁へは、涸れ沢沿いに左方を目指して行くと１５分程で中央壁の下に出て、壁沿いに１０分程左上するとＴ４尾根下に出る。

（記　来村）

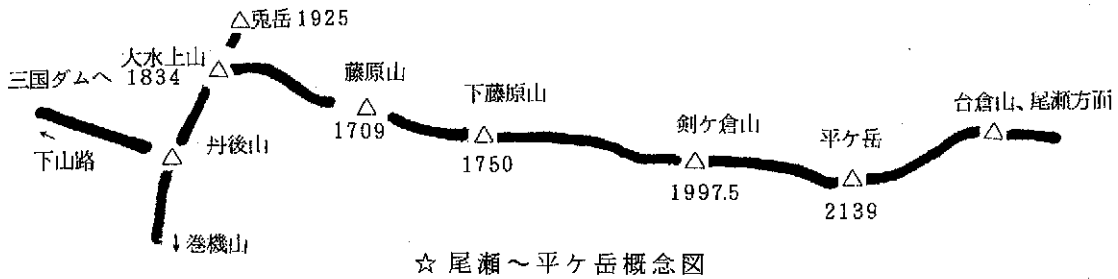
夏　山　縦　走

尾瀬～平ケ岳　縦走

期　間　　8月3日～8月11日
参加者　　柴田（L）、紫藤

8月3日　○
鳩待峠（8：25）－龍宮小屋（11：00）－下田代十字路（11：45）
龍宮小屋で大倉がバテる。幕営後、熱を測らせると38.9℃あり明日の沈澱を決定する。
8月4日　●　沈澱
8月5日　◎　時　●キ
CS（8：20）－鳩待峠（11：05）－CS（8：20）－鳩待峠（11：05）－CS（14：00）
大倉平熱。しばらく様子を見てから、鳩待まで下山させるため送ってゆく。大倉下山。
8月6日　●キ
CS（6：00）－平ケ岳登山道取付（11：20）－下台倉山直下（12：10）
昨日までとうってかわって人気のない木道を行く。温泉小屋からは普通の道となる。只見川沿いにルートを取り、渋沢温泉を経て国道に出る。湿っていなければ快適であろう。
8月7日　●キ
CS（5：25）－台倉清水（10：05）－池ノ岳（12：30）
意外にきつい登りを、全く人に出会わない静けさに慰められながら進む。道ははっきりしており、途中2ケ所の水場も水量こそわずかだが充分使える。平ケ岳山頂付近は整備の行き届いた、高層湿原。地上の楽園の感がある。水も豊富でうまい。
8月8日　①
CS（5：40）－剱ケ倉山（8：50）－下藤原山手前1710m付近のコル（12：25）
ガスが濃く、天気待ちをするが、晴れると見て出発。平ケ岳山頂を過ぎ、しばらく行くと、笹のブッシュに突入す。剱ケ倉の下りは凄まじい限りであった。下藤原山手前で、ナタで笹を強引に切り払ってテントを張る。水場はない。
8月9日　◎
CS（5：40）－藤原山（10：00）－大水上山（13：20）－丹後山（14：00）
藤原山周辺で再び猛烈なブッシュに突入し、全く進まない。暗然としたが、大水上に近ずくにつれ、ブッシュ状態も良くなり、キスリングを振り回しながら突破してゆく。
大水上からは一般道に出て、その有難さに感動しながら歩いた。
8月10日　◎のち①
CS（6：40）－敗退決定（8：30）－丹後山手前1700m（9：30）
今日からは巻機山を目指したが、越後沢山に近づくにつれ、気も狂わんばかりに強烈なブッシュが行手を阻んだ。まったくこんなに激しいブッシュにつかまったのは初めてである。
1710mのポコで信じ難いことだが紫藤の靴が大きく裂け、修理不能。裂け目から次々と折枝が靴内に入ってくる。二人とも完全にうんざりして、敗退を決定し、引き返す。
8月11日　①
出発（7：40）－栃の橋（9：30）－十字峡（10：10）－野中（12：30）
三国川目指して尾根をかけ下る。下山した時には二人共野人のごときであった。

（記　紫藤）



☆ 尾瀬～平ケ岳概念図

谷川岳定着

期　間　　8月2日～8月11日
参加者　　来村（L）、奥山、（戸叶）

8月2日　◎

土合駅（12：35）－指導センター（12：35－13：40）－マチが沢キャンプ場（14：05）

うだる暑さの中、鈍行を乗り継いでかなり不気味な地下ホームに降りる。かなり長い階段を上がると廃虚のような駅舎がある。そこから観光客の車がブンブン走る道をマチが沢へ、短いアプローチだが長く感じてしまう。テントを張ってから一ノ倉へ散歩に行く、かなり印象的で陰惨な眺めだった。ただし一ノ倉沢出合までは、完全舗装で観光客及びジョガー（！）であふれていて、〝山〟ではなく、〝観光地〟である。

8月3日　◎→①

〈マチガ沢東南稜〉

BC（5：10）－東南稜取付き（8：40）－終了（9：45）－稜線（9：55－10：20）－厳剛新道分枝（10：55）－BC（11：45）

ウォーミング・アップということでのんびり遠足（？）する。

〝S字状〟手前より雪渓が出て来て、大滝の所で途切れる。大滝を右岸より巻くが軟弱な草付きとブッシュで悪かった。四段の滝の上から広々とした雪渓になるが来村以外は、運動靴で来ており、なれないうちは恐いようだった。傾斜が強くなって狭くなると雪渓が消えるが滑りやすく、滝の乗っ越しには、少々苦労した。東南稜自体は、3Pの易しいルートで、岩も硬く晴天の中を快適に登った。登山道は、なだらかで歩きやすいが、厳剛新道は急で、じめじめしたイヤな道である。

帰ってから一ノ倉沢左岸の歩道上にBC移動を行なう。テント場指定地ではないが問題はないようだ。

8月4日　●

☆沈澱

台風10号が接近中であった。回復の見込みがないので戸叶さんは、帰ってしまう。

8月5日　●

☆沈澱

テントの場所が悪く、〝床上侵水〟となってしまった。

8月6日　◎

☆沈澱

やっと雨があがったので、とりあえずテント移動そして、物干しに精を出した。

8月7日　◎→①

〈衝立岩ダイレクトカンテルート〉

BC（5：00）－テールリッジ末端の岩場上（5：50）－アンザイレンテラス（7：00）－開始（7：30）－終了（12：30）－北稜下降終了（13：50）－BC（15：00）

ところで谷川岳に関するガイドの中で最良のものは、〝岩と雪〟118号付録の〝谷川岳ルート図集〟である。

自分達の行った後に発売され、「もっと早く出ればよかったのに。」と思った。下降路等も

詳しく、解説・情報とも適確である。ほめすぎかもしれないが、これ一冊でほぼ完璧である。

ここでは、このルート図集をもとに解説し、補足の説明もいれて、参考となるようにしたい。

さて一ノ倉の一本目は、計画では烏帽子南稜であったが、天気が悪く、岩がびしょびしょであると思われたので、人工主体のルートからやることにした。

テールリッジ末端まで雪渓を行く、ヒョングリの滝が最も早く崩壊するのでここの状態に注意すること。

上まで行きすぎて、運動靴だったので右往左往するが正しくは、末端壁の右端、衝立沢とのコンタクトラインのリッジ状を行き４０m程で樹林帯に入る。ノーザイルで問題はないがⅢはあるので最初はザイルを出した方が無難かも。樹林帯を抜けると特徴あるスラブに出る。このスラブの最上部が悪く（１０m程）我々は毎回ザイルを出した。

中央稜手前よりアンザイレンテラスにトラバースする。わかりやすい。

懸垂して取り付くが直上するミヤマルートに入ってしまったので、念のため右へルートを取り直す。草付きなので最初からビショビショである。途中崩壊していて右へ避けたためのザイル足らず２Ｐ目５m程トラバースして大テラスに出る。あまりに短いのでビレイを交代してさらに来村リードで行く。ピンも思った程悪くないが、フリー化の際に整理したのか、〝選んで〟使える程多くはない。次の３Ｐは左のでっかいハングとカンテのフェースを行くがかなり暗くびしょびしょで悪い（よくまあフリー化する気になったものだ）（Ａ２）したがってピンが腐っているので要注意。４Ｐ目は、人工の後フリーになるが草付きまじりでいやらしい（Ⅳ）。頭の方に上がらず右へ逃げるのが残念なルート（初登者は、そのつもりだったそうな）だが、我々は、時間がかかりすぎたようだ。北稜を下降したがルートは明瞭である。掠奪点より衝立前沢を降りた、小さい沢で２，３ケ所を除いてなんでもない。ただし、本谷が見える当たりに段状の滝があり、できたらダブルで懸垂したいところ（支点あり）だ。

８月８日　ｇａｓｓ→①

〈コップ状岩壁緑ルート〉

ＢＣ（４：５５）－掠奪点（６：３５）－取付き（７：３０）－開始（８：２０）－終了（１３：０５）－（北稜）－掠奪点（１６：３０）－ＢＣ（１７：２０）

今日もガスってすっきりしないので人工である。前沢手前のシュリンゲが目印のところから道をたどり、岩場を通ったりして前沢に回り込むと、例の滝が見えてくる。しかしこのあたりから踏跡が不明瞭になってしまう。結論から言うと、このあたり人は入っているのだが、踏み跡は一定していないのだろうということである。したがって、滝の上に強引に降りるのがもっとも早いと思う。又は前沢を下からつめるか（滝は右岸から）である。（衝立沢は、落石が恐い）

というわけでやっと掠奪点に着きコップスラブを登るわけだが、これもくせ者で緊張する。段状のスラブでラインとしては、右端の岩溝状と、１０m程左のクラック状の２つ取れる。奥山は右、自分は左を行ったが、当然スラブ全体がびしょ濡れでⅡ～Ⅲ、所々Ⅳといった具合で草付を握って登る。特にαルンゼを分けてからが悪い。

というわけでコップの広場という大テラスに着いた。さて見上げる壁は、意外に小さく（正面）、雲表と縁山岳会が物量作戦で初攀を争ったとは思えない。

〝雲表〟は、いかにも弱点をついており、〝縁〟は、最も張り出しが大きい所のように見える。それにしても空は暗く水がハングからしたたっている……。不快である。

見晴えのよい緑ルートに取り付く、１Ｐは、左から外斜テラスにあがるだけである。次のピッチに備えてビレイ点を固めようとするがよくない。２Ｐ奥山リードで行く、ボルトは出だしに使われているだけでハング部分は、すべてハーケンである。そのためもありピンが遠く苦しい所がある、張り出しも大きくなく、足もほとんどつくのだが立体的で登りにくい、ハング上もピンが悪い。少々なめていた我々にとって充分勉強

になる人工入門ピッチであった。（A２）

着いた所は、あの松本竜雄と山本勉が握手したというカール下テラスである。ここから凹角を３０ｍ登るが、まさにびちょびちょで草付きも混って悪い。（Ⅳ$^{+}$）

ここより草ボウボウのゆるいフェースを左上しピナクルのそのまた左にある狭い砕石ルンゼをひたすら目指す。ビレイ点は、４０ｍごとに一応ある。（２Ｐ・Ⅲ$^{+}$）、砕石ルンゼは、かなり狭くチムニー登りになる所もある。やはり当然のごとく濡れていてイヤ気がさしながら２Ｐギリギリいっぱいで懸垂岩のコルに出て終了した。（計７Ｐ）

さて下降は、稜線に出るか、南稜を懸垂下降するか、北稜の方へ烏帽子尾根を降りるかであった。そこで浅はかな我々は、登りはシンドく南稜は、そのうち来るし、と北稜へ向いました……。

まず懸垂岩を正面から登る（１０ｍA１）、そこより凹状岩壁終了点まで懸垂２Ｐを含めて１ｈかかった。高度感最高で緊張感あるクライムダウンが連続していた。参ってしまいました。

８月９日　●→gas

また岩が濡れそぼってしまうと思いつつ沈澱である。明日は、日曜だがテントは、１０張程である。

８月１０日　gas→①

〈烏帽子奥壁南稜ルート〉

ＢＣ（４：００）－南稜テラス（５：２０）－開始（６：１５）－終了（８：０５）－五ルンゼ頭（８：５５～９：３０）一ノ倉岳（１０：００～１０：２０）－芝倉沢出合（１２：１０）－ＢＣ（１３：１０）

本来なら最初に来る予定の入門ルートなのでアッという間に終った。しかしながら天気すぐれず、濡れ濡れで一ノ倉では、乾いた岩に触れるのは難しいのであった。コンテも含んで計５Ｐで、５Ｐ目のフェースの最後が傾斜がきつく濡れている状態で緊張した。（Ⅴ－）

一ノ倉尾根は、懸垂岩より下と違い安心して歩ける。展望もよいだろう（我々は gas でした）、ただし５ルンゼの頭は、もろくて悪いので１Ｐザイルを出した。

西黒尾根は降りたので、芝倉沢へ降りて見ようと中芝新道を降りてみた。

堅炭尾根上は、道がしっかりしている（人通りは、少なそうだ）が、芝倉沢へ向けて支尾根を下るあたりから怪しくなって来て、芝倉沢に降りる直前１００ｍ程からは、ほとんど何もなくなってしまうので要注意、出合いまでは、雪渓を利用して降りた。

各沢の出合を結ぶ旧道は、旧街道らしくのんびり歩けるよい道だ。

ＢＣに帰るとそこは、完全なる観光地であった。バーベキュー、ビーチチェア、子供、オバサンと何でもござれで、我々すら観光資源の中に入っているらしく、オバサンによくテントの中をのぞかれたりした。参ったが、バーベキューのおすそ分けをもらったので何も言えない。

８月１１日　①

〈烏帽子奥壁変形チムニールート〉

ＢＣ（４：４０）－中央稜テラス（６：１５）－開始（７：２０）－終了（１１：５０）－下降開始（11：55）－南稜テラス（１３：３０）－ＢＣ（１４：３０）

落石を避けて中央稜で準備して行く、取付きがわかりにくいが左に行きすぎないようにすればよいか？１Ｐ目奥山リードでスタートするが天気は晴れているものの早朝なのでまだ乾いていない。

３Ｐ目の前のフェースを登り、４０ｍいっぱいで変形チムニーへ。４Ｐチムニー内は、びしょ濡れであったがバック＆フットで安定して登れる。出口がいやらしく、A0となってしまう。（フォローはフリー）（Ⅴ$^{+}$）、５Ｐ正面ルンゼを横切って中央カンテ５Ｐ目チムニークラック下まで延ばす（４０ｍ）、６Ｐ中央カンテルート６Ｐ目、７Ｐ正面ルンゼから回り込みテラスへ、８Ｐ目の前の短い垂壁を２，３歩Ａ１～ＡＯで抜けた。核心を分け合うためと、ザイルの流れのため短く切った（１０ｍ）。凹角は、変形チムニーと並ぶ本ルートの核心か、（Ⅳ$^{+}$～Ⅴ$^{-}$）このあたりでようやく岩が乾いてうれ

しかった（最終日でやっとである）、四畳半テラスを抜かして脆いチムニーを越す（４０m）、１０・１１Ｐで烏帽子岩下のカンテへ。１２Ｐ烏帽子岩を左へ回って濡れた凹角に入り、左の草付きに上がる（４０m）いやらしいピッチで終了。下降は、資料Ｐ４２の通りで、南稜の終了点まで２Ｐ懸垂した。六ルンゼ右股を下まで下降したが、馬ノ背の下から南稜に入った方がはるかによさそうだ。

合計４Ｐの懸垂の後、悪いクライムダウンの後、よくないブッシュで４０m懸垂してやっと本谷バンドに出る。

南稜テラスでゆっくり休んで下る。テールリッジを上部・下部で１Ｐづつ懸垂して、崩壊しそうなヒョングリの滝を避けて目の前の下降路を登る（４０m，Ⅱ）。

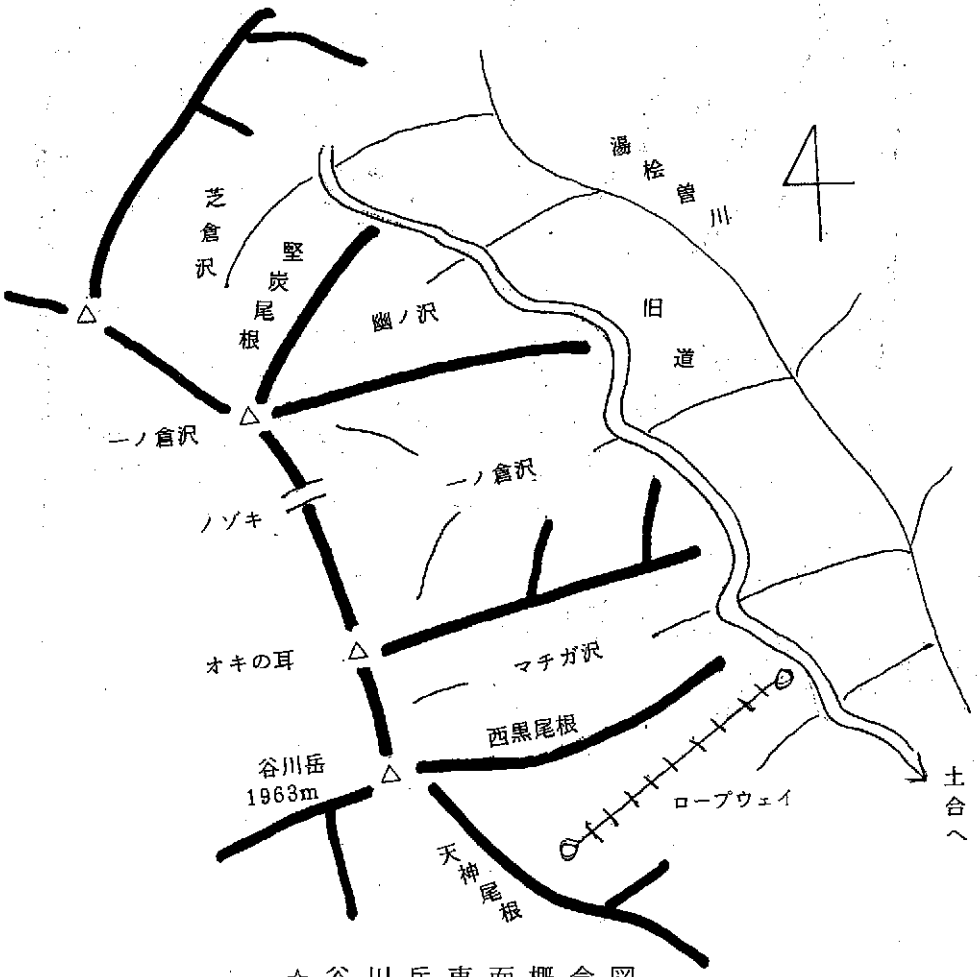
安全圏に入ってＢＣに帰ってすべてが終了した時は、この１０日間何もなくてうれしかったように思う。

おつかれさんの握手をして、撤収後のんびりと土合に向った。

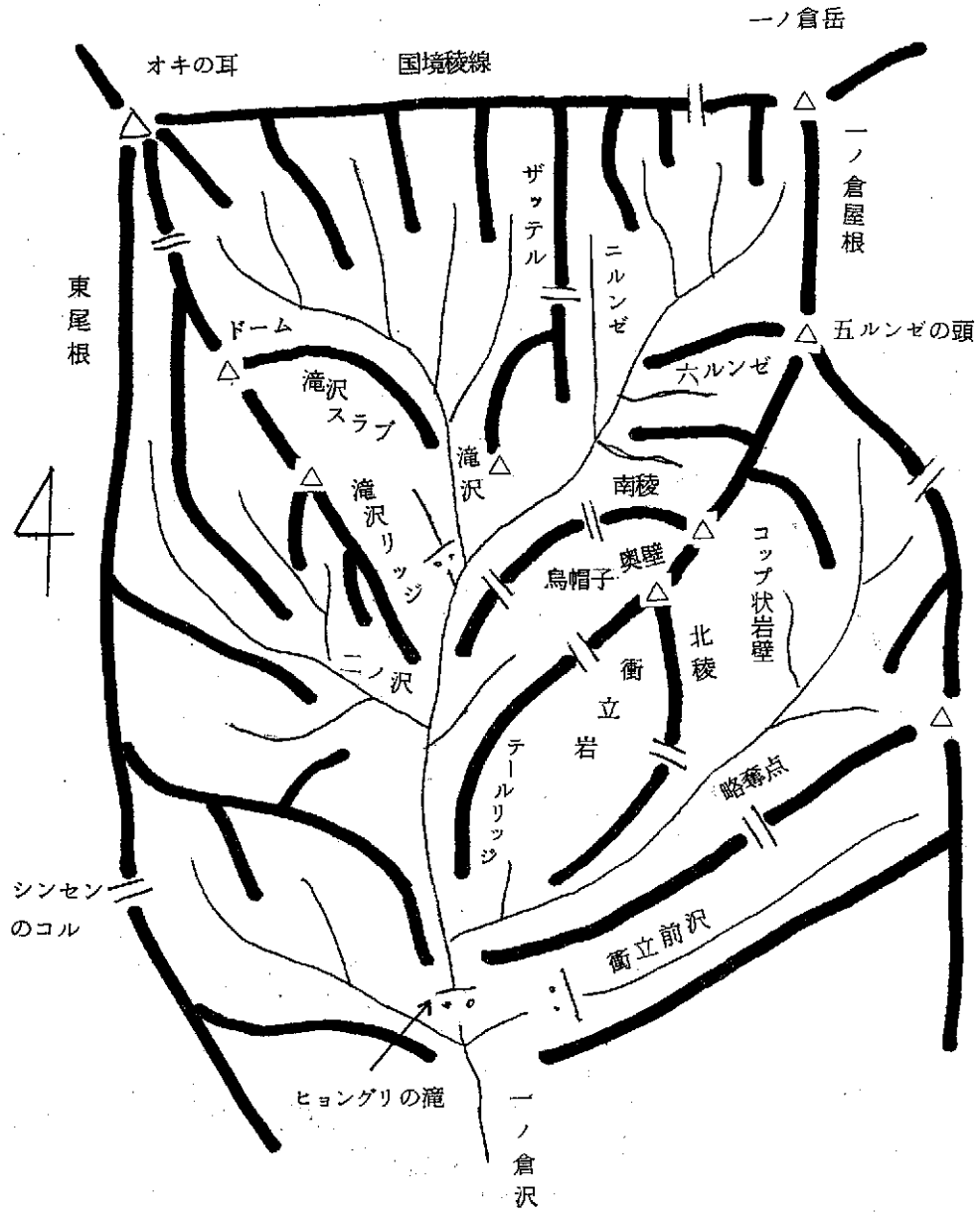
振り返って見ると、谷川という独得な感じの山でいろいろなルートに行けておもしろかったと思う。アプローチ、下降で苦労したことも今となっては、懐しい限りだ。

しかしながらどうせ行くなら、よりBig な〝雲稜〟や〝３スラ〟を登りたいなと思った。なおアプローチは運動靴で、ルート中は、フラットソールシューズで登った。

（記　来村）



☆谷川岳東面概念図


一ノ倉岳
オキの耳
国境稜線
一ノ倉屋根
ザッテル
ニルンゼ
東尾根
ドーム
五ルンゼの頭
六ルンゼ
滝沢スラブ
滝沢
滝沢リッジ
南稜
奥壁
烏帽子
コップ状岩壁
北稜
二ノ沢
衝立岩
テールリッジ
略奪点
シンセンのコル
衝立前沢
ヒョングリの滝
一ノ倉沢

☆一ノ倉沢概念図

大雪山系縦走

期　間　　8月13日～8月15日
参加者　　鈴木

8月13日　◎
層雲峡（11：15）－黒岳（12：05）－旭岳コル（15：15）
8月14日　●キ
CS（5：35）－旭岳（6：10）－旭岳コル（6：45）－稜線（7：30）－旭岳コル（9：20）
強風で同行者が転び、前進は困難と判断してCSに引き返す。
この夜風でテントのポールがおれる。
8月15日　●キ
CS（7：15）－旭岳（8：00）－姿見の池（10：00）
天候回復せず、あいかわらず風が強いため下山する。

後立山縦走

期　間　　8月24日～27日
参加者　　戸叶（L）、大倉

8月24日　◎
栂池自然園（9：05）－乗鞍岳（10：55）－白馬岳（14：35）－白馬天馬（15：15）
栂池のOB会の後入山。ガスの為展望はなかったが、白馬山頂でブロッケンを見る。
8月25日　○のち◎
出発（4：05）－不帰Ⅱ峰（8：34）－唐松岳（9：36）－五龍天場（12：15）
天気がよく快適だったが、不帰あたりで大倉バテだす。
8月26日　○のち◎
出発（4：05）－鹿島槍南峰（9：25）－種池天場（12：30）
鹿島槍からの剱は最高だった。種池天場は虫が多くて不快。
8月27日　①
出発（4：05）－鳴沢岳（6：33）－針ノ木岳（9：50）－蓮華岳（11：30）－扇沢（14：35）
蓮華岳は空荷でアタック、快適だった。針ノ木峠からの下りはくつずれした足にはきつい。
（記　大倉）

個　人　山　行

大峰・孔雀又谷

期　間　　10月12日～15日
参加者　　紫藤（L）、大倉

10月12日　◎のち●
前鬼口（12：45）－黒谷吊橋（14：50）－三段滝の行者道（17：08）
100mものナメ滝はきれいであった。
10月13日　◎
出発（6：00）－支流に入っているのに気づく（7：40）－左俣に入っているのに気づく（10：55）－アメシ谷出会の手前（14：30）
2つのルートミスの為3時間ほどのタイムロス。8mの滝の直登は快適。
10：14日　①
出発（5：50）－登山道に出る（8：20）－弥山（12：58）－一ノ峠（15：45）
谷から稜線上の登山道に出るのに長かったが上にいくと、台高がよく見えた。
10月15日　①
出発（5：45）－天ケ瀬（8：20）
一ノ峠からの下りは急で足が痛い。林道に出てからは下山ペースでとばす。
（記　大倉）

穂高屏風岩

期　間　　１０月９日～１０月１１日
参加者　　大西（Ｌ）、戸叶、奥山、来村

１０月９日
上高地（１７：５０）－横尾ＢＣ（２０：２０）
朝大阪を出発して、大西のＳＫＹＬＩＮＥで上高地を目指す。
夕暮れに上高地に着いて、ヘッドランプを灯もしながら、たらたらと横尾まで歩いた。
１０月１０日　①
〈東壁ルンゼ（大西・奥山）〉
Ｖ・Ａ２・４９０ｍ
１Ｐ：やさしい凹角
２Ｐ：出だしが少しやらしい
３Ｐ：出だしがＡØトラバースで難しい。
４Ｐ：Ａ１だが途中ピンがない所があり、やらしいフリー
５Ｐ：ＡØでバンドトラバース、ここからコンテ１５０ｍ
６Ｐ：チムニー状からしんどいフリーで、ハングからはＡ１
７Ｐ：垂壁をＡ１で、その後２ｍ程の苦しいルーフ（Ａ２）
８Ｐ：恐しいトラバースの後、Ａ１で少し登りシビアなフリー（Ａ１でも行ける）
９Ｐ：難しいフリーの後、ビレイ点手前をＡ１で（フォローは、フリーでＶ＋ぐらい）
10Ｐ：Ⅲ＋のはずだが、シビアなスクイズチムニーでＡØ
11Ｐ：への字ハング（割と簡単）
12Ｐ：Ａ１から草付き（恐い）
13Ｐ：やさしい
奥山がエイト環を落としたこともあって屏風の頭からパノラマ・コースを通ってＢＣへ戻った。

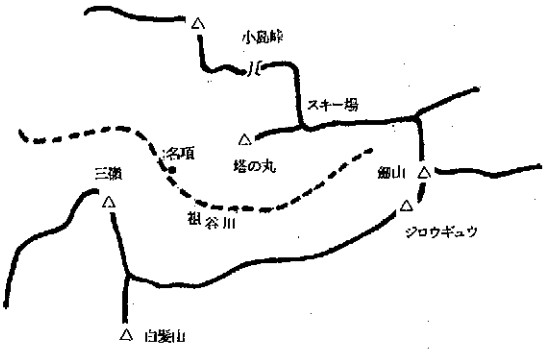
〈下又白・中又白散歩（来村）〉
ＢＣ（４：５０）－開始（６：２０）－終了（１４：００）－ＢＣ（１７：３０）
戸叶が今日入山の予定で１人手が空いていたので、偵察がてら散歩してみた。
ＢＣ（５：２４）－新村橋（５：５４）－下又白出合（６：２０）－Ｆ１前（７：３０）－新村橋（８：５０）－中又Ｆ１下（9:20）－新村橋（１０：１０）－ＢＣ（10:40）
下又白谷は、前穂のＡ沢のコルより伸びる奈臼尾根と明神東稜の間に入る谷を指す。
徳沢から非常に近いアプローチでありながら本谷の遡行ですら、完全に直登するならば、困難なフリー（Ⅵ以上）とネイリングが必要であり、また悪さで有名な菱形岩壁という大岩壁も持ち、上部には、あのウエストンがひょうたん池から下って横断（？）したルートもどこかに存在するという。不思議で魅惑的なフィールドである。
それを少しのぞいて来たわけである。
本谷は、梓川から望むと〝前壁（前衛壁）〟が見えるだけである。それはそこより右へほぼ直角に曲がっているからであって、雪渓もあってＦ１もなかなか見れない。
出合いから沢を結めて行くと、前述の前壁に当たる。この時期でも大量の雪渓で埋っていてルート捜しに苦労して、軍手で雪を握ってなんとか、雪渓上に這い上がる。
谷川で使った〝運動靴による雪渓技術〟で、右端まで行くがＦ１がなかなか見えない。何とかのぞき込むと、何とＦ１は、落口が雪渓と同じ高さつまり足の高さにあり、奈落の底にでも落ちるように豊富な水量を落としていた。なめらかできれいな滝であり、本谷であった。
（下又白谷については、登山大系の他、〝穂高岳の岩場〟（白山書房）が詳しい。また
ＣＪ. No. ２５にも〝断想　下又白谷〟と題した文章が載っている。）
一方中又白は、ポピュラーなルートではあるがＦ１は、赤茶けていてあまりきれいでなく、またなかなか手強そうである。
１０月１１日　●
沈澱
４人そろったものの雨である。
本日の夕食はひどいもので〝うどんスープ〟

で雑炊を作るというものだった。
１０月１２日　◎
　ＢＣ（７：００）－上高地（９：００）
　なぜか上高地まで走って競争してしまう。

剣山・三嶺（四国）

期　間　　１０月９日～１０月１１日
参加者　　柴田（Ｌ）、東條

１０月９日　○
　明渡橋（８：１０）－登山道入口（８：５０）－スキー場（１５：３０）
　小島峠から塔の丸へ続く道は、地図上に載ってはいるものの実際は踏み跡さえ明確でなく終始猛烈なブッシュになやまされた。特にとげのある植物が多く、互いにからみあってゆくてをふさいでいるところを泳ぐように進まなければならない。全くひどいところだ。全身傷だらけになりながら五里霧中で進んでいくと、やっと開けた所に出たと思ったらそこはスキー場であった。ほんとうは塔の丸へ行きたかったのだが……。
１０月１０日　◎
　スキー場（５：１０）－見ノ越（６：０５）－剣山（７：４５）－白髪山分岐（１２：３０）
　剣山は高原状のなだらかな山で、とてもきれいなところである。まわりは山ばかりでいかにも人里はなれた感があり、平家落人伝説もなるほどとおもわれるが、すぐ近くまで林道が山腹をむしばんでいるのを見ると目を覆いたくなる。道はわりによく踏まれており昨日とは雲泥の差がある。白髪分岐では人が大勢いて小屋を建てている最中であった。
１０月１１日　◎→○
　出発（７：００）－三嶺（８：３５）－名頃（１０：３０）
　昨晩は雷雲の直撃を受け非常に怖いおもいをした。翌日はうってかわって快晴で、三嶺の白い岩の露出と木々の紅葉との対照が日光に映えて、実に見事である。名頃からはバスで祖谷川へ下りたのだがここはとても風光明美なところであり、一度行ってみる価値は十分あるだろう。
（記　東條）



☆ 剣山概念図

偵　察　山　行

白馬・突坂尾根偵察

期　間　　１０月３１日～１１月５日
参加者　　戸叶（Ｌ）、柴田、大倉

１０月３１日　①
　笹平（８：４５）－稜線（９：４５）－１１５０ｍ付近（１４：１０）－１２４２ヘデポ（１４：２０～１５：２５）
　宇奈月から工事用車両に乗り笹平へ。笹平に水場はなく、トイレの貯水タンクの水を煮沸して使うことにし、飲料水は戸叶の持つきれいな水（５ℓ）で間に合わせることにする。駅すぐ横の不明瞭な踏跡をたどって急斜面を登るが、稜線直下では完全な藪こぎとなる。稜線には７００ｍ付近まできれいな送電線巡視道があり助かる。８００ｍから上は登るにつれてブッシュが深くなり、ペースも落ちていくが、この日はそれに気付かず、１２４２を突坂山頂上手前の平坦地と誤認し、順調なペースだと喜ぶ。

１１月１日　①

出発（５：４０）－突坂山（１１：０５）－１４８０ｍ（１５：００）

１２４２付近に１時間もかけてデポをし、荷も軽くなったと喜んで出発するが、１３００ｍ付近まで登ってから間違いに気付き、回収に戻る。約１時間半のロス。ブッシュは次第に深くなり、特に突坂山頂上直前は強烈であった。１４８０ｍピーク右側の池の向う側の大木にまずデポをし、それからデポ地のそばにテントを張る。

１１月２日　①　→◎

出発（６：００）－ｆｉｘ工作開始（６：３０）－終了（９：３０）－終了（９：３０）－１４８２（９：５０）－１７８０ｍ（１５：１０）

コルへはブッシュを握んでの急降下でｆｉｘ４０ｍ×２。コルの底は痩尾根でｆｉｘ３５ｍ。４Ｐ目が核心で、左上バンドからもろい岩の下を右上し、そこより木の根をつかんで登る。４０ｍ。５Ｐ目もブッシュを握んでの急登で、ｆｉｘ４０ｍで１４８２直下に出る。１４８２から１５００ｍ位までは痩尾根が続き、とりわけ１４８２～次のポコを降りるまでは要注意。１５００ｍプラトーへの登り始めも悪い。１５１０ｍからＪ．Ｐ．までは二重山稜気味の部分が現われては消える複雑な地形で、現在地の確認が難しい。ルートは終始右だが、痩尾根上に所々生えている大木を巻く部分がいやらしい。１４８０ｍ～Ｊ．Ｐ．は全体に気が抜けなく、突坂尾根の核心部となっている。天場は、１５００ｍプラトーを除くと適当な所はない。

１１月３日　①

出発（６：００）－１８２１（６：３５）－コル（１０：３０）－２２００ｍ（１４：１０）

ようやく雪が深くなり始め、ブッシュもややうすくなってきたが、２０００ｍ付近だけは別格で、ひどいブッシュであった。１８２１～次のポコの間はやや細く、１９６６からコルへの複雑な下り、コルからの上り（雪崩）、2197への上り（雪崩）などには注意が必要である。２１９７の次のポコにて幕営する。

１１月４日　⊛→⊙

出発（６：４５）－猫又（７：３０）－清水岳（１１：３０）

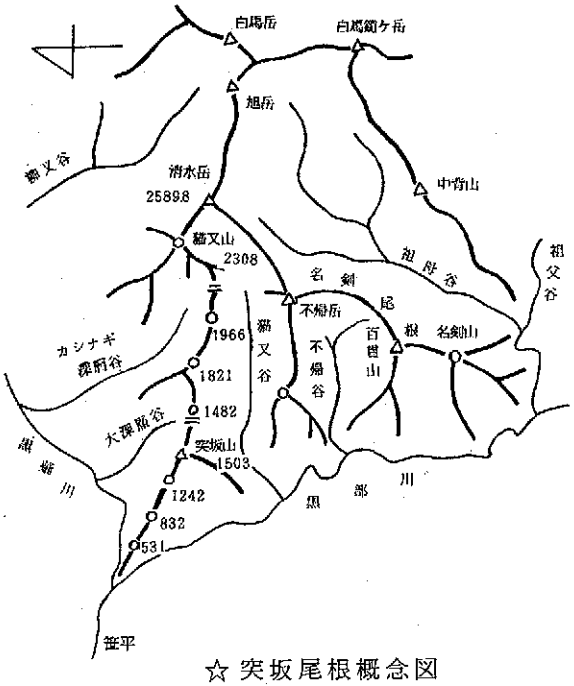
草朝は雨で、あられから雪に変わる頃出発する。猫又への上りは広く斜面で、可能性は低いものの雪崩の危険性がある。猫又～清水間は、雪庇と、猫又山頂と２５１３でのルートファインディングに気を付ければ大丈夫だろう。さすがにここまで上るとラッセルは深く、ワカンを付けてもひざ～もも位まである。天気が悪いのでこの日は清水までとし、早目にドンする。

１１月５日　①→◎

出発（６：１０）－白馬（１０：３０）－栂池自然園（１４：４５）

２６３６は痩せたリッジ伝いに越え、旭も直登し、リッジ右の急斜面を下りる。白馬山荘で後立偵察隊が上げた保険デポを確認し、今日中の下山を目指しひたすら下る。大池～自然園間は確かに広いが、地形が比較的単純なので、視界がなくても何とか行けるだろう。むしろ旭の降り口の方がわかりにくいかもしれない。

（記　戸叶）

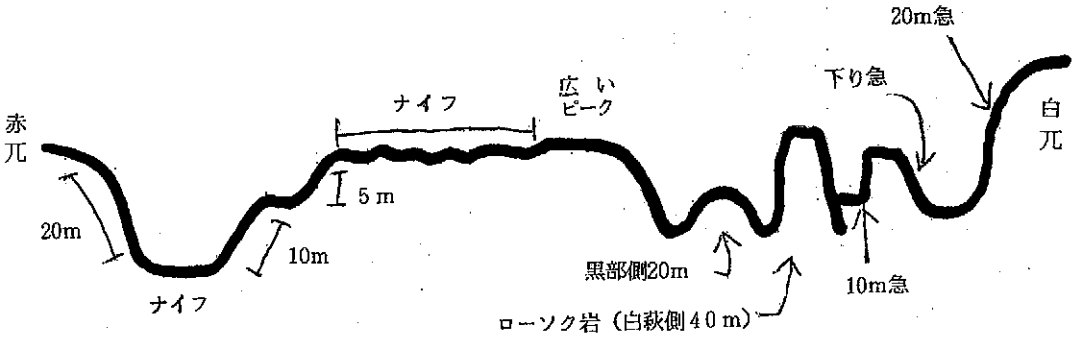


☆突坂尾根概念図

赤谷尾根～剣岳

期　間　　１０月３１日～１１月６日
参加者　　来村（L）、紫藤

１０月３１日　①/◎
馬場島（８：３０）－取入口（９：４０）－稜線（１０：５０）－１５６０ｍＣＳ（１５：００）
降雪直後に入山したようで、馬場島からすでにうっすらと雪が積もっている。
取入口の赤布のあるところから取り付く、がむしゃらに登ると尾根に出る。
稜線には、まずまずの道がついているが、１５００ｍ付近で消えてしまう。
雪が溶けて、全身靴の中までビショビショになり大不快であった。
１１月１日　①
ＣＳ（７：００）－１８５３Ｊ．Ｐ．（１１：００）－２１００ｍＣＳ（１４：２５）
１５６３～１６５０ｍまで二重山稜で広く、１７００ｍ前後で少々ナイフとなっている。
ブッシュは、１８５３Ｊ．Ｐ．付近で薄くなり、傾斜も落ち、広くなるが、大岩がゴロゴロしていたりして、意外に苦戦した。
ピークへの急登直前２０００ｍ付近がやせている。
ハイ松の上のフワフワしたところにテントを張る。２人天は、小さくて便利だ。
１１月２日　①時々ガス
ＣＳ（６：３０）－赤谷山（７：００）－白萩山（１２：００）－赤兀（１４：３０）－白兀ＣＳ（１５：４０）
２０００ｍからピークまで急登ラッセルとなる。
デポは赤谷山直下の岩峰上にする。（春山の結果からすると、赤谷ピークは、樹林帯東側を中心にかなりの積雪となるので、西側・樹林帯ぎりぎりにするのがよろしいと思う。）
白萩山・赤兀特に後者は急登となる。
赤兀からは、いよいよという感じで細くなりゼルプストをつけるがザイルの必要はなかった。



☆ 赤兀～白兀ルート図

１１月３日　①→◎
ＣＳ（６：１０）－大窓（７：１５）－２５６１ピーク（１２：００）－池ノ平山（１４：１５）－小窓ＣＳ（１６：１５）
出発してすぐアイゼンをつける。
大窓への下りはルート注意で、岩稜帯が右へ大きく曲がる所の手前の大きなルンゼに入って大窓まで下る。
頭までは急登で、出だしの所に岩があるので注意する。
２５６１ピーク（池ノ平北峰）手前のローソ岩は、左から２Ｐザイルを出して巻く。池ノ平山直下の岩壁部は、左からルンゼへ４０ｍ×２。
小窓への下りは、尾根沿いに下るがブッシュ

をつかんで強引におりるが、相当に急で小窓直前はほぼ垂直だ。

１１月４日 ㊍

ＣＳ（１１：２０）－小窓１王トラバース点手前のコルＣＳ（１４：３０）

天気が悪かったのが三ノ窓まで行こうとする。視界が悪かったので、左斜上する感じで小窓尾根に出る。

トラバース点と思われる地点に出るが、どうも違うので泊とする。なお１１月の状態で泊できるのは、ここのみである。(トラバース点手前のコル)

１１月５日 ①

ＣＳ（７：００）－三ノ窓（１０：５０）－池ノ谷乗越（１１：５０） 剣尾根頭（１４：５０）－長次郎のコルＣＳ（１５：４０）

左へ回り込んで氷っぽい急斜面を登る。トラバース点まで５Ｐのばすが、最初の２Ｐが不安定であった。

（雪が安定していれば、大きく回り込んでルンゼを横断して斜上して巻けば、早いかもしれない。）

トラバースは、全４Ｐで３Ｐ目が核心であった。

池ノ谷ガリーは急登一気で上がる。乗越から先の稜線では、池ノ谷側を２Ｐトラバースして剣尾根頭手前の岩峰を長次郎側を２Ｐラッセルしながらトラバースした。長次郎のコルへの下りは、右の岩のガリーを１Ｐ、最後は、垂直となる。

苦戦してあまり進まず呆然とする。

１１月６日 ①

ＣＳ（６：２０）－剣ピーク（７：２０）－２６００ｍ手前コル（１１：２０）－伝蔵小屋（１２：２０）－馬場島（１７：２０）

あっけなくピークに着く、快晴のよい天気であった。分枝には道標があって助かる。ルンゼ下降に２Ｐ、カニのはさみの池ノ谷側トラバース１Ｐ、シシ頭は、夏道（くさりあり）を２Ｐトラバースした。

（シシ頭は直登してしばらく進み、右へ急角度に曲がり（ｆｉｘより先）、なだらかな斜面を降りた方がよい。ただしまっすぐ行き過ぎると中尾根に入ってしまう。）

５０ｍ程下ると、エボシ岩に出る。

左に岩混じりの斜面を１Ｐ巻き込んで降りる。雪が安定していれば、右へルンゼを下って巻いてもよさそうだ。

２６００ｍ手前コルまで気は抜けずダブルアックスで下るのが、２回にわたってあり、２回目はかなり長かった（６０ｍ）、１６００ｍの手前のポコ及び、その手前のポコは、巻けるかもしれない。

雪の状態次第でできるだけ巻いた方がスピードアップできる。

その下もブシュが出てくるものの、緊張感のある下りが続き、本当に安心できるのは、2450ｍから下である。

伝蔵小屋より下では、１９００ｍ付近で右へ大きな支尾根が出ていて迷いやすいと思われる。

松尾平への急降下中に紫藤の足が調子が悪くなってペースが落ち、まっ暗の中を下山した。

積雪の関係で、ピーク周辺で意外な苦戦をした。初のリーダーとしての山行でもあり、ミックスに対する準備・心構えが十分でなかったせいもあった。

ルート自体は素晴しく、偵察でも十分満足したよい山行であった。 （記 来村）

注）概念図次ページ

白馬～八方尾根

期 間 １１月１日～１１月３日
参加者 奥山（Ｌ）、鈴木

１１月１日 ①

栂池（７：００）－三国境（１５：００）

大池からだらだらしてなかなかしんどい。

１１月２日 ○

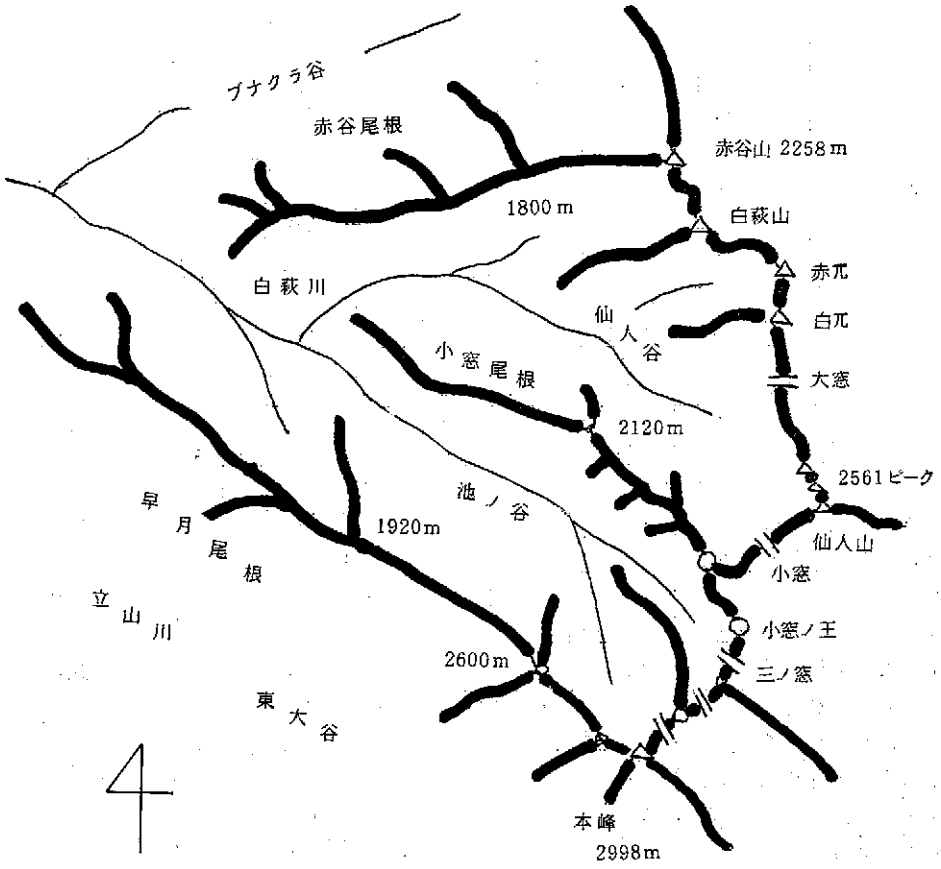
ＴＣ（６：３０）－白馬（７：３０）－キレット（１３：２０）

白馬山荘にデポ（冬山）をする。

天狗の大下りは楽に通過できた。

１１月３日 ○

ＴＣ（６：３０）－唐松（１０：００）－八方第１リフト（１２：３０）



☆剣岳西面概念図

鈴木の腰が悪いので八方尾根から下山することにする。二峰の登りでザイル３Ｐ使用。

春山予定の遠見まで偵察できず申し訳ない。
（記　奥山）

アイゼン合宿

木曽・御岳

期　間　　１１月２２～２６日
参加者　戸叶（L）、奥山、来村、紫藤、大倉

１１月２２日　①
田の原（８：１５）――の池ＢＣ（１２：２０）－雪訓（１３：４０～１５：３０）
入山は戸叶、紫藤、大倉の３名。雪は少なく田の原付近でもほとんどなし。露出している夏

道を上り、９合目付近でアイゼンをつけ、順調にＢＣに入る。雪訓はツボ足歩行・キックステップ、アイゼン歩行を行う。全員でビバーク。

１１月２３日　①

ＢＣ（６：１５）－お鉢めぐりＢＣ（７：１５）－雪訓（８：２５～１５：２０）

雪が少ないうえに人が多く、雪訓場所を見つけるのに苦労する。アイゼン歩行、滑落停止、確保（スタンディングアックスビレイと府岳連方式）ｆｉｘ工作（１Ｐ）を行う。後発の奥山、来村入山。二人でビバーク。

１１月２４日　⊛

２パーティーに分れて雪訓する。

（戸叶、来村、大倉）

ＢＣ（６：０５）－摩利支天（７：４５）－ＢＣ（９：０５）－雪訓（９：１５～１２：４５）－徹収後三角ゲーム－ＢＣ（１４：１５）

アイゼン歩行をしながら摩利支天へ。帰りはコンパスワークを行う。雪訓はｆｉｘ工作（２Ｐ）を行う。徹収後三角ゲームをする。（歩きながら正三角形を描き出発点に戻る正確さを競うゲーム。）

（奥山、紫藤）

ＢＣ（６：０５）－雪訓（９：００）－ＢＣ発（１０：２０）－田の原（１１：５０）－車に拾われる（１２：１０）

ｆｉｘ工作２Ｐ行った後、下山。

１１月２５日　⊛

ＢＣ（６：３５）－お鉢めぐりＢＣ（７：４５）－雪訓（９：００～１４：１０）

ｆｉｘ工作（２Ｐ）、確保を行う。

１１月２６日　⊛

ＢＣ（９：００）－田の原（１１：０５）－八海山荘（１２：４０）

真直ぐに下山。徹収に４時間かかってしまった。

（記　紫藤）

冬　山　合　宿

白馬・突坂尾根

期　間　　１２月２５日～１月３日
参加者　　戸叶（Ｌ）、来村、藤田、柴田、紫藤、大倉

１２月２５日　◎→●

宇奈月（８：２０）－笹平（１１：０５）

デポ（１１：５０）－（１５：００）　来村・藤田（１３：２０）－笹平（１５：２０）

急行「北国」の中に、藤田が目出帽を、来村がｆｉｘを忘れる。富山で購入後合流することにして残り４名で先発するが、柴田が魚津駅に赤旗を忘れる。幸いこれは桜井で気が付き、30分程のロスで済む。宇奈月から笹平までのトンネル歩きで紫藤の足が痛み（靴ずれのようなもの）、紫藤を除く３名で６２０ｍ付近まで８日分の食糧・燃料その他を荷上げする。晩はトンネルの中に各自適当にエアマットを敷いて寝る。トンネル内は暖い。

１２月２６日　⊛

出発（６：２５）－１２４２（１１：３０）－突坂山・１４８０のコル（１４：４０）

天候はあまりよくないが、それでも黒部は大きな谷なので、尾根下部の今日はほとんど風がなく過ごし易かった。デポ地までは雪が少なくかえって滑りやすい状態なのでアイゼンを着けて行く。４Ｐ目からワカンを着け、１２４２までシングルで行く。積雪は１２４２で50～60㎝、突坂頂上で１ｍ強。雪質は重く苦しいラッセルだ。１２４２からは大倉を除く５人で、トップ１名の変形ダブルを行った。

１２月２７日　◎

出発（６：２０）－ｆｉｘ工作開始（８：００）－終了（１０：３０）－１４８２（１２：２５）－１５１０ｍ（１４：３０）

デポ回収（７：００～８：２０）

来村、紫藤、柴田のｆｉｘ隊と、戸叶、藤田、大倉のデポ回収隊とに分れて行動する。ｆｉｘはコルへの下りに５０ｍ、コルからの上りに１００ｍで１４８２直下へ。偵察時の１Ｐ目とコルの底１５ｍは、うまく雪が付いていたのでザイルは出さなかった。デポ回収の方は目印もはっきりしており楽勝だった。１４８２から１５００ｍまでも気の抜けない稜線で、1482の次のポコの下りでシュリンゲを使用する。

１２月２８日　⊛

出発（６：２０）－ＪＰ（９：００）－１９６６（１２：４０）－コル手前（１３：４０）

終日ダブルで進む。天場からＪＰまでは急登で、やせている所や大木を巻く所などがあり、少々いやらしい。１８２１から次のポコを越すまでも左側が切れたやせ尾根で気を使う。皆疲れ気味で、コルの手前の１８５０ｍ付近に早目にドンする。夕方から夜半にかけて１ｍ近い降雪があり、テントラッセルを１回行う。

１２月２９日　⊛→◎

出発（６：４０）－２１９７（１４：３０）－２２００ｍ（１５：１５）

多量の新雪が積もり判断に迷うが、他の条件は悪くなかったので出発する。昼前から天候が回復し気温も上昇するが、結局この日我々の見聞できる範囲内では雪崩は起らなかったようだ。ラッセルは腿から腰位まであり、遅々として進まない。２１９７の次のポコにテントを張る。

１２月３０日　⊛

出発（６：１５）－猫又山（７：４０）－清水岳（１３：０５）－２６３６手前（１４：１５）

風の影響か上るに従って潜らない所が増えラッセルは前日より大分ましである。猫又からの下りは少々わかりにくく、また次のポコはややせているので注意が必要。雪庇はあまり発達していない。２５１３～清水間はかなりクラストしておりワカンでは少々危いので慎重に行く。清水からはコンパスワークで天場へ。

１２月３１日　⊛

出発（６：５５）－敗退開始（８：１０）－前日の天場（９：３０）

徹収時にはもうかなり天気は悪化していたが、１Ｐでも進んでおこうと出発する。風が強いので、２６３６の細い稜線を避け巻いていくが、途中で雪崩の危険を感じて敗退を決め、朝の天場まで戻る。

１月１日　⊛

沈澱。テント移動（１３：１０～１５：２０）

１月２日　◎→⊛

出発（６：４０）－旭岳（９：１５）－白馬岳（１１：００）－白馬大池（１４：４０）

２６３６は稜線伝いに越す。旭岳付近で視界がなくなり、コンパスワークで白馬へ向う。山荘の保険デポを回収し、風雪の山頂に立つ。アイゼン着用のため、紫藤の足の痛みが再びぶり返し、三国境で荷分けをする。

１月３日　◎

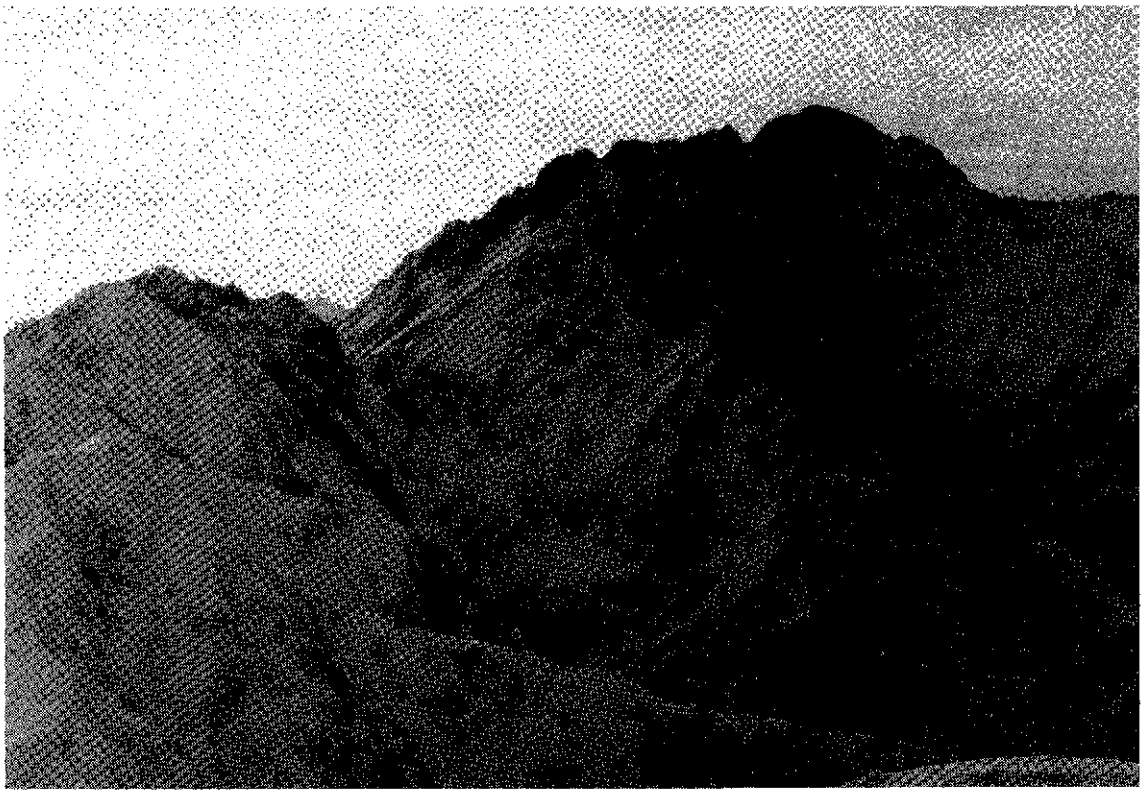
出発（８：１０）－栂の森（１１：５５）

大池から３ピッチで栂の森へ。もちろん歩いて下る気力はなく、無事下山を喜びながらゴンドラリフトに乗る。

（記　戸叶）

注）概念図は、偵察の項を参照

１９８７年度（昭和６２年度）活動記録



〝猫又より望む北方稜線（赤谷以北）〟

1987年度 現 役 部 員

C・L	来村宗紀	工物	3	(4)
	鈴木寛道	工精	4	(4)
	藤田繁雄	医	3	(4)
S・L	紫藤圭介	理物	2	(3)
主務	東條公資	基機	3	(3)
	大倉徹雄	工化	2	(2)
	蔭山　健	経	1	(1)
	西原幸宏	理数	1	(1)(退部)
	安井信之	工建	1	(1)(〃)
	鷲尾荘一	基機	1	(1)(〃)

注）左から
役職・氏名・学部・学科・学年・学年（山岳部）を示す。

プ　レ　春　山

八ケ岳定着

期　間　　2月16日～2月21日
参加者　　戸叶（L）、藤田

2月16日　①
美濃戸口（10：50）－赤岳鉱泉（14：40）
気温3℃、この尖った冷気が心地よい。美濃戸口小屋で野沢菜とお茶をご馳走になる。
2月17日　◎→⊛
〈石尊稜〉
BC（6：20）－取付（8：05）－登はん開始（8：25）－終了（12：15）－BC（14：05）
取付を間違え1Pのロス。三叉峰ルンゼをつめてから稜に出て、しばらく登ると下部岩壁のフェースで、途中のワンムーヴが難しい。そこからの雪稜は所々急で、やせ尾根をこえると上部岩壁に達する。リッヂ上にルートを取るが、ピンも多く楽しい。計8P。
2月18日　⊛　沈澱
2月19日　⊛→◎
〈赤岳主稜〉
BC（5：45）－登はん開始（7：50）－終了（10：50）－BC（12：40）
文三郎尾根をつめた後、ルンゼをトラバースして取付く。10m位のフェースを登って稜に出て、ここから雪稜をたどると、やがて岩壁が行くてをはばむ。途中の凹角は悪い。この岩壁から右へ伸びるリッヂを目指して、大きく右へよけて取付く。ルートはそのリッヂだが、我々はその右のルンゼを行く。このやらしいルンゼから凹角をこえて雪稜に出、さらに凹角を抜けて岩稜をたどると赤岳小屋に出る。南峰からの眺めは素晴しかった。

2月20日　◎
〈小同心クラック〉
BC（6：05）－取付（8：20）－登はん開始（8：55）－終了（10：55）－硫黄岳（12：45）－BC（13：45）
大同心稜をつめた後、大同心ルンゼをトラバースし、ルンゼをつめて取付へ。
1P：フェースを左上し、チムニーの中に入る。ホールドは大きく多い。
2P：確保点のレッヂから、再び浅いチムニーへ。狭いのでザックがひっかかり、身体を外に出して登る。1P目に比べ日が当たって明るく、楽しいピッチ。
岩稜をあと1Pたどると終了点。ただ、横岳直下の岩壁が、ピンなく、不安定な氷がついて不快（seil　25m）。気分をかえて下降は硫黄岳経由で。このルートはⅣ－だが、易しく楽勝。
2月21日　①
〈ジョウゴ沢〉
BC（6：40）－稜線（11：10）－BC（12：10）
楽しく氷とたわむれる。天気よく、快適。
赤岳鉱泉（13：45）－美濃戸口（15：50）
帰りに立寄った際、またも野沢菜をご馳走になる。

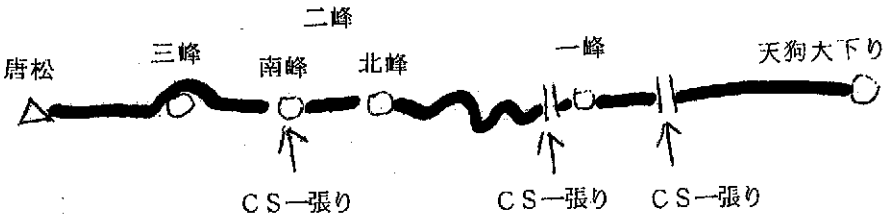
（記　藤田）

春　山　合　宿

遠見尾根～白馬岳

期　間　　3月12日～3月17日
参加者　　来村（L）、藤田、紫藤、大倉、

3月12日　◎→①
地蔵1頭直下発（9：15）－小遠見山下（12：10）－中遠見山（13：00）－



☆ 不帰キレット概念図

大遠見山（１４：３０）－西遠見山手前のポコ（１５：００）

テレキャビン（¥７００）、リフト（¥２２０）を乗り継いであっという間に地蔵ノ頭下まで行ってしまう、黒部ではこのようには行かない……。

トレースがないので、地蔵のコルからの急登は苦しい。尾根にあがるとラッセルもましになり、天気もよくなってきた。

小遠見は、トラバースした。大遠見から尾根は、とてつもなく（大げさ）広くなる。鹿島北壁がまぶしく圧倒的である。

３月１３日　◎→⊛　地ふぶき

ＴＣ（６：００）－白岳（８：００）－５龍（１０：００）－白岳（１１：２０）－大黒岳を下ったコル（１１：３０）－唐松山荘手前２５１１ｍピークを越えたコル（１５：３０）

１人先行者がいて、白岳までのラッセルが助かった。白岳からアタックする。

Ａ沢のコルまでは夏道どおしで、以下稜通しＧⅡの頭から下って最後の雪壁及びその上の岩峰を岩沿いに巻くところがいやらしい。ピークを出発するころには、剣がガスって来て天気は完全に下り坂である。雪壁に１Ｐ ｆｉｘ するが必要はなかった。

大黒岳のコルから風雪となり、２５１１をトラバースして以後岩稜通しに行くがかなり悪く途中１５ｍ程ザイルを出す。

富山側を巻きぎみに行くのだが、夏道からはずれて行き詰ってしまい悪くない天場なので泊とする。

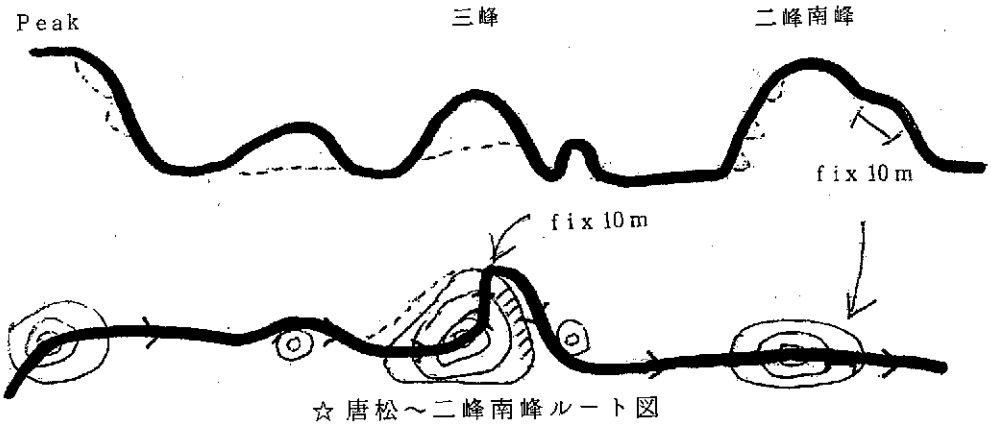
３月１４日　◎→⊛

ＴＣ（６：２５）－唐松山荘（７：２０）－二つ玉ぽいが、朝は穏やかだったので唐松山荘まで行くこととする。

鎖があったりしてあいかわらず悪い。

３月１５日　①

ＴＣ（７：２５）－三峰（８：１５）－二峰北峰（１０：２０）－Ⅰ・Ⅱのコル（１４：５０）－天狗のコル手前のコル（１５：３０）



☆ 唐松～二峰南峰ルート図

3月16日 ⊛

TC（7：00）－天狗の大登り終了（8：05）－天狗小屋（9：30）

天気悪いが強引に行く、登りきったあたりで風雪ますます強くなり、天狗小屋手前でホワイト・アウトぎみになってルート間違える。天狗小屋であえなく泊。

3月17日 ◎

TC（5：55）－鑓ケ岳（6：45）－白馬（9：20）－小蓮華岳（10：45）－天狗原（12：45）－栂ノ森（14：00）

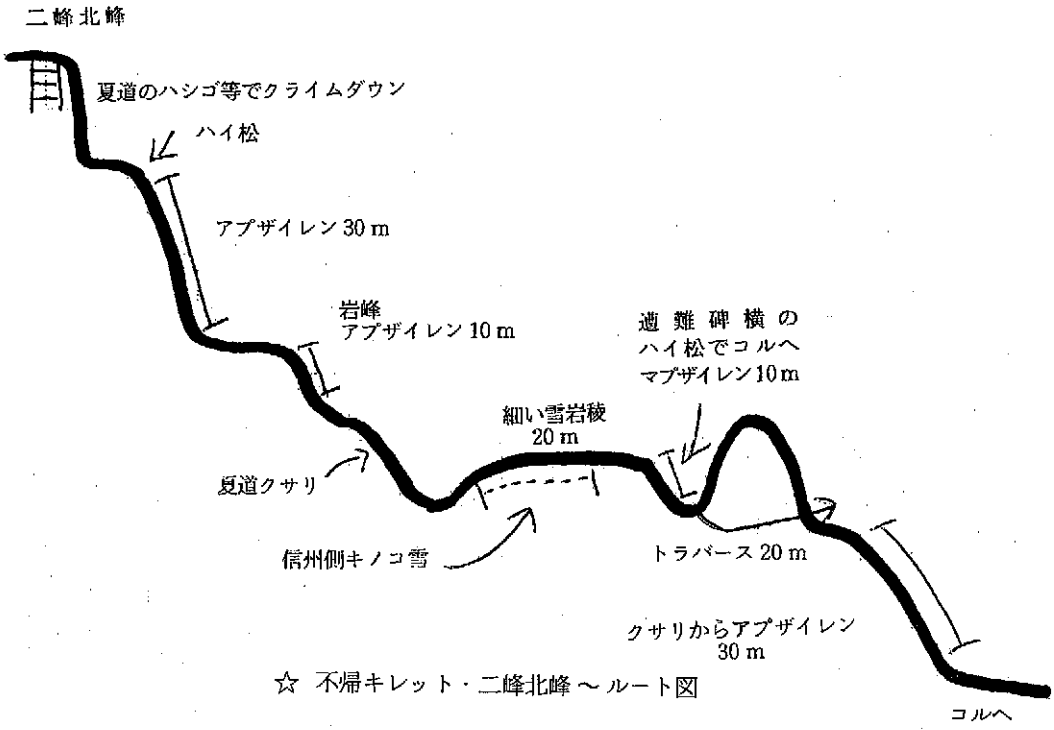
本日中に下山できるか微妙であったがペースよく下山できた。

白馬まで少々いやらしい所もあるが、天気もまずまずで問題はなかった。

天狗原からも冬よりはるかに降りやすく、早い。

この計画を押していた1人を含む、偵察に行った2人が共に行かないという変なことになったが、主稜線上の行動の訓練には十分であったと思う。

（記　来村）



☆ 不帰キレット・二峰北峰～ルート図

赤谷尾根～剣岳

期　間　　3月28日～4月3日
参加者　　来村（L）、藤田、戸叶

3月28日 ①→◎

馬場島（8：05）－取付（9：00）－1,563m（13：45）

白萩川側976m付近より取付く。馬場島の人の話によると、ブナクラ側から取付いた方が楽らしい。雪は少なく、まるで11月の偵察にいるようだ。雪質悪いが、順調に高度をかせぐ。1400mをすぎるとやせて来て、1563m手前は白萩川に小さな雪庇をもつヤセ尾根。この日ブスの足が一本もないことに気づく。

3月29日 ◎時々①

出発（5：45）－赤谷山（11：20）－赤　（14：05）

5月を思わせる陽気に誘われたのか、熊を見かけた。1700m付近に雪庇が出ており雪は

硬く、わかんでは苦しい。１８６３m迄は傾斜がややきつく、そこからブナクラ側に雪庇。赤谷山への登りは頼る急で、アイゼンにはきかえ、一気に登る。デポの位置は確認したが、予定より２日短縮しているので回収せずに通過する。赤谷山をこえたコルから白萩山を小黒部谷側から巻こうとしたが、巻けずに結局直上する。

３月３０日　◎時々①

出発（６：００）ー白兀（８：１０）ー大窓（１１：３０）ー大窓ノ頭（１３：４５）

白兀迄、赤兀のコルからの登りと白兀までの２ケ所の岩峰（右から巻く）で計３Ｐだし、白兀のピークから大窓まで計４Ｐ出す。白兀からの下りは、左斜め方向にトラバース気味に下るが、傾斜はきびしく緊張する。大窓への下りは、まず左手の岩稜を目指して１Ｐ下降した後、ルンゼ右のリッヂ状を２Ｐ下ってルンゼに出る。さらにやらしい斜面を辿って大窓に至る。ここから最初の岩を右から巻いて、クラストした急斜面をひたすら登って大窓の頭へ。この登りで藤田が右膝を痛める。

３月３１日　⊛

ロウソク岩ｆｉｘ工作（来村、戸叶）

出発（１１：５０）ー帰幕（１２：４５）

４月１日　◎

出発（５：５５）ー池ノ平山（８：４５）ー小窓（１１：３５）ー三ノ窓（１５：２０）

ロウソク岩は、小黒部側から４０ｍトラバース。ここから雪壁を５０ｍ登ると、間もなく２５６１ｍで、これを３０ｍのクライムダウンで下る。池ノ平山直下では、偵察したルンゼが雪崩そうだったため、右のリッヂ状を登る。氷化してやらしかった。（ｆｉｘ５０ｍ）尾根とのジャンクションに出ると、急に剣が視界一杯に広がる。ド迫力。ここから小窓へは、まず小窓手前のコルへの下りは傾斜強くｓｅｉｌ５０ｍ。小窓へは左へｆｉｘ２０ｍでトラバースしてから５０ｍの懸垂下降。この終了点から小窓までは雪質悪く雪崩そうだった。急斜面を登って小窓ノ頭に出ると、稜通しで小窓ノ王にぶつかる。５０ｍの懸垂の後４０ｍのトラバースをすれば三ノ窓は目前。チンネだけが黒いのは印象的であった。

４月２日　⊛

出発（５：４５）ー本峰（９：１５）

池ノ谷ガリーは一気に１Ｐで登る。剣尾根の頭からの下りは、右から巻き気味にｓｅｉｌ３０ｍ下った後、懸垂４０ｍ。長次郎のコル付近でガスリ始めるが、稜を辿って問題なく本峰へ。視界が悪いため、来村が早月の降り口を確認しに行ってからドン。３時間半もかけて大きな雪洞を掘るが、あまりよい出来ではない。主稜線は偵察時の方が数段難しかったらしい。

４月３日　◎→①

出発（６：１５）ー伝蔵小屋（１０：５５）ー馬場島（１４：２０）

早月への降り口は標識があった。カニのハサミは硬くしまったルンゼを下る（ｓｅｉｌ　30ｍ）。シシ頭では岩稜を右から巻き気味に稜上へ向かう（ｓｅｉｌ４０ｍ）。ここから残置ｆｉｘのある急なルンゼの右を下る。あとはノーザイルだったが、２６００ｍ迄急な下りが多くザイルは必要であった。やはり伝蔵迄は息が抜けない。あとはガチガチのトレースをたどって、ひたすら馬場島へと急ぐ。天候に申し分ない程恵まれてスムースに終わったが、特に赤兀からは難所が相次ぎ、気が抜けない。下山後は皆、たまった緊張のためクタクタだった。

（記　藤田）

注）概念図は偵察の項参照

新　歓　合　宿

涸　沢

期　間　　４月２９日～５月３日

参加者　　来村（Ｌ）、藤田、鈴木、紫藤、東條、大倉、蔭山、鷲尾

４月２９日　①→◎

上高地（７：０５）ー横尾（９：５５）ー涸

沢（14：15）

来村、藤田、紫藤、東條、大倉、蔭山の5名入山。荷物の軽い蔭山が最初に元気なピッチでとばす。全体的に早すぎるペース。のち蔭山はバテ気味。

4月30日 ○

〈雪　訓〉

BC発（7：15）－BC（13：00）

雪訓にはもったいないほどの快晴。キックステップ－アイゼン歩行－滑落停止－スタカットの順に行う。

5月1日 ◎→⊛

〈屏風頭遠足〉（藤田、大倉、蔭山）

BC発（6：25）－BC着（11：00）

トラバースで頭を目指すが、リッヂに出た所で、トラバースは難しいと判断し、リッヂ沿いに登る。しかし、これも傾斜がきつくて1年には難しく、悪天になってきたため敗退する。1年の遠足にしてはやりすぎか。

〈クラック尾根上半〉（来村、紫藤）

BC（5：00）－北穂山頂（7：00）－B沢降り口（9：00）－メガネのコル（10：30）－登攀開始（11：00）－北穂山頂（14：00）－BC（16：00）

曇り空の下ベースを出る。北穂山頂では雪が降り始め、あたりはホワイトアウトする。相談の末、B沢降り口まで行くことにする。降り始めて実は恐かったのがキレット側への100m程のダブルアックスでのクライムダウン。雪面は氷のようだった。降り口に着いた時は寒気もなく、B沢の状態もよいので降りることにする。二人共、ひき返してあの斜面を登るのは嫌であった。B沢下部は、水瀑化しており、クラック尾根の取り付きは判然としない。ザイル2P出すが、弱気になって懸垂でB沢へ降り、メガネのコル直下まで登りかえす。メガネのコルへ上がり、上半を登攀することにする。

1PⅢ　ホールドスタンスは大きい。バイルで堀り出せば容易

2PⅣ　ジャンケンクラックをさけ、左をA0で登る。トラバースにはかなりバランスが必要。

3PⅢ　容易

4PⅡ～Ⅲ　氷の発達した壁をアイスバイルで。夏は大ガレ場。

5PⅡ～Ⅲ　ルート図では容易なルンゼ状だが、氷がつくと、極度に不安定。

6PⅡ　左へのトラバースで北穂小屋直下。

5月2日 ○

〈遠足〉（紫藤、蔭山）

BC発（7：10）～BC着（10：20）

北穂下部のインゼル付近まで登る。

〈北穂東稜〉（藤田、大倉）

BC（5：15）－稜上（7：05）－北穂（9：55）－白出のコル（15：20）－BC（16：10）

東稜は7Pも出したが、必要なのはゴジラの背のみ。（2P）。

冬山の偵察をかねて北穂涸沢間を通る。五月は雪が少なく、岩が露出していやらしい。慎重に行った。問題ナシ。

☆北穂東稜～涸沢岳

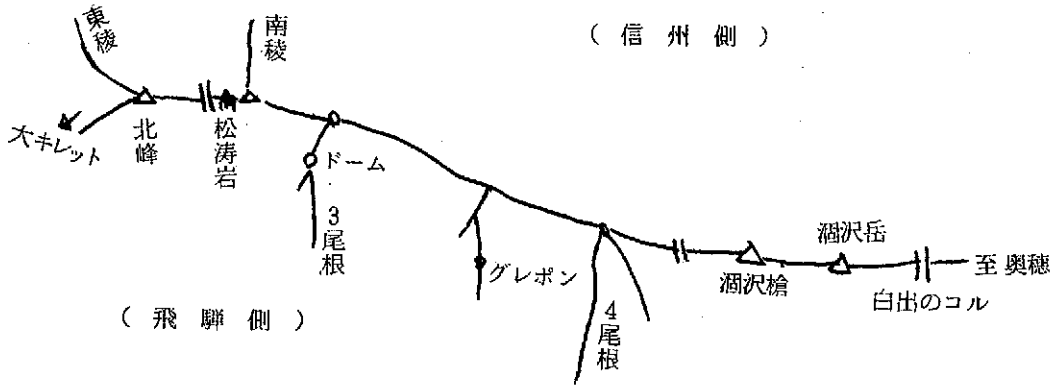
〈東　稜〉

7Pも出したが、必要だったのは、ゴジラの背の2Pだけ。舟橋氏率いるPartyと一緒になる。

〈北穂～涸沢岳・偵察報告〉

全般的に、飛騨側から風が吹くので、飛騨側はクラスト、或いは氷化している。冬は、信州側に雪庇が出るだろう。5月は雪少なく、岩が露出してやらしかった。従って、12月は、雪がどの程度つくかで難易は大きく変わると予想される。

- 松涛岩……信州側からまいて、fix 20m
- 南峰手前の岩峰……fix 30m
- 3.尾根JP手前のコルへの下り……fix 120～130m
  ルートは、リッヂ上にとるか、飛騨側のルンゼを降りて、トラバース
- ドームからの下り……fix 80m（雪のつき方次第）。



☆ 北穂～涸沢岳概念図

○グレポン尾根ＪＰ付近

４尾根の頭は、信州側の雪壁をトラバース。ｆｉｘ６０ｍ

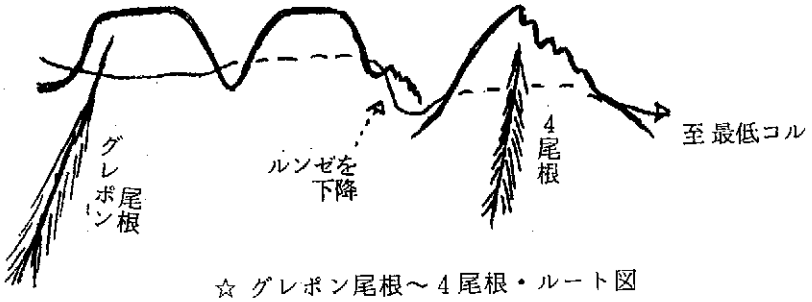
○涸沢槍への登り

まず、肩までｆｉｘ３５ｍで、ここから鎖場の左のルンゼを上る。

○涸沢岳手前の登り

鎖に沿って、ｆｉｘ ３０ｍ。

※ なおこの日、前日入山予定の鈴木、鷲尾が入山しなかったため、来村が横尾まで下りる。途中、離阪の遅れた二人に出会い一緒に無事ＢＣ着。



☆ グレポン尾根～４尾根・ルート図

５月３日 ●

沈澱

５月４日 ○

〈北穂遠足〉（藤田、鈴木、大倉、鷲尾、蔭山）

ＢＣ発（６：０５）－雪訓終了（９：３０）－北穂山頂（１２：２０）－ＢＣ着（１５：４０）

幸いの快晴となる。後着した２人のこともあり、雪訓ののち北穂へ。３Ｐ弱で北穂山頂。天気がよく見はらしは良好である。１年生は初の山頂に感動する。北穂沢の下りはｆｉｘ１Ｐ、ザイル７Ｐを出して安全を期した。

〈前穂北壁－Ａフェース〉（来村、紫藤）

涸沢ベース（５：００）－Ⅲ・Ⅳのコル（７：００）－取り付き（８：００）－開始（８：３０）－大テラス（１１：３０）－終了（１３：３０）－前穂（１４：００）－奥穂（１６：００）－ベース（１７：３０）

晴天で状態はよかった。北壁は松高カミンのＡ１で来村が１ｍ墜落。怪我はなし。Ａフェースは乾ききって夏のようだった。

北壁

１Ｐ（Ⅱ） 雪のためかなり上部から開始。草付に雪の付着した不快なピッチ。松高カミン直下でビレイ。

２Ｐ（ⅢＡ０） 松高カミンをワンポイ

ントA1。ハングの出口が、いやらしいダブルアックス。

3P（Ⅲ）　ガバをつかんで容易。

Aフェース

4P（Ⅲ+）　ピンは数多い。楽しいルート。

5P（Ⅲ）　雪壁へもどり、上部のルンゼ状の大きなチョックストーンを抜ければ終了。

5月5日　◎

〈下山〉出発（10：00）－横尾（11：30）

横尾まで問題なし。競争をする。TOP紫藤。

（記　紫藤）

S字峡横断・ガンドウ尾根偵察と八ツ峰敗退

期　間　　4月29日～5月4日

参加者　　宮田（L）、戸叶

4月29日　①

大谷原（7：45）－中岩沢出合（9：50）－国境稜線（14：40）－鹿島槍南峰（15：15）

鎌尾根は技術的に容易で、国境稜線の雪庇の張り出しも1m位と小さく、seil 30mで抜けるが楽勝だった。しかし大谷原から南峰までの標高差約1800mはさすがにしんどく、先行の社会人パーティーと交互にラッセルしたが、南峰に着いた時はへとへとであった。

4月30日　①

出発（5：05）－1460m（8：50）－1250m（12：20）－河原（16：20）

1600m位までは快調に行くが、そこからは雪も次第になくなり、ブッシュや小さな岩場なども現れ、下る程にややこしくなっていく。1300m付近の断壁帯で25m×2、最後の河原への下りで25＋15＋25mのアプサイレンを各々する。

5月1日　◎→●

出発（6：15）－吊橋（8：40）－13 49（11：30）－1700m（15:20）

東谷は沢の中程まで突き出ている倒木を利用し、宮田が対岸へジャンプ／架橋後ザックを背負って渡る。fix 10m。そこより急斜面を左上していくと、吊橋からの踏跡に出る。橋を渡り水平道と送電線巡視道を利用して1000m位まで上り、そこからガンドウ尾根に取付く。尾根は登るに従ってブッシュは深くまた痩せてくる。特に1500m前後は小岩峰が現れ、また木登りも強いられいやらしい。春にはキノコ雪が発達するかもしれない。1650mからは不完全ながらもようやく雪稜となる。雪切谷側の小尾根とのジャンクション付近に泊る。

5月2日　○→◎

出発（5：25）－大滝尾根の頭（6：40）－仙人池（8：50）－二股（10：35）－2217（16：15）－CS（17：10）

1833まで登ると尾根は今までと様相を一変し、急にのびやかになる。左手の黒部別山方面の展望が素晴らしい。大滝尾根の頭の先の小ギャップでザイルを20m使用しに他は問題なく仙人池へ着く。仙人池付近からみる八ツ峰I峰は圧倒的だ。不安定な雪稜を下り、二股で水を汲んでから4稜に取り付く。2217はブッシュで覆われた岩峰となっており、直登は無理なので、左のルンゼから支稜へ上り、ザイルを4回出して、ブッシュ・岩・雪稜のmix を抜け、頂上に立つ。2217の先は小さなコルを隔てて、所々が切れた急雪壁となっており、ここで弱気な我々は敗退を決定し、懸垂25+20mで雪稜へ戻り、雪面を大きく削ってツェルトを張る。

5月3日　●

出発（7：30）－3稜末端CS（10:00）

風が強くツェルトの端が煽られるので、剣沢まで下ることにする。懸垂25＋50mでルンゼへ下り、更に4の沢の支流を下るが、剣沢の手前で水流が現れ、2ケ所目は滝となっており懸垂を強いられた。末端まで確認できない未知の沢の下降は避けるべきであろう。

5月4日　①

出発（６：４５）ーダム（１２：４０）
内蔵之助経由でのんびりとダムへ下る。夏よりはるかに歩き易い。

（偵察報告）

①南峰～１６３９　２３０2.5付近は広くわかりにくい。全体に尾根は広く天場は豊富。

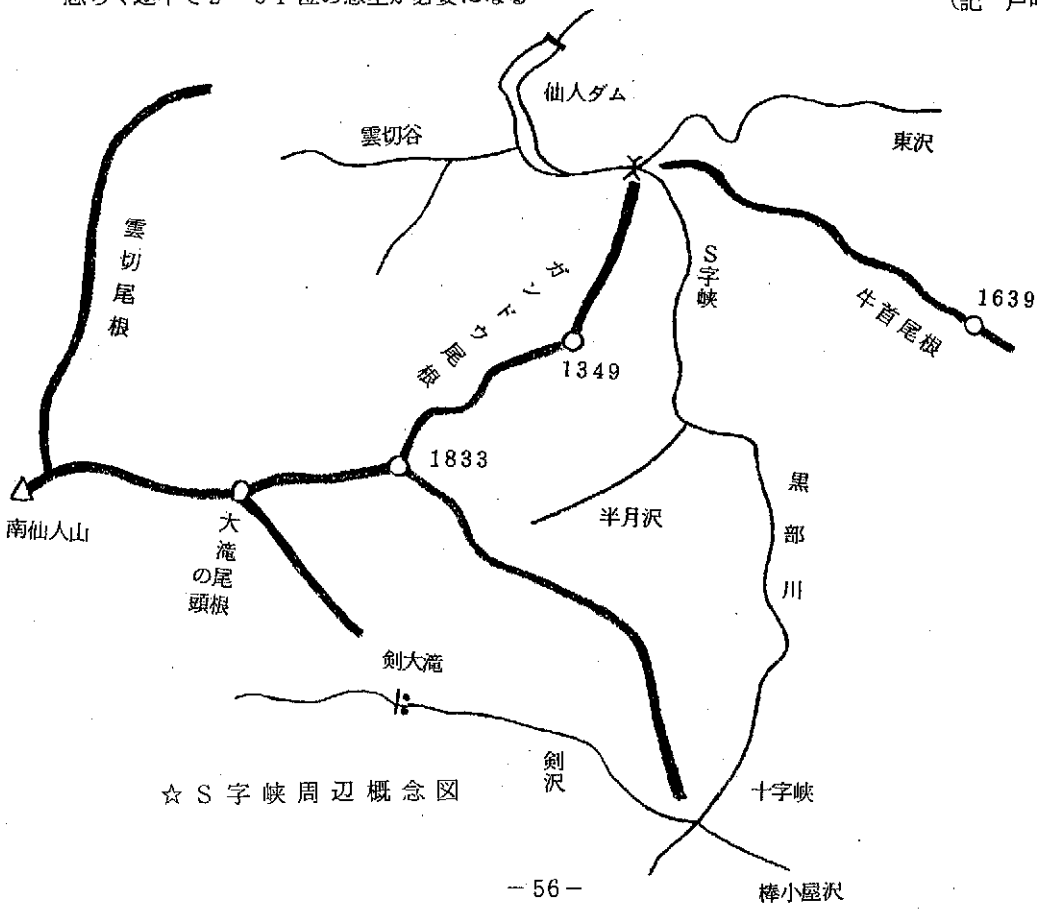
②～１３５０　１４６０手前に２本東谷側に落ちている尾根があり、部分的に二重山稜気味になる所もあり、比較的地形が複雑で注意が必要。また所々細い。１４６０からの下りはじめは急で尾根も細い。キノコ雪ができるかもしれない。１３５０にはコンクリート製の建物があり広い。

③～吊橋　１３００m付近は断壁帯となっており懸垂１～２Ｐで下る。１０８０m付近に小岩峰があり、そこより尾根は細くなる。対面の鉄塔と同じ位の高さ（１０３０m）になったあたりから、急斜面を適当に下ると黒部川。恐らく途中で２～６Ｐ位の懸垂が必要になるだろう。渡渉は黒部川本流よりも東沢の方が無難。渡渉後は急斜面を左上後トラバースしていくと吊橋に出るが、雪の着き方次第ではいやらしくなるだろう。なお天場適地はない。

④～１８３３　ガンドウ尾根の取付は特に急で重荷では苦しいだろう。１３４９から尾根は痩せ始め、所々出現する大木や小岩峰を越す部分が悪い。キノコ雪の発達具合や雪の状態によってはザイルが必要になる。全体に雲切谷側はすっぱり切れている。ガンドウ尾根の核心は、取付の２００m程と１４００m～１６００mにかけてで、その上は普通の雪稜と雪壁を登っていくとＪＰに着く。また天場は意外と多い。

⑤～仙人池　仙人池までは広く緩い雪稜で、大滝尾根の頭の先の小ギャップも大して難しくなく、雪庇にさえ注意して進めば問題はない。なおデポを置くとしたら、Ｓ字峡の吊橋か、仙人池東側のカンバの大木が最適である。

（記　戸叶）



☆Ｓ字峡周辺概念図

夏　山　定　着

参加者　来村（L）、鈴木、藤田、紫藤、東條、大倉、蔭山、西原、安井、鷲尾、戸叶（OB）、大西（OB）、森藤（OB）

7月17日　◎→●

室堂（9：35）ー別山乗越（14：30）ー剣沢（15：30）

剣岳・真砂

期　間　7月17日～7月31日

夏山定着行動表

	来村	鈴木	藤田	紫藤	東條	大倉	蔭山	西原	安井	鷲尾	戸叶	大西	森藤
17/18	入山		入山										
19	雪訓	入山	雪訓										
20	沈殿												
21	南壁	マイナーピーク	ビバーク	マイナーピーク	南壁	雄山谷		南壁		雄山谷			
22	別山沢	下山		別山沢		ビバーク		別山沢		ビバーク			
23	小窓主		八ツ峰上半		Cフェース	小窓主	Cフェース	八ツ峰上半		Ⅳ峰Cフェース		入山	
24	雪訓		雪訓										
25	搬出		ビバーク	搬出	ビバーク	京都府大搬出		三ノ窓雪渓ビバーク		京都府大搬出		下山	
26	源治郎			D敗退		D敗退	源治郎			源治郎敗退			
27	敗退		敗退（半沈）										
28	沈		沈殿										入山
29	源Ⅱ AB		Ⅵ峰Aフェース	Dフェース富大		チンネ左稜線	源Ⅱ AB	Ⅵ峰Aフェース	Ⅵ峰Cフェース	源Ⅱ AB	チンネ左稜線		Ⅲ峰Cフェース
30	中谷成城		チンネ左下	中谷成城	チンネ左下	八ツ峰下半							下山
31	下山		下山										

やはり５０Kgオーバーとなっているようである。

雷鳥沢の登りで西原がバテ、荷分けするが残念ながら剣沢で泊。

7月18日　◎

剣沢（7：30）ー真砂沢（9：30）

無事ＢＣに入る。

ところがなんとレーション用のビニール袋を忘れたことに気付き、来村が剣沢まで行って鈴木に連絡を取った。

ついでに源Ⅰの取り付きの偵察をした。中谷ルートの取付きは、少々わかりにくい。

7月19日　●

ＢＣ（7：20）ー長次郎谷雪訓場所（9：05）ーＢＣ（14：20）

天気が悪いが雪訓する。

7月20日　●

沈殿　梅雨まっただ中である

7月21日　①

雨が続きそうなので、雨でもビバークを出すことにしていたが、なぜか晴れたので喜々として出発する。

〈本峰南壁〉

B.C（5：40）ー取り付き（10：00）ー終了（13：20）ー本峰（13：30）ー長次郎コル（15：00）ーＢＣ（16：15）

晴れて楽しく登ってきた。平蔵谷下部は、例年に増して汚なく、下降した長次郎左俣は、熊ノ岩横のゴルジュが幅が狭く（2m程）、一年生は緊張していた。

☆ＡⅡ稜（来村、西原）

取付きは、末端のＡⅠ稜側である、１Ｐ目雪面にピッケルを指してビレイ、以下Ⅰ～Ⅲ級の楽しい岩登りであったが、少々浮き石が気になる。

５Ｐ＋αで早月尾根分枝の指導標が左手に見えてきた位置で終了。

☆ＡⅠ稜　（東條、安井）

ハーケンに導かれて取り付くと、かなり難しい所に出てしまった。安井はいきなりここでザイルにぶらさがる。それ以降は問題になる所はなかった。我々のとったルートは、いわゆる正規のルートではないかもしれないが、そんなことは気にせず思い思いに登ってもよいと思う。ただ、残置ピンが少ないのと浮石が多いことには注意しなければならない。

〈マイナーピーク東面スラブ〉

（鈴木、紫藤）

ＢＣ（5：10）ー取り付き（7：00）ー終了（13：00）ーⅠ・Ⅱコル（17:00）ーＢＣ（19：20）

このルートは長くて楽しいルートであるが、我々は中間部でルートを誤まり、ピナクル状の左へと入ってしまった。最後の２ピッチをノーマルルートにもどり、やっとのことで終える。二ノ沢の懸垂をきらって八ツ峰下半から下りたが、これは大変長く、楽しみながらもバテてしまった。

〈立山雄山谷ビバーク〉

ＢＣ（5：30）ー大汝（10：00）ーＴＣ（19：20）

大汝まではペースがよかったか、御前谷で苦労して、さらに黒部川付近でひどいブッシュとなり泊が遅くなった。

7月22日　◎→●

〈御前谷ビバーク（続き）〉

ＴＣ（6：00）ーＢＣ（14：10）

内蔵助を回って、ひたすらＢＣをめざした。

〈別山沢遠足〉

ＢＣ（6：30）ー別山（7：00）ーＢＣ（11：50）

曇り空をにらみながら残り全員で出発する。別山手前から雨まじりの強風となり、さっさと剣沢を下った。

7月23日 ◎

朝からガスが熊ノ岩付近まで覆っていて、雨が今にも降りそうな天気であった。

〈Ⅵ峰Cフェース剣稜会ルート〉

（東篠、蔭山、鷲尾、戸叶）

BC（5：50）ー取付き（8：00）ー終了（12：00）ーBC（16：00）

岩が濡れておりいやらしかった。Ⅴ・Ⅵのコル手前で下降路の崩壊があり、懸垂30mをする。

〈八ツ峰上半〉

（藤田、紫藤、西原、安井）

BC（5：55）ーⅤ・Ⅵのコル（8：20）ーⅥ峰（10：50）ー池ノ谷乗越（13：30）ーBC（15：50）

Ⅴ・Ⅵのコルでは悪天の兆しがあったが、上半を縦走する。

Ⅷ峰の懸垂10m、Ⅷ峰の登りに5m、懸垂に15mザイルを出す。

〈小窓ノ王南壁

京都山岳会ルート～ダイレクトルート〉

（来村、大倉）

BC（5：00）ー池ノ谷乗越（7：45）ー取付き（9：05）ー終了（16：25）ーBC（19：00）

ガスが熊の岩付近まで低くたれこめる中を三ノ窓へ急ぐ、池ノ谷ガリーの最上部は雪渓が残っていた。

今にも雨が降りそうで、降って来たらさっさと帰ろうと思っているうちに、人が誰もいない三ノ窓についてしまう。

仕方なく、中央バンドからエスケープ出来ると見て登り出す。

三ノ窓に不必要な物をデポしザックを1つにして登った。

南壁基部の左上バンドのほぼ中央部、fixのたれたハーケンがある凹角状が取り付きである。ダイレクトルートは、これよりさらに左で、ボルトがフェースに1本見えていた。

“山渓”の「剣岳の岩場」では、右の方がダイレクトルートとなっているが、これは、南壁の初登ルートである京都山岳会ルートであると思われる。

しかしこちらがポピュラーのようでもあるし、ラインも自然なので、上部でダイレクトにつなげることにした。

凹角状をフリーで行くが、すぐにアブミが出てしまう。一段あがって狭いチムニーに入る。コケが濡れてつるつるで、ピンを一本打ち直してA1で抜ける。

大きなテラスで切る（40m）

出だしチムニーを登った後、易しいガリーを右上して中央バンドに出る。

少し右に行きすぎていて、正規ルートは途中から直上するようだ。

また中央バンドから容易にエスケープ可能のようであった。

次はダイレクトルートに合流すべく中央バンドを左へトラバースをするが前のピッチの都合で40mぎりぎりいっぱいとなる。

4P目からダイレクトルートに入って核心部へ進む。岩はびしょ濡れで、雨まじりの風が吹く最悪の状態だったが、不思議とエスケープする気にはならなかった。

カンテ横のフェースからカンテを人工で行く、A1ということで甘く見ていたが、ピンがゆるく3本程打ち直した。体勢も苦しい所もあり、意外と苦戦した。

5P目は、わりと広い外傾テラスから大ハングを越えるピッチである。遠くから見ると圧倒的なハングに見えるが、うまく弱点をついた形で大したことはない。

前傾フェースから始まり、右へ足のつかないトラバースをしてから上へ抜ける。

ピンが悪いものもあり、一応A2か。

少し天気が回復して、ガスの晴れ間から、光さす池ノ谷、馬場島が印象的で、晴れていたら最高だろう。

ハング上からは、傾斜の落ちたフェースを行くが、ザイルが流れず苦しい。

わりと狭いピークで終了。全5P

ガスで何も見えない中を下降する。

池ノ谷と反対側を巻くようにして、三ノ窓尾根を越してさらに踏み跡をたどる。最後は岩のバンドから雪渓を５０m程トラバースして三ノ窓へ。稜づたいには降りないので注意。

時間がかかってしまったが、良いルートだ。

7月２４日　◎

ＢＣ（７：０５）－平蔵谷出合（７：４５）－場所変更（１０：１５）－ＢＣ（１０：４５）

雪訓をする。場所は平蔵谷出合向かい側と武蔵の向かいであったが、あまりよくなかった。

7月２５日　●

〈負傷者搬送〉

ＢＣ（７：５０）－室堂（１３：２５）－ＢＣ（１６：５０）

前日Ⅴ・Ⅵのコルで京都府大の方が負傷したので、長崎大、京大と協力して、山岳警備隊の指示で搬送をおこなう。

メンバーは、ビバーク以外の全員。

昼飯にもらった山菜御飯は、たいへんうまかった。

〈チンネ敗退〉

（紫藤、大西）

ＢＣ（５：００）－敗退（６：００）－ＢＣ（６：４５）

長次郎登行中強雨となる。

〈三ノ窓～二股ビバーク〉

（藤田、東篠、西原、安井）

ＢＣ（６：２０）－池ノ谷乗越（９：２０）－二股（１２：５０）－ビバークサイト移動（１７：１０）－ＴＣ（１８：３５）

全く晴れるみこみもないのに、ほとんどやけくそで出発する。池ノ谷乗越へ着いたころにはすでに全身ぐしょぬれの状態で、非常に寒かった。当初予定の池ノ谷を降りることなどもはや念頭になく、ガスでまったく視界がきかないので、三ノ窓雪渓を下ることにした。少々早いが二股でビバークを決めこんでツェルトにもぐりこんでいると、急に雨あしが強まりそれが三時間続いた時には道であった所が川になっている、沢はくるったようにごうごうと音をたてている、このままでは今にツェルトと共に流されかねないと見たので、豪雨の中を撤収して仙人山への道を登りだす。この雨は夜半まで降り続いた。

7月２６日　◎/●

〈ビバーク（続）〉

ＴＣ（５：２０）－ＢＣ（７：１０）

不思議なことに剣沢の水は、いつもと変わらないように見える。いくら増水してもすぐにひいてしまうようだ。

久しぶりに太陽が姿を見せた。

〈Ⅳ峰Ｄフェース富大敗退〉

（紫藤、大倉）

ＢＣ（６：４０）－敗退（９：００）－ＢＣ（１０：２０）

取付きで雨が降った。

〈源治郎尾根〉

（来村、蔭山、鷲尾、戸叶）

ＢＣ（７：２０）－本峰（１５：００）－ＢＣ（１６：００）

時折降る雨の中を行く、末端のガリーの最上部は、やはりいやらしい。ガラガラである。

7月２７日　●→◎

〈Ⅵ峰Ａフェース敗退〉

（来村、藤田、大倉、西原、安井）

ＢＣ（６：００）－Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ出合い（７：００～１０：１５）－ＢＣ（１０：４５）

途中で雨が降ってⅠ・Ⅱ峰間ルンゼ出合いの岩小舎で、他大学と一諸にうだうだと過ごす。

〈八ツ峰敗退〉

他のメンバーは、早々にＢＣに引き返した。

7月２８日　●

連日本峰方向は、ガスに包まれてまっ暗であった。残り２日が晴れて本当によかった。

7月２９日　①

ようやく夏がやってきた！

〈Ⅵ峰Dフェース富大〉
（紫藤、東篠）
BC（5：00）ー取り付き（7：30）ー終了（10：30）ークレオパトラニードル（12：00）ー池ノ谷乗越（13：30）ーBC（15：00）

入部以来始めて同年コンビで本番の岩を登る。呼吸もピッタリで、何のことなしに富大を登る。核心のA0はフリーで登ればすばらしいだろう。早く終了したので、チンネ左稜線の戸叶、大倉パーティーに声をかけて上半を遠足することにする。クレオパトラニードルはⅢ＋級の岩で、頂は素晴らしい眺めであった。八ツ峰の頭からいったん池ノ谷ガリーへ出て、のんびりとベースに帰った。

〈チンネ左稜線〉
（戸叶、大倉）
BC（5：35）ー池ノ谷東越（7：50）ー取付き（8：30）ーチンネ頭（14：25）ーBC（14：40）

下部3Pは岩も堅く快適、4P目でトップの大倉がピナクルを巻きすぎ、ひき返す。核心部の人工はA1で行く。このあたりから高度感も出てきて、浮石が多いこと以外は快適な登攀となる。途中のハイ松帯は、ザイルは不要で、時間の事を考えると出すべきではなかった。

〈Ⅵ峰フェース〉
A（藤田、西原）、C（森藤、安井）
BC（5：50）ー取付き（8：10）ー開始（11：15と11：30）ー終了（13：15）ーBC（15：30）

先行パーティーが3組もいて3時間以上の待ち。共にAフェースを登るはずの森藤、安井にCフェースへ移って貰う。Aフェースは1P目が核心で所々ぬれていて悪い。あとは高度感良く快適。頭でAフェースペアと合流するが、下降路が一部崩壊しており、懸垂1PでⅤ、Ⅵのコルへ。

〈源治郎尾根Ⅱ峰ABフェース〉
（来村、蔭山、鷲尾）
BC（5：50）ーⅡ峰懸垂のコル（8：40）ー開始（9：45）ー終了（11：40）ー本峰（13：20）ー平蔵のコル（14：00）ーBC（16：10）

長次郎左俣のゴルジュの上よりⅡ峰懸垂のコルの少し上方の尾根右のルンゼをつめる。少々急だがあっという間に尾根に出た。このままピークに行けば、ピークへの最短登路になると思われる。

少し下ってコルよりトラバースするが不安定で緊張する。

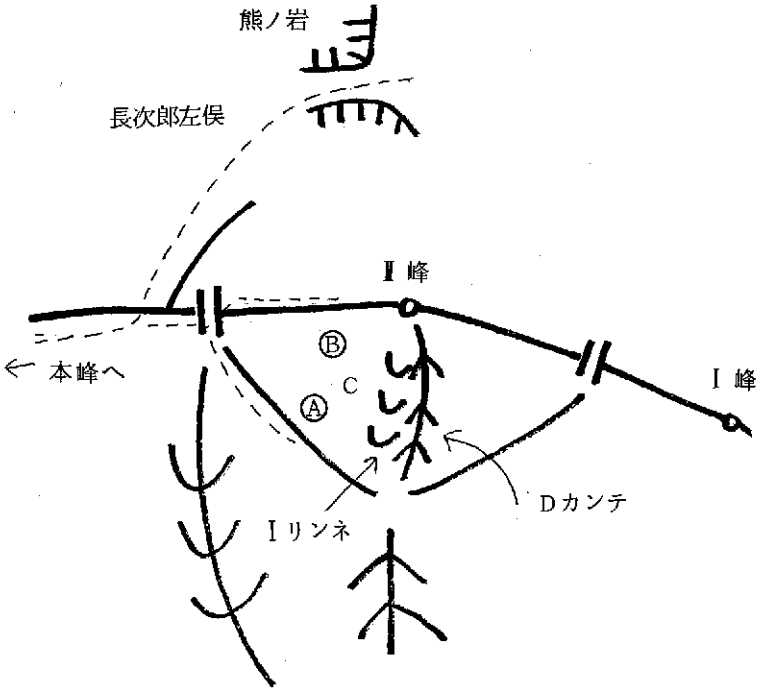
100m程で取付きに達するが、壁に近いのでわかりにくく、少し下って偵察した。ABフェースは、くだらなそうに見え、Cカンテはまし、Dカンテはなかなかに見える。

足元の太いハイ松でビレイして1P目出だし左から回ってカンテへ。少し不安定（25m）、ハイ松帯につっこんでAフェースが終わるが、ビレイ点を移さないとBフェースが苦しい。Bも易しい（40m）。1年生は少々不満そうであったが素晴しい天気にピークに行けて満足か？

7月30日 ①
〈源治郎Ⅰ峰下部中谷～上部成城ルート〉
（来村、紫藤）
BC（4：45）ー取付き（5：30）ー開始（6：00）ー中谷ルート終了（9：45）ー成城大開始（11：15）ー終了（14：15）ーⅠ峰（14：30）ーBC（15：45）

朝一番で取付きへ、フラットソールで開始する。1P目凹角に取付くがすぐに右のボルトラダーに逃げた。3Pからスラブを左上するが乾いていて快適（Ⅴー）、4P目フレークを下る所が難しい（Ⅴ）、5、6Pで大岩溝の下まで行くがルートとしては、右と左にあがってハング下を右上するものがあるが、右を行ってかなりいやらしかった。（A0）

7Pチムニ状をフリーからA1、8Pこのあたり足元には、巨大で深いチムニ状のとてつもない大岩溝が広がっており一見の価値がある。



☆源治郎Ⅱ峰付近

驚いた。

9Pルートに注意してフェース中央からブッシュに抜けて終了。

上部へは、しっかりした踏み跡をたどって30分程で着く。

成城大取付きは、岩壁の最下部より左へ多少あがった平らなところである。

ルート図の3Pまでを2Pで行く、3P目が核心で、ダイレクトのボルトラダーがルートを横切って直上しているので正規ルートをたどるのが難しいが、ボルトラダーから5m左へトラバースし、ピンの見えないクラック状の弱点をつけば、自然にノーマルルートとなる。

フリーで行くには、岩がもろい感じがして多少不安である。

4Pでハイ松帯に着いて終了。ピークまでは結構あるので疲れる。

高度感のある気持のよいクライミングで、ぜひ継続すべきだ。

〈チンネ左下～gcd〉

（藤田、東篠）

BC（4：55）－開始（8：10）－終了（13：05）－BC（15：50）

故障していた2人にしては、快調そのもの。1P目は、取付きが悪く、人工でのピンの効きもよくない。3P目は、ガレをつめるよりピンのある側壁を行く方が楽しい。gcdは明るいルートだ。特に、dクラックの高度感は格別。この日、長次郎出合付近で、かの長谷川恒夫氏と話す。変な声だった。　（記　藤田）

〈八ツ峰下半〉

（戸叶、大倉、一年生全員）

BC（5：20）－Ⅰ峰（8：15）－Ⅴ・Ⅵのコル（13：10）－BC（16：00）

よい天気の中楽しい遠足であった。

7月31日 ●

〈下山〉

BC（10：40）－ダム（17：40）

打ち上げの余波で撤収にだらだらしていて出発が遅くなってしまった。

あまり心配してなかったが、ペースが遅く、なんと最終バス（17：30）に間に合わず、

特別に扇沢まで送ってもらった。最低であった。

また内蔵助からの水平道で一部川沿いの道と別に、新道がかなり上を巻いているか、どうも下の道でも十分行けるみたいだ。

今回は雨に降り込められて惨々な合宿で、各自不満のようであった。

合宿の時期を見直す必要があるかもしれない。

（記　来村）

夏　山　縦　走

甲斐駒赤石沢と北岳バットレス

期　間　　8月2日～8月11日
参加者　　来村、戸叶

8月2日　◎→●＋gas

駒ケ岳神社（8：30）－7合目BC（15：30）

予想通り、45Kg以上の荷をしょっての入山となった。黒戸尾根は長く苦しく、特に笹平付近が特にたるい。

赤石沢の岩場を登るのに最も近いのは、八合目の岩小舎か、鳥居付近の広場であるが、水が心配である。水場は奥壁の右ルンゼ下であるが、我々が行った時はかなり細々としていたので注意が必要。

七合目の天場は、広くて水がある（小屋）のが良く、八合目まで30分程なのでこちらにした。

8月3日　①→gas

BC（5：30）－Aフランケ取付き（7：25）－BC（11：45）

疲れていたせいもあって偵察とした。

真砂で甲南さんに教えてもらった通りだがやはり苦労した。大木にハーケンが打ってある所から八丈沢方向に降りて、八丈沢の30m程の滝の下あたりからトラバースする踏み跡に入るのがポイントだと思う。岩小舎に出なくとも右フェース下をトラバースして行けば早い。

Bバントや第1バンドを偵察しながらゆっくり帰る。

8月4日　①→gas

BC（3：55）－A赤蜘蛛（5：45～10：55）－B赤蜘蛛（11：55－16：50）－8合目岩小舎（17：00）－BC（17：30）

偵察したせいもあって無難に継続できた。岩小舎でビバークして翌日左ルンゼという予定で、水などをデポしたがあまりにBCが近いため、ついフラフラと帰ってしまった。

が、夜になって雨が降り始めたのでした……

〈Aフランケ赤蜘蛛〉　9P・Ⅴ・A1

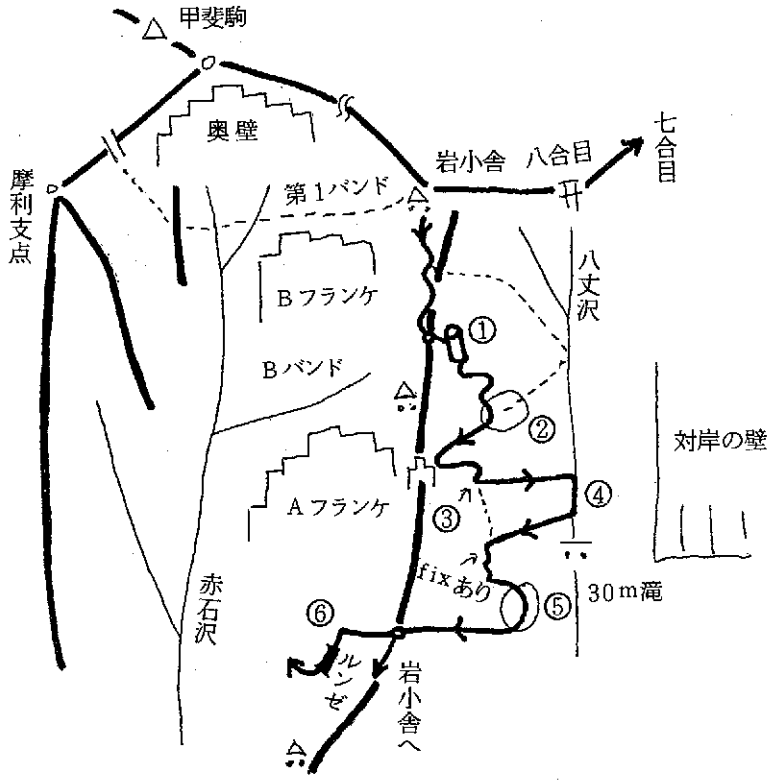
取付きは、右フェース下から恐龍カンテを巻いたバンドですぐわかるが、核心の凹角は入口しか見えず見通しは悪い。

1Pは単なるA1で、2P目でシェードルに入り、傾斜が急になる手前で短く切った。3P目素晴しくすっきりしたシェードルに走るこれまたすっきりしたクラック（ハンド～フィスト）を登る。傾斜もきつく10m程Ⅴが続く、ボルトもあるがフレンズ、ヘキセンを使うと安心できる。途中からA1になって40mでハング下のビレイ点へ。難しいが痛快！

次に、人工も混えた2Pで恐龍カンテ上部につなぐ、ここで少々時間待ちする。恐龍カンテ上部もまた素晴しく、クロスライン～スーパークラックも圧倒的だ。Aフランケの左の方や、ガスの切れ目からのぞく赤石沢も良い眺めであった。

上部は例のアルミサッシ連打の人工で、安心感はあるもののシュリンゲ等に注意が必要で邪魔くさい。2Pでカンテの上まで抜けるが、傾斜のあるせいで少々しんどく感じた。また最上部はザラザラでもろくいやらしい。左フェースの方はもっとひどいらしい。

もう2Pで岩小舎直下まで行って終了。お勧めの良いルートであった。



① 大木にハーケン
② ザレ場
③ △にボルトが打ってある
④ ２０m程沢を降りて岩壁下をトラバース
⑤ アザミがいっぱいで３０m滝の下付近
⑥ 右フェース下の樹林帯からルンゼを下降して回り込む

☆ 甲 斐 駒 赤 石 沢 概 念 図

休憩してからBフランケへ、Bバンドを降りる。バンドというよりは沢っぽく、下降もいやらしいので注意。

〈Bフランケ赤蜘蛛〉 １１P・Ⅳ＋・A１

取り付きは、本谷へ出て、５m程あがった所。１P目はノーザイルで行って、２P目の人工から行くが結構しんどいハング越えであった。３P目も人工でさっさと抜けて、４Pで草付きを踏んで第１バンドへ、なんとかビバーク可能。

次に垂壁の下の右上する、砂及び草付きまじりのスラブ状のわけのわからない所を、約５０m程登ってから、左の垂壁のボルトラダーに取り付く、わかりにくい！

すっきりした壁はすぐ終って、草付きフェースとなるが乾いていてよく踏まれていたのでいやらしさはなかった。

８Ｐ目で第２バンドにあがるが、岩とも土ともいえないボロボロの凹角があってたいへんいやらしい。ここもビバーク可能だ。

９Ｐ目も草付きのフリー、１０Ｐ目で久しぶりのすっきりした岩をＡ１で行く。

１１Ｐ目、決して落ちたくないもろいフレークをしかたなくレイバックで登り、ハング下をトラバースして、良くない支点でテンションダウンして、少し左上して終了、４０ｍ程ザレた沢を登ればヒョッコリと第１バンドへ出る。

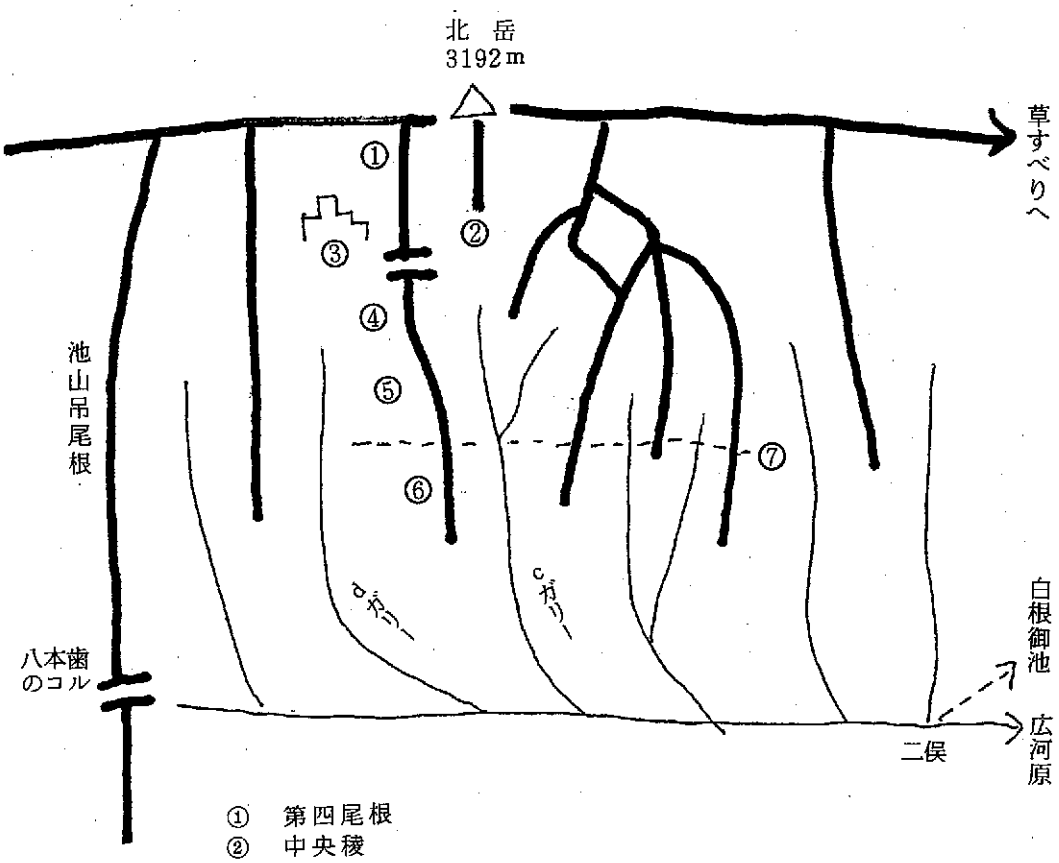
草付きとブッシュに岩壁が埋もれているという印象のＢフランケだが、別の角度から見るとおもしろいかも知れない。

全２０Ｐもあって不安であったが、すんなり行けてうれしかった。

８月５日 ●

沈殿

終日雨で、なぜか低気圧が太平洋の真中にあり、高気圧はなんとフィリピン沖だ！？



① 第四尾根
② 中央稜
③ ｄガリー奥壁
四尾根フランケ
④ 上部フランケ
⑤ 下部フランケ
⑥ ピラミッドフェース
⑦ 横断バンド

☆北岳バットレス概念図

8月6日　①→gas

左ルンゼを登りに行くが、水がザアザア流れていたのでやめた。

中央稜という話も出たがブッシュが多そうでやめにして、戸叶は摩利支天まで散歩、来村は、8合目岩小舎下の5m程のクラックで遊ぶ。

8月7日　①→gas

BC（4：20）ー左ルンゼ（5：30～11：55）ー稜線（12：30ー13：05）ーBC（13：40）

〈奥壁左ルンゼ〉　9P・Ⅴ・A1

まだ水が流れているが、仕方なく行く、1P目出だしがわかりにくく、左右とも登れるようだが、右から登って人工となった。2、3Pもまったく気が抜けない。4P目でF3を登るが、人工が大部分となった。

F2は、本流左の易しそうなクラックをたどるが、最上部が傾斜が急になり、エッジのない荒い粒子の独得の岩質と濡れもあって、フレンズ、トリプルまで使ってもがき苦しんで抜けた。またビレイ点まで40mで届かず、ビレイ点の移動をしてもらう。

さらに2P登ってF5の直下へ、チョックストーンを抜けた後、極端にボロボロとなり、とんでもなくいやらしい。最悪のピッチか。

左ルンゼはさらに続いているわけだが、見るからに険悪である。右のゆるいスブ状のフェースを右へ回って、さらに1Pで中央稜の踏み跡へ出て終了。踏み跡は、明瞭だが、へたすると詰まってしまうので注意。

さすがに日本の内面登攀の代表的クラッシックルートだけあって、気が抜けないが、決して快適とは言えない気がする。

8月8日　◎→①→●

TC（4：20）ー甲斐駒（6：00）ー北沢峠（8：45）ー（村営バス）ー広河原（10：05）ー白根御池BC（12：20）

北岳へ、かなり長距離のBC移動をする。

広河原は、人がウジャウジャいて下山気分になってしまう。また酒が買いたかったがはたせなかった。

荷はなぜか重く、暑かったが、意外と早くBCに入れた。

8月9日　①→gas

BC（3：55）ー開始（5：30）ー四尾根上（8：45）ー終了（10：20）ー北岳ピーク（10：40～11：30）ーBC（12：25）

〈ピラミッドフェース～四尾根〉

14P・V

前線を引きずった低気圧が日本海にいたので、悲観的であったがなんとか行けた。

ヘッ電で歩いて他パーティーを抜きながら急ぐ、D沢をわけ、八本歯のコルへの道をわけE沢をつめて行ってD沢へ乗っ越してわりとすぐ取付きに着いた。

十字クラックは、一目でそれとわかるが意外と悪そうである。

その左の凹角状から取り付く、岩質に慣れるまで恐く感じる。3P目のフェースのルートがわかりにくい。4Pで横断バンドを越えて上までつねぐ。

このあたりから核心部で5P（30m・Ⅴ）、6P（30m・Ⅴー）、7P（30m・Ⅳ+）、8P（40m・Ⅴ）とⅣ+でも気の抜けないピッチが続く、Ⅴのピッチは、短かく、ナッツ、フレンズ（小）が有効である。9Pは、不明瞭なバンドをトラバースし、左手の大テラスをやり過して、四尾根主稜の白い岩下でビレイ。

四尾根に入ると急に易しくなってスイスイ登れる。12P目でⅤーの短いフェースを越えてマッチ箱のコルにアプザイレンで降りる。コルは、見事に崩壊していて、中央稜へは四尾根をさらに1P+α上がったところより懸垂2Pで降りるらしい。（ちなみにCガリーをつめるのは、不可能に近いように見えた。）

中央稜の姿は圧倒的で登攀欲をそそる。その中央稜を見ながら城塞ハングの上に出るかんじで終了。ピークは、はっきりした踏み跡をたどれば登山道に出る。

帰りは草すべりを駆け降りる。意外と早かった。

8月10日 ①

BC（4：00）－dガリー大滝（6：30～5：55）－下部フランケ（6：30～10：00）－dガリー奥壁（10：15～12：00）－北岳ピーク（13：20）－BC（15：00）

〈dガリー奥壁〉 2P・Ⅲ＋

出だし少々いやらしいだけ。

終了点から約100m程でルンゼ状にせばまっていて、それを抜けると横断バンドの左端に着く。狭くなる前に右壁にとりついてもよいようだ。

〈下部フランケ〉 4P・Ⅵ－

取付きが多少わかりにくいが、1P目のフェースのピンやシュリンゲが目印となる。1P目せっかくだからということでど真中のフェースに取り付く、ピンが多少不安で、ハーケンを打ち足し、トリプルをフレークに使って補強して臨んだ。戸叶がバランスをくずして落ちたが、大事なく、TOPを交代してなんとか抜けた。への字ハングは、どうということはなくその上でビレイ。荷上げという慣れないことをして時間をとる。

次の2Pは同じような凹角を登って、4Pからトラバースしてdガリーへ。

さらに2Pのばしてやっとハング下の取付きに着いた。

〈dガリー奥壁〉 4P・Ⅴ

1P目3段程ハングを越してゆくかなりおもしろいピッチで痛快。最後のハングが核心。2P目なだらかなクラックを快適に行くが、クラックが途切れた後、2、3歩微妙なところがある。いっぱいにのばして、3P目でⅢのチムニークラックを登るが慣れないせいか苦労する。

4P目城塞ハングそのものでなく右端のチムニーを、ザックをハーネスにつるして、バック&フットで登って昨日と同じ所で終了。

八本歯のコルからゆっくり降りる。ガスの切れ目に見えたバットレスは、なかなかのものであった。とりあえずビールがうまかった。

8月11日 ①

TC（7：45）－広河原（8：20）

皮肉にも夏山を通じて最高の天気で下山する。

計画では、沢が一本入っていたが、岩の方は予定のルートはほぼ全部行けて、満足できた。

甲斐駒には、まだ摩利支天の岩場もあるし、沢もある、Aフランケには様々なルートがあるしでまた行きたい。

北岳の方は、あとは、十字クラック、中央稜に上部フランケぐらいという感じだが、アプローチが近いのがうれしい所だ。 （記 来村）

東北岩井又谷

期 間 8月14日～8月16日・

参加者 越智（OB）、畑（OB）、紫藤

8月14日 ①

三面集落路（10：00）－岩井又沢出合（13：00）－コウゾウ沢前泊（16：00）

タクシーで米坂線小国駅から三面ダム上流の村落跡に着く。岩井又沢出合へ行く際林道沿いで対岸の出合を見過ごし、30分程行き過ぎてもどるのに30分ロスする。岩井又沢は水量が豊富である。泳ぎが必要な所が多数ある。出合付近はアブだらけであり、紫藤が特に襲われて、顔がはれ上がってしまった。山行中ずっとはれはひかなかった。砂岸にツェルトを張り、たき火で追っ払った。

8月15日 ◎

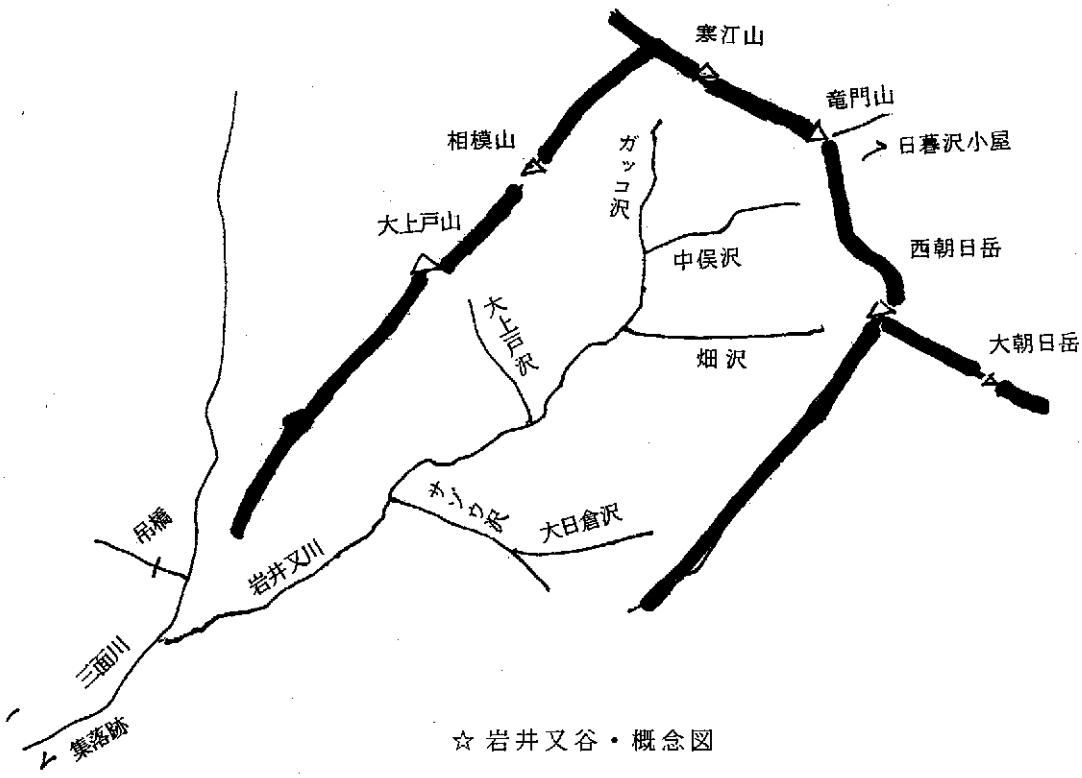
CS（6：00）－畑沢出合（14：00）

水量は適度で、泳ぎをまじえつつ殆んどの滝を高巻かずにすんだ。すばらしい沢である。特にゴルジュの巨大さには圧倒された。

8月16日 ◎→●

CS（5：00）－稜線（13：00）－竜門山（14：00）－日暮沢小屋（17：30）－根子（19：30）

この日はペースもよく、中俣沢を行く。1日で下山可能となった。岩井又沢の長さは第1級であろう。日暮沢小屋からはバスをのがしたので根子まで2ピッチ歩く。 （記 紫藤）



☆ 岩井又谷・概念図

南アルプス縦走

期　間　　8月2日～13日
参加者　　紫藤（L）、大倉、蔭山、鷲尾、西原、安井

8月2日　◎
夜叉神登山口（10：10）ー夜叉神峠（11：25）ー南御室天湯（14：50）
夜叉神峠までペースが上がらなかった。

8月3日　○のち◎
出発（5：38）ー薬師岳（7：05）ー白鳳峠（10：30）ー早川天湯（12：35）
一年が多いせいか撤収に手間どる。後半西原がバテる。

8月4日　○
出発（4：35）ー浅夜峰（7：05）ー仙水峠（8：50）ー甲斐駒ケ岳（11：05）ー北沢天湯（13：45）
甲斐駒アタックで一年にトップを行かせると、ひどく早い。まだペースをつかんでいない様だ。

8月5日　●
出発（4：55）ー北沢峠（6：55）ー仙小屋（9：20）
北沢峠で安井がいきなり一人で下山しだすという事があったが、説得してつれて行く。

8月6日　◎時々①
出発（5：25）ー仙丈岳（5：45）ー三峰岳（13：40）ー熊ノ平天湯

8月7日　①のち◎
出発（5：10）ー農鳥岳（8：00）ー熊ノ平天湯（11：40）
上級生の判断ミスの為、北岳アタックを次の日にまわしてしまう。

8月8日　◎時々①
出発（6：15）ー間ノ岳（7：45）ー北岳（9：35）ー熊ノ平天湯（12：40）

8月9日　①のち●
出発（4：45）ー塩見岳（9：45）ー三伏天湯（12：35）
天気が悪く蝙蝠岳アタックは中止

8月10日　○のち◎

出発（４：３５）ー小河内岳（７：４０）ー悪沢岳（１３：３０）ー荒川天湯（１５：３０）

ひさびさの快晴だが前岳の登りで皆バテる。

８月１１日　○

出発（４：５５）ー赤石岳（６：５５）ー百間洞天場（９：２０）

紫藤、次の山行の為下山。残りは早目に行動を終え、休養日とする。

８月１２日　○のち◎

出発（４：１５）ー聖岳（８：５５）ー茶臼天場（１３：３０）

縦走も後半となりペース上がる。

８月１３日　○

出発（４：１５）ー畑薙大吊橋（８：３０）ーバス停（９：４０）

道路がくずれた為ダムからさらに１ピッチ歩く事になった。

（記　大倉）

個　人　山　行

大峰・下多古谷

期　間　　１０月１０日～１２日
参加者　　大倉（L）、安井

１０月１０日　◎

下多古バス停（１２：４５）ー谷に入る（１４：００）ー５０mの滝手前（１６：００）

ルート図よりも早く谷に入ってしまい、いやらしい高巻きを１度行う。

１０月１１日　◎のち●

出発（７：００）ー二又（１０：２０）ー稜線（１１：４０）ー竜ケ岳天場（１４：５５）

高巻きは、よく踏まれており楽。８mの滝で安井が落ち、後ザイル出す。

１０月１２日　◎のち①

出発（１０：３０）ー上谷分枝（１２：５０）ー柏木（１３：２５）

前日の雨で川が増水していると判断し、上多古谷はあきらめ、のんびり下山する。

（記　大倉）

台高（東ノ川本流）敗退

期　間　　１０月１０日～１１日
参加者　　藤田、紫藤、西原、蔭山

１０月１０日　○

駐車場発（１７：００）ーテン場（１８：００）

沢登りには最適の日和であったが、車が渋滞に巻き込まれて現地到着が遅れる。予定では今日１日でとりついて、行けるところまで行くつもりであったが、結局とりつきまでの山道上で行動を終える。

１０月１１日　◎→●

テン場発（６：００）ー１Ｐ後休けい（７：００）ー引き返す（８：１０）ー駐車場（１０：３０）

昨日とうってかわり、天気はどんよりと悪い。天気予報その他から判断して、今後天候が悪化しそうなので、これからとりついた場合、エスケープルートがなく、沢の増水が危険なため、敗退を決定、１Ｐ後退却する。

☆東ノ川本流の沢登りは、ここ数年我が部では、幾度か計画されたが、そのたびに天候その他の事情で敗退を余儀なくさせられている。次回にぜひ期待したい。

（記　蔭山）

アイゼン合宿

御　岳

期　間　　１１月２１日～２４日
参加者　　来村（L）、藤田、鈴木、東條、紫藤、大倉、蔭山、西原、安井、越智（OB）、戸叶（OB）

１１月２１日　①
田ノ原（９：３５）ー二ノ池（１３：００）ー雪訓（１５：４０）
雪がなく、テントをたてるのにペグがささらないほどである。雪訓できる所は１ケ所しかなく、そこも京大に使われていて、細々とアイゼン、滑落停止、キックステップを行う。
１１月２２日　◎のち①
出発（６：００）ー練り歩き（７：００～１０：００）ー雪訓（１１：４０～１６：３０）
練り歩きで、剣ケ峰～二ノ池小屋間で迷う。雪訓は今日も細々と行う。後発隊入山。
１１月２３日　①
雪訓（６：００～１１：４０）ー練り歩き（１２：５５～１４：３０）
まともな雪訓の為、京大より早く場所とりに行った。先発隊下山。
１１月２４日　◎のち○
練り歩き（７：００～７：４５）ー出発（９：００）ー王滝（９：３０～１１：０５）ー田ノ原（１２：２５）ー八海山荘（１３：５０）
下山の途中王滝頂上で設営練習の後下山。
（記　大倉）

偵　察　山　行

明神西南稜～槍ケ岳

期　間　　１１月１日～１１月７日
参加者　　来村（L）、藤田、東條、大倉、蔭山、西原、安井

１１月１日　①→◎
上高地　７：１０）ー取付（９：０５）ー２３５０m（１６：４５）
上高地に着いて一同唖然とする。穂高に全く雪が見えないのだ。取付は前明神沢の手前、標高１６２０付近で稜上まで急斜面が続く。西南稜は１８４５台地までは急登だが、その後傾斜は落ちると同時に岩峰が所々現われる。テン場は、一張り分しかなく、もう一張りはハイ松の斜面にザイルで固定して無理矢理張らねばならず、極悪のサイトであった。
１１月２日　●　沈殿
雪がないので水を求めて来村、東條が１００m程下り、昨日見つけておいたルンゼで水を補給する。
１１月３日　●
出発（７：１０）ーⅤ峰（９：３０）ーⅡ・Ⅲのコル（１２：１５）
雨の中をテン場からすぐの所より懸垂１０mでコルに降り、岳樺の林を登るとしばらくしてハイ松帯に変わるとⅤ峰台地に達する。ここは細長いプラトーで迷うことはないだろう。Ⅴ峰直下は急なルンゼ状を登る。明神主稜は徳沢側にスッパリ切れていて気は抜けないが、中でもⅢ峰への登りは核心である。Ⅲ峰を越えた所で突然界雷に遭い、皆胆を冷やす。テン場では雨水を集めて水を補給した。
１１月４日　◎
出発（７：００）ーⅠ峰（８：１０）ー前穂（１０：５５）ー奥穂（１４：３０）ー白出のコル（１５：４５）
Ⅱ峰から下りは２０m懸垂を２回要した。奥明神のコルへの下りも悪くfixと懸垂で降りる。次に前穂前衛峰は岳沢側を巻くが、稜へ出る所で５mの岩登りにfix。吊尾根は夏道を行くが、来村のみ偵察のため稜通しに行く。白出のコルへの下りは急だが、ハシゴや鎖を使って慎重に下る。奥穂山荘で水を買った。
１１月５日　⊛
〈槍縦走隊〉　藤田（L）、東條
出発（５：５０）ー北穂（１２：４０）
ー昨日の雨で濡れたキスリングやゼルプスト

は凍っていて、取扱いに骨が折れる。涸沢岳から懸垂１０ｍで下るが、その後、延々とクライムダウンが続きザイルは出し始めるとキリがない様なルートだ。最低コル付近で、張りつめた緊張が抜けたのか、東條がスリップ。前にいた藤田がとっさにつかまえて事無きを得た。コルからはルートファインディングが難しく、又スリップしてから慎重になり北穂迄がやっとであった。ドーム手前のトラバースで１Ｐ出したが、ここも出し始めたらキリがない。

〈下山隊〉　来村（Ｌ）、大倉、安井、西原、蔭山

出発（６：２５）ー新穂（１５：２０）

地図をよく見なかったため、降り口を間違える。涸沢西尾根は下降路として有名であるが、上部は決して易しくなく、気は抜けない。南稜等に降りない注意も必要である。

１１月６日　○

出発（７：２０）ー大切戸最低コル（１５：１０）ー南岳（１８：４０）

朝起きるとツェルトは半分雪に埋まっている。この雪が曲者で、さらさらと全くしまっておらずピッケルは全然役に立たない。雪で隠されたスタフスを一歩一歩足で探りながら下るのは精神的に疲れる。さらに登はん具はカチカチに凍って、シュリンゲをセットするのに何分もかかる有様であった。結局、北穂小屋直下でザイル４Ｐと懸垂１Ｐ、飛騨泣きで１Ｐだして最低コルに達した時には３時をまわっていた。３００ｍ下るのになんと８時間かかったことになる。南岳の基部に着いた時にはとうとう陽も沈み、夜のとばりが降りてくる。幸い月明かりがあり、標識も多かったので、問題なく避難小屋へ駆け上る。精神的にも肉体的にも疲れる一日であった。

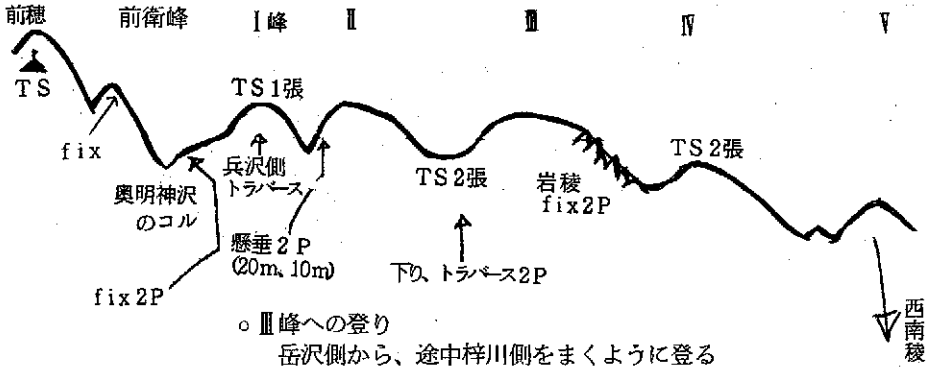
１１月７日　○

出発（８：３０）ー槍平（１４：０５）ー新穂（１７：４５）

前日の疲れのためか、出発は遅れ、ペースも上がらない。東條の肩が不安だったのと、時間がないので、槍アタックは行わず飛騨沢を下る。新穂へ着いた時には最終バスが出る５分前であった。

〈偵察報告〉

ｉ）明神主稜



○Ⅲ峰への登り
岳沢側から、途中梓川側をまくように登る

○Ⅱ峰からの下り
岩を支点に梓川側へ２０ｍ懸垂し、１０ｍ岳沢側へトラバースした後、残置ピンで１０ｍ懸垂

ii）涸沢岳～北穂

5月新歓合宿項参照

iii）北穂～南岳

北穂小屋直下の雪壁は積雪量等の状況次第で難易は大きく変わる。大岩峰を右から巻く所から飛騨泣き迄（下図）が核心。

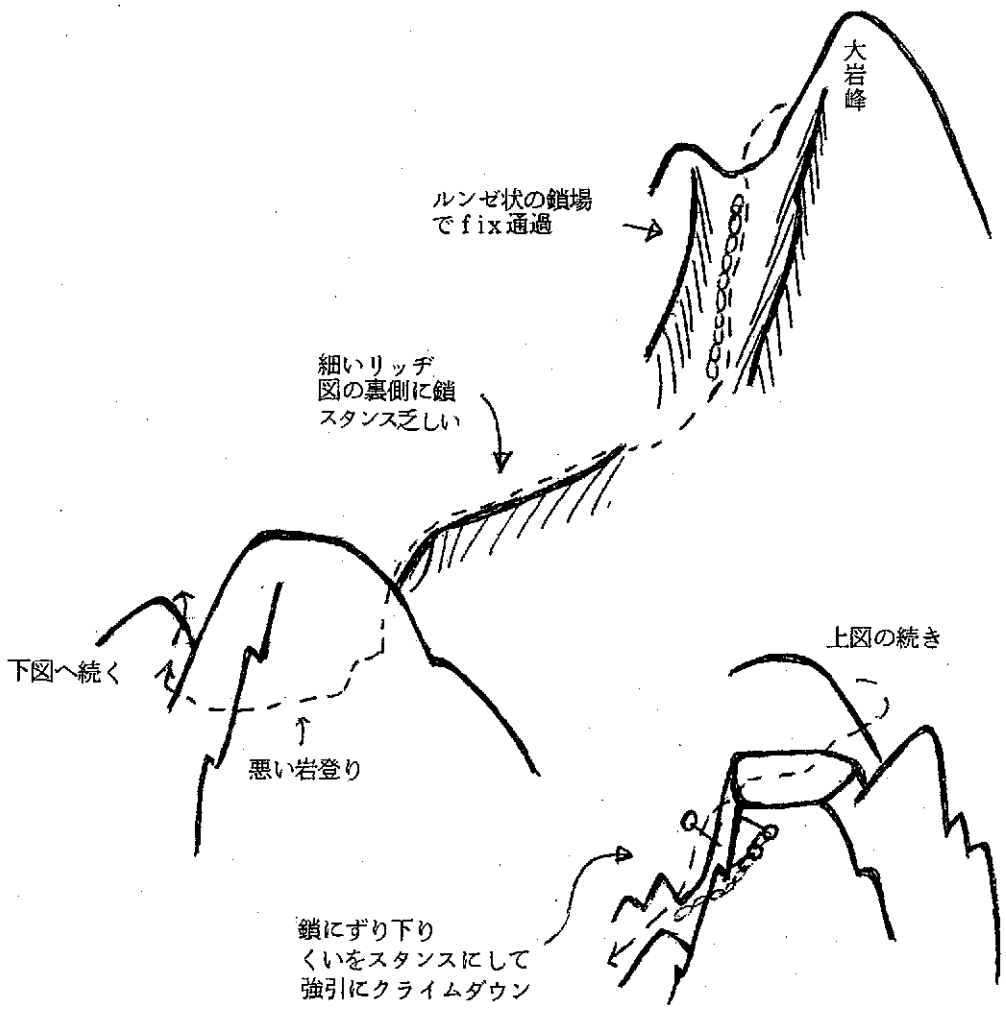
これより最低コルまで延々クライムダウンが続く。

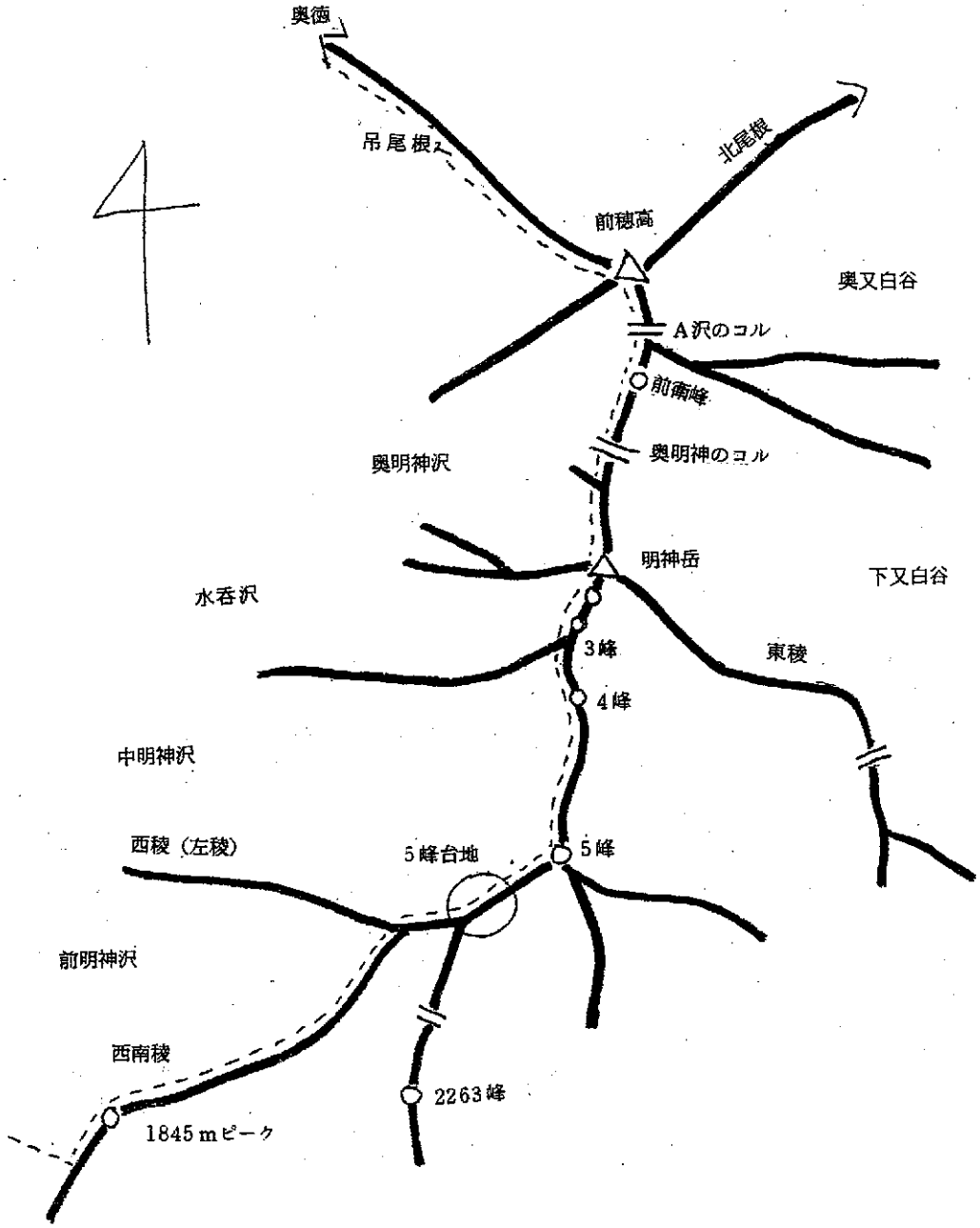
最低コルの次の岩峰に1カ所鎖場。南岳への登りは、梯子2カ所ある他は、道標も豊富でルートは分りやすい。

以上、クライムダウンの多いルートであり、ルートファインディングも易しくない。

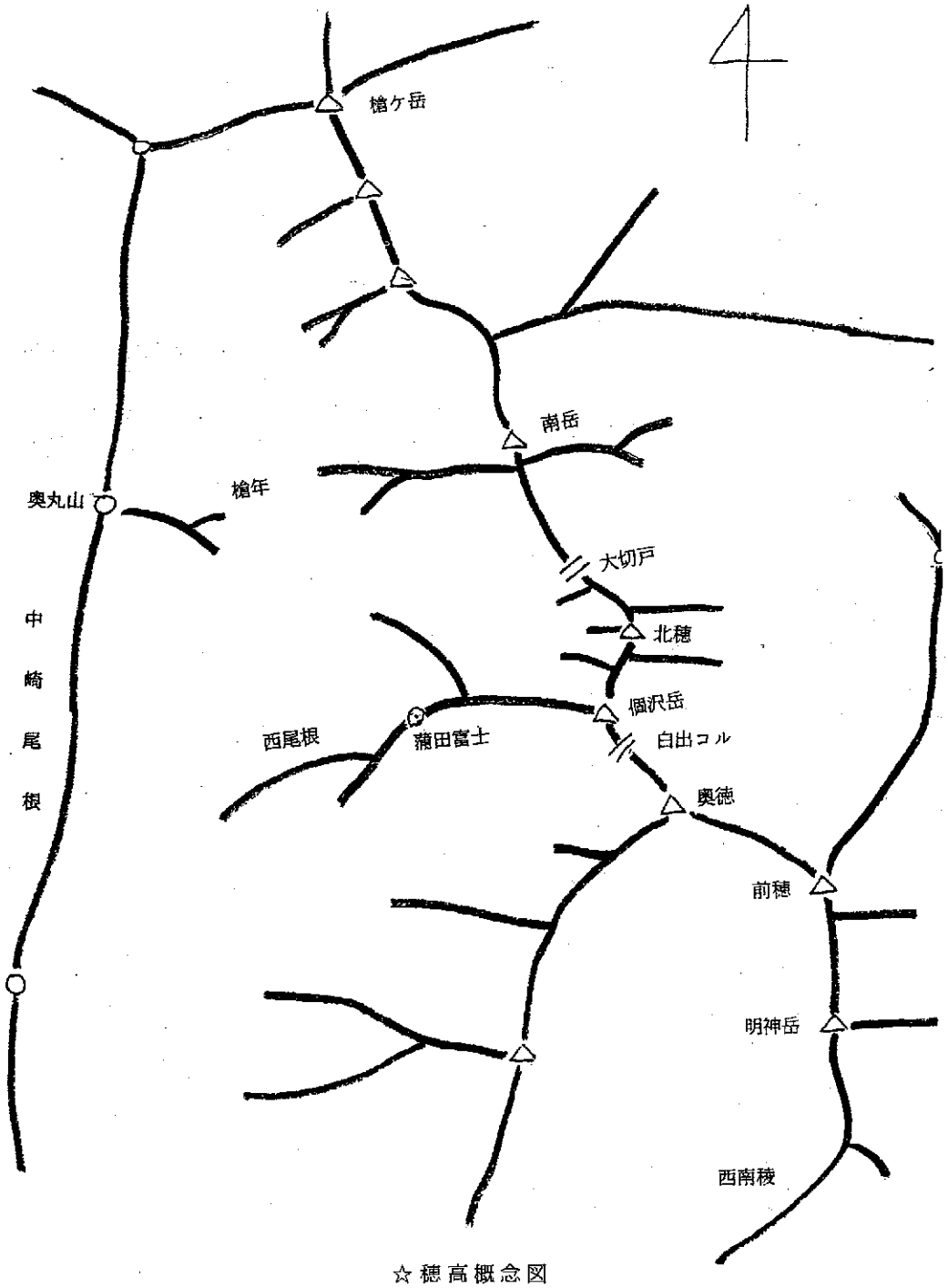
（記　藤田）

注）概念図は、冬山の項参照




奥徳
吊尾根
北尾根
前穂高
奥又白谷
A沢のコル
前衛峰
奥明神沢
奥明神のコル
明神岳
下又白谷
水呑沢
3峰
東稜
4峰
中明神沢
西稜（左稜）
5峰台地
5峰
前明神沢
西南稜
2263峰
1845mピーク

☆明神岳周辺概念図



☆穂高概念図

明神・西南稜～槍

期　間　　１２月２６日～
参加者　　来村（L）、藤田、東條、紫藤、大倉、蔭山

今年の冬はとんでもなく雪が少なく驚いた。

スムースにいけて良かったとは言えるが、（承知とは思うが）冬山とはこのようなものではないことを念を押しておく。

それにしても豪雪なるものは、いつくるのだろうか、今年こそだろうか。

１２月２６日　①

沢渡（６：４５）ー坂巻温泉（８：００）ー河童橋（１１：００）ー取付き（１２：００）ー尾根上（１３：３２）ーＴＣ（１４：１０）

昨夜はスキー客も含めて大混雑で、よく寝れなかった。

沢渡から歩き始める。周りの山もまっ黒で驚く、上高地は、静かで美しい別天地へと変身していた。西南稜は、正面に黒々とのびている。

偵察した通り（２万５千地図の）前明神沢出合いから、右の尾根に取り付く、尾根に出るまで急登で、雪があまりに少なくいやらしい草付きがたいへんだった。

1845ピークに張るが、雪が少なく、ギリギリ２張り張った。

１２月２７日　○

ＴＣ（６：２０）ー2,３００ｍ（１２：３０）ー2,５００ｍ（１４：５０）ー５峰台地（１５：３０）

高気圧に覆われ、完璧な快晴。

2,０００ｍ付近の岩で３０ｍfix、その上の浮石帯でシュリンゲをたらす。

このあたりから左がきれて来て、２ケ所程残置fixのある細い所が出て来るが、問題なし。

２２６３ｍ西壁は見ていてなかなか立派である。

2,２００ｍ手前の岩峰は右から巻き、2,３００ｍ手前の岩峰は左から巻く。

2,４００ｍポコは、懸乗せずに、右から巻いた。積雪がしっかりあれば無理だろう。

積雪は、くるぶし程度だが、日の当たる所は乾いていてまともにヤブこぎであきれていた。

北側の尾根を合流させてから、尾根の右をヤブをこぎつつ行く。５峰台地の端（2,５００）に出る手前で、急な草付きにシュリンゲをたらして越える。

西穂の稜線は2,５００付近から白くなっているが、こちらは例年の偵察以下の雪だ。

１２月２８日　○

ＴＣ（６：２０）ーＶ峰直下（７：０５）ーⅢ峰fix開始（８：３０）ーⅡ峰懸垂開始（９：３０）ーⅠ・Ⅱのコル集合（１０：３０）ー奥明神のコルー前衛峰fix 終了（１３：００）ーA沢のコル（１３：３０）ー前穂（１４：２０）

またもや快晴、崩れてくる予想だったが結局夕方までもった。南ア、富士山、奥秩父までバッチリ望めた。

Ｖ峰はピークにあがらず、トラバースする踏み跡で抜けた。２、３ｍクライムダウン。

Ⅲ峰からザイル工作を開始。３年を中心に先行させてスピードアップする。

Ⅲ峰登り、Ⅱ峰下降、Ⅰ峰下降、前衛峰登りで予定通りfix。

なんとアイゼンを出すことなく前穂に着いた。明神稜線の東と西では世界が違う感じで、東側は結構雪が積っていた。

夜も松本の灯がきれいであったが、気圧の谷が近づくので、明日は崩れるか。

１２月２９日　○

ＴＣ（６：３０）ー最低コル（７：００）ー奥穂（１２：１０）ー白出のコル（１４：１０）

前穂から見る吊尾根は、厳しそうで身をひきしめて出発する。

当然アイゼンをつけて出発。

最低コルまでは問題はない。

概念図の尾根番号で、№5まで夏道付近を時々ラッセルしながら行く、№4か3コルへ20mfix、№7まで稜線を歩く（№6上なんとか天場となる）、№7付近で稜線上30mfix、№9は、夏道を通ってコルへ30mfix、ここで東稜から来た歯科大パーティーに追いつかれたので先に行ってもらう。

№11は、左斜上から稜線へ直登。

№12～№13は、稜線通し。

№14から夏道通しに行くが、ハンゼ上の急な雪壁がかなりいやらしい。

南稜の頭からたらたらした苦しい登りで奥穂へ、もう着いてしまったという感じで感激はないが、やはりうれしい。

振り返る明神もなかなかの迫力だ。

西穂へ向かう歯科大パーティーと分かれて（この時歯科大は、遠征のためのトレーニング山行であったが、その遠征において徳田さんが亡くなってしまった。そしてその時が徳田さんに会った最後になってしまった。非常に残念であり、御冥福を祈りたい。）

下り始めてすぐ道標のところから、急な下りに10m程1年生にザイルを出す。

白出のコルまで50m×2、始めの1Pは、カットできる。

冬期小屋が開放されていたが、予定通りテントを張る。

12月30日 ㊋→①

日本海から三陸沖に低気圧が抜けた。

沈澱

風が強く、夕方から西から北へ風向きが変化すると、吹きだまりになってしまった。夜テントラッセルのため出て見ると、マキシムの方（今回軽量化のために、エスパース5・6人天と同マキシムを使用した。マキシムは、素晴しく軽くコンパクトだが、5・6人天の大きさではやはり弱い。）がつぶれかけている。急いで中の連中を起こして修理する。晴れていて月がきれいなのだが、時々地吹雪が襲って来て不快であった。11時頃就寝。

＜本隊（涸沢西尾根下山）＞

来村、東條、蔭山

12月31日 ○

TC（7：05）ー涸沢岳（7：30）ー蒲田富士プラトー（9：00）ー2,570南稜分岐（10：20）ー2,400台地（11：05）

快晴だが風が強く、撤収に苦労した。7時頃北尾根より朝日がのぼる。たいへんきれいで、これが初日の出ならばと思う。

涸沢岳へは、トレースのはっきりしたミックスで特に問題なし。

登り切るとしばらく平らである。

西尾根への分枝は、尾根の方向が少し左へ向くだけで、北穂への登山路を右へ分ける感じだ。出だしのハシゴが見えていたがやはり恐そうで、先行した縦走パーティーの安全を祈りつつ西尾根に入った。（20m程でケルンがあるので確認できる。）

西尾根は、滝谷側が切れていて、比較的ゆるやかな反対側を行く、浦田富士プラトー手前までは特に問題ないが、ところどころクライムダウンも必要であり、一年生がいるので緊張した。滝谷がバッチリ見えたので、ゆっくり写真を撮りつつ見物した。雪がそれ程ついてなくて、黒々としていたもののやはり凄く、いつかできたら下から登りたいなどと思った。

尾根が左へ曲がってしばらくすると傾斜が急になって残置fixが、出てくる。しばらく降り岩稜帯に入る。岩を左からトラバース（10m）して、凹角をクライムダウン（5m）、急なガリーを左下へ（30m）、バンドを右へ回り込む（20m）、ゆるやかなガリーを右下へ下って（20m）安全地帯へ、ここまで残置fixがあって一部でそれを使用した。プラトーから振り返ると大岩峰に見えるがそれを右から回り込みつつという感じだ。岩稜帯右のルンゼも登っているパーティーもいたが、fixづたいのルートの方が無難に思えた。

プラトーとは言うものの大きい雪稜というところで、雪が多いと雪庇も出るので、天場としてはプラトーに入ってすぐの唯一の20m程の

登りの手前が良いと思う。このあたりきれいな雪稜なのだが、いかんせん人が多すぎていやになってしまった。

2,742ピークから左へ折れてしばらくすると急になって岩が出てくる。Seilを10m程出して、さらに右へ曲って長い岩稜を100m程降りる。岩稜とハイ松帯の境を降りるのだがずっとクライムダウンでいやらしい。

傾斜がゆるくなって左へおれると2,570m Junctionで、ここまで来てやっと安全圏に入ったと言える。縦走隊を除いて心配の種がやっとこなくなって本当にホッとした。ここから真っすぐ行くと南西稜だが、西尾根へは右へ斜面を降りるので注意必要！

右に赤布がかなりあるが、条件によっては真っすぐ行ってしまう確率は高く、特に雪がないと一段下まで完全な踏み跡（途切れている）が出来てしまっているのでまったく困る。偵察でも通り過ぎてしまった。

降り始めは木がうっとうしいが、すぐトレースは、高速道路となって、アッと言う間に2,400m台地に着いた。上の段状の天場（三本松と言うらしい）は、最大の天場だが、それでも7～8張でいっぱいとなっていて、下の方の狭い天場で、他パーティーが下山すると言っていたので、その後に張ることにした。

しかし、時間があってヒマだったので訓練と称して、蔭山にそこらをラッセルさせるが少々しょうもなかった。

15時に感度悪いながらも縦走隊と交信した。12時頃北穂についたらしいが、とにかく安心した。

我々は、縦走隊が南岳に至るのを確認してからの下山という事前の決定であったで、下山もできず、周りはハイキング気分の社会人が騒いでいて何ともアホらしい大晦日であった。

1月1日 ○

TC（14：00）ー白出沢出合（15：30）ー新穂（17：00）

13時に縦走隊と交信して、問題なしとして早々に下山する。

尾根自体は問題ないものの、下の穂高平から林道のバイパスが、雪が少ないため氷化していて恐かった。

ともかく無事終ってうれしかった。

（記　来村）

＜槍縦走隊＞

（藤田（L）、紫藤、大倉）

12月31日 ○

出発（6：45）ー最低コル（8：50）ー北穂小屋（12：20）

トレースは明瞭、人はいる、その上ど快晴で、なんの苦労もない。ただ松濤岩を滝谷側にまいて下った所だけが、多少悪かった。ザイルは、涸沢岳からの下りに懸垂1P、滝谷側トラバースに2Pだした。北穂小屋で越智OBと会う。

1月1日 ○

出発（6：30）ー大キレット（9：20）ー南岳避難小屋（11：20～13：05）ー肩の小屋（15：30）

小屋直下の雪壁は階段で、それ以後もずっとトレースびしばしで楽勝、否、拍子抜け。強風にキスリングがあおられた他は、飛騨泣きで1Pだしただけで、すんなり最低コルへ。南岳への登りも問題なし。あまりに早く南岳へ上れたので、避難小屋にてシーバー交信待ち。あとは槍目指してひたすら歩く。核心はあっけなく程あっさり通過した。

1月2日 ⊙→◎

槍アタック（7：00～7：55）

出発（8：20）ー槍平（11：20）ー新穂温泉（14：55）

気圧の谷接近に伴い、朝からガスと風。槍アタックも楽勝。中崎尾根へは、途中の吹き溜まりが雪崩そうでやらしい。勝手知ったる中崎尾根は、何の問題なく槍平へ。そして、気がつけば新穂温泉。下山後に温泉でのんびりするのはいいものだ。

連日の超ど快晴と舗装されたかのようなトレースに助けられ、文字通りの楽勝であった。滝

谷登攀のため人も多い。成功したのは嬉しいが、充実感には程遠い。トレースと好天、なければ困るが、恵まれすぎるも……。山屋のわがままさを、実感した山行であった。

＜記　藤田＞

＜追記＞

とにかく一年生も含めての冬山としては、我部としては難度が高く、OB、監督からも懸念の声が上がっていた。

焦点は一年生の安全の確保であった、それは主稜線では一歩が死に直結するが全体で確保し通すわけにはいかず、それではどうするのか？ということであった。

ともかく冬山に向けて、技術・体力の向上に務めたものの十分であったかという疑問であったと思う。

ただ軽量化として、テント・ツエルトの軽量化、8㎜ザイル、α米の使用等を行ない、またfix工作の効率化には、気を配った。

残念ながら一年生が冬山までに1人のみになって、そのため十分目が届くことになったので少しは安心したものの、状況が厳しい事に変わりなく、緊張して本番に臨んだものでした。

結果として、異常な寡雪と好天によって楽勝に終わって、多少拍子抜けでした。

奥穂までは、吊尾根の一部を除いて自分たちでトレースをつけたので、まだ良かったのですが、それ以降特に西尾根は、人が多すぎて、技術的なことはともかく完全にいや気がさしてしまった。

結論として、今後とも一年生を主稜線に連れて行く事に対して、十分な準備と慎重さが必要で、さらに言えばあまり勧められたものではないような気がする。

＜追記＞　その2

今回前穂まで明神西南稜から明神主稜線を通ったわけだが、“西南稜”は、どうも2本あるように思われる。

そそれは、まず'77年度の我部の記録とあまりに様子が違うし、数少ないガイド（岳人403等）でも判然としない。

地図と実際の観察からの結論が、2本あるようだというもので、2万5千の地形図(59年)では、“前明神沢”の南、北に2本分かれていて、V峰台地手前・2,400m付近で合流している。この2本ともが“西南稜”で、'77年が北の方（今回は南の尾根）であったのではないかと思う。また前明神沢の位置も、記録やガイドではいいかげんに書かれているので注意が必要です。

ということで仮に右稜と左稜と言うと、左稜は、普通登られているのはこちらのようで、左右切れた岩稜部が2ケ所程あってfix必要、右稜は、これといった所はないものの、通常では懸垂になるところがあり、合流して、V峰台地に至るということでしょうか。

いずれにしても主稜線も含めて、渉い尾根だと思います。

（記　来村）

大阪大学山岳部現役名簿
（1988年度）

名　　前	住　　所	TEL
紫藤圭介 （リーダー） （理物3(4)）	560 豊中市宮山町3-24-1清明寮A-109	06- 841-3794
	480-01 愛知県丹羽郡扶桑町平塚400	0587-93-3546
東條公資 （基機4(4)）	639-02 奈良県北葛城郡上抜町下牧858-19	07457-6-0993
大倉徹雄 (サブリーダー主務) （工化3(3)）	562 箕面市半町4-19-1	06- 857-4350
蔭山健 （会計） （経 2(2)）	555 大阪市西淀川区姫島1-17-3	06- 474-3562
	573-01 大阪府枚方市藤坂西町4-5-404	0720-51-0759
栃尾豪人	562 箕面市桜井一丁目22番24号喜多重雄様方	0727-22-7091
	671-43 兵庫県宍粟郡一宮町福野347番地	0790-74-0338
渡辺聡	562 箕面市瀬川5-7-16志宏苑七号室	0727-21-0917
	950 新潟市岡山200B-1-3	025-277-3970
室谷進	563 池田市天神1-3-14 第三清広苑206	0727-62-8663
	251 神奈川県藤沢市藤沢5428	0466-81-9859

☆時報No.19関係のOB

今村　義弘　（朝日新聞）〒662　西宮市柳本町3－23
☎0798－72－0427

宮田　俊一　（工　MI）〒563　池田市石橋1－8－22　相沢方
☎0727－62－2880

大西　啓之　（ニチメン）〒270－01 千葉県流山市松ケ丘1－486　ニチメン独身寮
☎（勤務先）03－277－8285　ニチメン畜産課

水川　朋吉　（三井物産）〒271 千葉県松戸市根元松戸寮305号室
☎0473－6473－78

戸叶　　聡　（経　　4）〒563 池田市石橋1－8－22　相沢方
☎0727－62－2880

来村　宗紀　（工　　4）〒562 箕面市如意谷2－3－20　福井方
☎0727－23－9408

藤田　繁雄　（医　　4）〒567 茨木市玉櫛1－3－22
☎0723－36－8470

鈴木　寛道　（ヤマハ）〒432 浜松市神ケ谷町6051　至誠寮327号
☎0534－85－0741　（－0354）

☆山岳部主要連絡先

山田　朝治　（部　　長）〒569 高槻市東城山町16－12
☎0726－88－1256
（勤務先）工学部精密工学科　06－877－5111　ex 4611

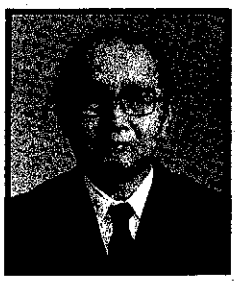
大野　義照　（事務局）〒565 吹田市山田西2丁目18番A13－102
☎06－875－0331
（勤務先）工学部建築工学科　06－877－5111　ex 4966

松尾　敬志　（監　　督）〒563 池田市井口堂509　ウィンディ2615
☎0727－61－2242
（勤務先）歯学部口腔治療科　06－876－5711　ex 2244

森藤　正人　（コーチ）〒580 松原市天美東2－53
☎0723－36－8870
（研究室）基礎工学部　06－844－1151
（下宿先）高橋方　　06－841－0322

Ⅱ　大阪大学山岳会の部

追　悼



水野　祥太郎（みずの・しょうたろう）
1970年　大阪大学山岳会P−29峰第4次遠征隊々長
1982〜1984年　大阪大学山岳会々長
1984年　大阪大学山岳会カラコルム登山実行委員会委員長

1907年神戸市生まれ。1923年府立大阪医科大学（現大阪大学医学部）予科入学、登山とスキーに親しみ、『R.C.C.報告』『ケルン』誌に筆をふるう。

1930年卒業、第I外科に籍をおき、のち整形外科で1948年大阪市立大学教授、1960年大阪大学教授歴任。1970年大阪大学名誉教授、川崎医科大学教授、1972年から同大学長を4期つとめ、医学教育に尽力する。また、海外医療技術協力の方面でも指導的立場にあった。

なお、長年にわたる身体障害者医療及び福祉行政、リハビリテーション医学における多大の貢献に対し、1958年大阪市民文化賞（大阪市）、1968年高木賞（日本肢体不自由者協会）を受賞さる。また、1977年勲三等旭日中授章を叙勲される。

主な著書に『山野スキー術教本』『岩登り術』『砂漠の国の病院で』『整形外科学補講（英文）』『ヒトの足の研究』『医学教育論』『包帯』などがあるほか、多方面の講演活動でも知られている。大阪大学名誉教授。1984年5月10日 心筋梗塞のため逝去。享年77才。

パウル　エルニ氏の便り（スイスの登山家）

水野　祥太郎氏遺稿

ひさしぶりにエルニさんからの便りがとどいた。兄さんのハンス　エルニさんは現在のスイスの代表的な画家として知られていて、日本でも何回か、スイス大使館の手で展覧会が開かれたので、その機械や化学構造模型や方程式、実験室らしい品々が、人体や直線・曲線と入りまじっている絵の構成を、半分はあきれながら眺めた経験をお持ちの人も少なくないと思う。パウルさんの方は、もともと法律家であって、1951年の春、バーゼルに訪ねたときは、チバ製薬の本社の表玄関から正面の階段をあがったすぐ横の部屋を占めておられて、会社での重要な地位にあられることを知った。すこし前にグリンデルワルトでお目にかかった勇敢なスキー家・登山家のイメージからは、いささか遠く、まるで拍子が抜けたような気分で、驚いた方が勝っていた。

このときグリンデルワルトのシュトイリの宿へ転がりこんだのは、ただリヒテンシュタインの宿を一週間で追出されることになって、とっさに思い浮かんだホテルの電話帳から、槇有恒さんゆかりのシュトイリを拾い出して、電話したうえのことであった。どこも予約なしに突然に訪れるのであるから無理をしなければならない。リヒテンシュタインはアメリカ人の予約が延びたのにつけこんだのであり、シュトイリは戦後はじめての日本人というので、いったん断ったのち、とくべつに自分の事務室にベッドを運びこんでの受け入れなのであった。槇さんが1922年にアイガー峰の東尾根の初登はんに成功したのは、私の中学のときで、日本の登山の歴史のうちで画期的な出来事であり、槇さんは

後仙台の名誉市民になられた。そのときの前後、ずっと槇さんの第一ガイドをやっていたのがシュトイリであり、のちのたくさんの日本人が世話になって、有名なのであった。

狭い室の暖房に寝苦しい夜を明かした朝、となりの室のスイス人と一緒になってしゃべりながら朝飯となる。それがエルニ夫妻なのである。話すうちに、お二人がたいへんな登山家であるのが分かってくる。わたしが若い頃の記憶で、この辺の山や谷の名前や地形をよく知っているのに、ただものではないと先方も見てとったのであろう。たいへん打解ける間柄となって今では三十三年も経ってしまったのである。

その日は、眺めをもとめて、ベルナーアルペンの反対側のフィルストへとリフトで登って、ヴェッターホルンの巨大な岩壁を見ていると、思いがけずもブラヴァント氏に話しかけられる。槇さんのアイガー東尾根のとき、勇敢な働きをして、われわれにはお馴染の名である。たいせつな登山器具が落ちかかったのを、身を挺して飛びついて止め、それが登山の成功につながった。仲間の持つザイルによって身体の落下をくい止めてくれると確信しての放れ技であった。ブラヴァント氏は、わたしの遭ったとき（1951年3月）にはベルン州の建設大臣であったのに、完全なスキー姿で、しかも鼻の頭は第三次凍傷のあとの瘢痕が目立っていた。日本人だという声に、雪に埋もれた小屋のなかから、「ヘル松方は元気ですか。ヘル浦松は、」と、バーンホフ・ホテルにいたマチルダ（？）ですと名告っておかみさんが飛び出してきたのにも驚く。松方三郎、浦松佐美太郎の名も登山では有名であり、ともに昭和の名だたる知識人で松本重治さんの名著「上海時代」には、大東亜戦争をくいとめるためにこの人たちが懸命に働いた様子が出てくる。奥さんはニューヨーク生まれで聖ルカの外科を長くつとめられた上中博士の妹さん、父君は高峯譲吉先生の助手としてニューヨークで活動された。シュトイリの娘さんは、すばらしいスキー上手で、夫君のディムツァーシュトイリはチューリッヒの神経外科医であった。

翌日はたいへんな雪になった。貸スキーと貸靴で、クライネ・シャイデックへ電車をかって滑ってみる。エルニさん夫婦にすすめられてであった。氷の、せまいバーン（いわゆるシー・ピステン）は日本には戦後すぐには、まだなかった。戦前、いつも新雪のひろい斜面を、くるくると回って滑るものとしていた私には、スピードに乗って、ポンポンと跳ぶエルニ夫婦のスキーにはまったく驚いてしまった。フィンステラール・ホルンまでスキーをかつぎ上げて、夫婦そろって、あのオベリスクのように尖った頂上から一気に滑り降りたというのを、半分は宜い加減に聞いていたのであったが、本当の話だろうと思うようになる。そういう機会は何年かに一回あるかないかで、しかも夫婦そろってというのは、ほとんど考えられない稀なことであると、自慢していたのであった。

ブラヴァント氏をベルン州政府を訪ねることになる。連邦政府（Bundesamt）の広場は朝8時というのに、名物の市場の半分以上も店をたたんでいた。スイスでは万事が午前7時からはじまる慣しになっている。ある州の学校の先生たちが8時からにくり下げたところが、母親たちからの抗議でたちまちひっこめることになったという。朝8時を過ぎて、家のなかに子供がいては、「市場へも買出しに行けない」というのが、母親たちの言い分であった。ヨーロッパの街の例にならって、市の中心は聖堂が占め、それを巡って広場があり（ミュンスター・プラッツ）、周囲の建物は多くは役所になっている。ものものしい守衛のあいだを抜けて入ったひろい大臣室で、日本の山仲間の誰彼の話に花が咲く。そのうち、わたしの目は、壁にかかった大きい半出来の、しかし、どう見てもすばらしい絵に、ともすれば吸いつけられていく。わたしの目を追ってブラヴァント氏は、ホドラーです、と答えてくれた。倉敷の大原美術館には、スイスの二人の画家の有名な絵がある。セガンティニとホドラー

であって、前者のおとなしい田園風景と、ホドラーの斧をふり上げた労働者の力の躍動とはたいへんに対照的である。大臣室の絵はただまっすぐに立っているだけの男の姿であるが、そのタッチの力づよいこと、下半身がデッサンのままで、しかも縦横に線を残した未完成品であるのに、室に入ったときから圧倒されるかのように感じられたのであった。ホドラーの風景画には一つの癖がある。セガンティニとは反対に、まったく人物も、村なども、人くさいものが入っていない。左右相称も特徴であるのは、何回かの日本での展覧会で見てとった方も多いと思う。

チューリッヒでは足の研究室をたずねる。すこし離れたバルグリスト療養所に、その1922年以来の研究の広い部屋と、器械があった。今ではこのシェルブ教授の研究も古典のなかへ入っているが、当時はなお世界での三大研究の一つなのであった（ニューヨークのエルフトマン、サンフランシスコのインマン）。そののち、約束にしたがってエルニ氏をバーゼルにたずねて、チバ製薬の研究室などくわしく見せてもらう。日本のそれまでの大学では考えられないくらいに整っていたが、一つの化合物にたいして行なうルーティンの実験が四百ちかいのも驚きであった。それを売出すと、すぐに日本に真似られて、と技術者はなげていた。エルニ家のあの素朴なスイス家庭料理とか、大きい街のなかを流れる大河のラインのはげしさも印象に残っているし、鉄道の沿線の牧場（ウイーゼ）のフランケ（側斜面）いっぱいに、戦車よけのコンクリート構造物のならんでいたのも思出ふかい。そう言えば、リヒテンシュタインへの入口ちかくにも、岩蔭が頑丈なトーチカになっていたのを想い出す。小さい二人の子息はアンドレーアスとシュテファーンで、一人はそののち日本に留学してくる。

わたしが戦後いちはやく持ち帰ったスイスの登山具や靴などは、エルニさんに教えられた店で求めたのであった。これが登山史のなかに残るくらいのことになるとは夢にもおもわなかったのであるが。そののち毎年カードを交換しているうちにエルニさんはチバ製薬のディレクターになったのが知られる。日本でならば社長か、それに近い地位ということであろうか。フィリップスとの合同開発のテレビ投影装置（アイドフォール、名古屋大学の手術室にあるはず）や、ガイギー社との合併の記録の本などが送られ、思いがけなくも気球遊びの話が得意のスケッチ入りで送られてもくる。そののち、わたしの方もサボリ、どちらかともなく通信が絶えていたのであった。

ひさしぶりに、他に序でもあって、タイプ七枚くらいの便りを送ったところ、大喜びの手紙とともに、気球や中国や、チベットのことが送られてきたのである。気球は熱気球ではなく、本式の水素によるもので、バーゼルの女性の気球乗りと、エルニさんの妹さんとの三人が乗込み、奥さんとアンドレーアス君とが、地上を車で追いかける。マッターホーンのあるワリスの谷から出て、うまく行けばモンテローザ辺りのアルプス越えでイタリーへというのが、風が変って、北へ向かい、スイスの中心部をフリブールから、ベルナー・アルプスの北をアイガーの壁を眺めてまわり、チューリッヒからボーデン湖を越してドイツへ深く入り、逆に吹きかえされて辛うじて着陸する。朝、9時半から、およそ8時間の奮闘であった。前の晩も、出発のときも、たいへんな労働で、一山を登るくらいのものであったともいう。わたしは久しぶりでドイツ語の紀行文を読んで、あの1930年代の「ケルン」（当時の高級山岳雑誌）の昔を思出したことであった。これにかかわったＲＣＣとケルンの仲間こそ、今日の日本山岳会の関西支部の基礎になったもので、わたしは、はじめの毎号に、よくこういう紀文を訳しつづけたものであった。

中国は桂林から陽朔までの舟下りの、あの独特の突兀たる山水のありさまが、東山流の水墨画とは一味違ったスケッチで描かれているのは面白い。そしてチベットでは、あまり人の記さない漢方の病院のことが描写されていて、それもむしろ肯定的であるのが、チバ製薬という世界の大製薬会社の責

任のある地位の人の筆であるだけに興味がふかい。手紙の文にはチベットの躍進ぶりを称えてさえあったのである。わたしよりは少し若い年頃で、兄ハンスとの血のつながりもあってか、絵がたいへん上手で、いまはバーゼルで画廊をやっているらしい。（59. 2. 13）

水野先生には、この原稿の脱稿後ご病気になられ、59. 5. 10 御逝去されました。貴重な御遺稿となったのであります。

合　掌

（昭和59年阪大第一外科年誌「汲泉」より転載）

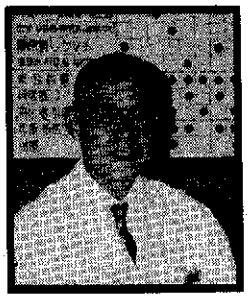
追　　悼

徳　永　篤　司

3月の初め、水野さんより電話があった。「倉敷に講義でやってきて、ついでに診察をうけたら、心電図が悪いといって入院させられているんだ。別に痛くも苦しくもないけれども一寸帰れないのでカラコルムの件をよろしく願います。」いつも淡々とした、むしろ元気そうなこの会話が水野さんとのお別れになった。

約3年前、ＪＡＣ会長に立候補させろという、ある人の依頼で電話したときも、水野さんは冠不全で倉敷に入院しておられ、とてもこの体では無理だよ、最近のＪＡＣ会長は外交官なみの激職だからと残念そうであった。第4次Ｐ29の隊長のとき、血圧が200をオーバーし、とてもブリガンダキどころではないとネパールから言ってこられ、エベレストの後で前立腺の手術をされ、そして白内障の手術もうけられた。老人病の一つを冷静に受けとめながらワープロの講習に通い、最後となった著書の出版（『ヒトの足』59年5月10日発行）に情熱を傾け、そして本年5月10日早朝、永眠された。心筋硬塞の後、肺炎、ひき続き腎障碍の合併によるものであった。倒れたというより、全てを使い果たしたというか、登りきったというか、誰れもがかくありたいと願う晩年であり最後であった。

（ＪＡＣ「山」1984. 8. 20号より転載）



恩地　裕（おんぢ・ゆたか）
1967年～1978年　大阪大学体育会山岳部長

1943年　大阪帝大医学部卒、1954年奈良県立医大教授
1965年　大阪大学医学部麻酔科教授
1978年～　香川医科大副学長

日本に本格的な麻酔を導入した先駆者で、全国初の救命救急センターである阪大病院特殊救急部の初代部長、同病院長などを歴任、香川医大では副学長として設立に尽力。同大学付属病院長。病院長自ら案内カウンターに座り、患者の相談に乗り話題を呼んだ。大阪大学名誉教授。日本救急医学会の生みの親で同学会長などを務めた。1989年従三位勲二等瑞宝章を叙勲される。著書に「麻酔科入門」、「救急ハンドブック」など。

1988年11月28日　肝臓がんのため逝去。享年68才。

恩地裕氏の前穂奥又白側に於ける行動記録及び登攀記

松高山岳部々報より転載

1939年（昭14）7月　（Ⅰ）　前穂東壁右岩稜（山崎、恩地）
1939年（昭14）11月　（Ⅱ）　前穂東壁試登行（山崎、恩地、清水）
1939年（昭14）12月　（Ⅲ）　①　奥又白第二尾根登攀（恩地、浜口）
②　北尾根三峰奥又白側登攀（恩地、折井）

（Ⅰ）前穂東壁右岩稜（山崎・恩地）

7月19日　晴時々雨曇
パーティ　山崎次夫・恩地　裕　　プロテクトパーティ　浜口朝彦・春田和郎

飯と味噌汁、胡瓜を3切れほどの朝食で、腹一杯にならぬから、後髪を引かれる思いで出発準備をした。25本のハーケンをサブルックに入れ、片手にピッケルを持って、さてというところで、丹精して造った偃松の松葉酒で乾杯し「偃松のある所までは行ける」と、8時30分出発した。烈々と反射する雪渓を、本谷、C沢、奥沢と詰めて行った。サネ尾根のケルンの所にプロテクトパーティが居てくれることになり、自分等は右岩稜に取り付き、ガレの上で登攀の用意をした。

ハーケン10本ずつ胸にさし、ワラジ足袋に履き替え、ルックには水と森永乾パン、ハーケンの残りを入れて、腰を上げたのが10時20分だった。非常に脆い所を1ピッチ半ほど上り、正面フェースの、

池より見てピカピカ光る部分の下に来た。中央は全然行けそうにもなかった。右寄りは行けそうだが、途中でかぶり、それを捲いたら北壁へ行ってしまう。出来そうなのは左のリッジだけだ。ただちに、左にトラバースすると、コンタクトラインを挟んで、直角をなす右岩稜の左の側面とB・Cフェースの岩壁は、上に延びてAフェースとなり、天を刺している。異様な観景である。2人とも茫然と、しかし喰い入るような目付きで眺め入った。リッジの上半分は、落ちて来そうなほど出張っている。黒々と光る右岩稜に比して、コンタクトラインも、Cフェースも、白く脆そうな荒廃した感じがする。

ただちにリッジを登り出した。小さく右に出たり左に出たり、楽な登りだが、どうしても右の正面へ大きく乗り出して行けない。ひどい傾斜で手懸りも足懸りも、ハーケンの隙さえない。1ピッチ、2ピッチとリッジの上を軽々と進む。途中ホールドにするため、割れ目に指を入れようとして、中に居る蝙蝠(こうもり)に危く手を咬まれそうになった。翼手を畳んでも十糎ほどの丈のある大きなので、小さい鋭い歯をかちかちいわせ、悪魔のようだった。岩場で蝙蝠を見たのはこれが初めてだ。始めはこんな楽な気持だった。4ピッチ目にすでに全長の半分は来た。そしていよいよかぶって、二進も三進も行かなくなった。下のプロテクトパーティは巻いて来たガスで全然見えぬし、時刻を聞くことも出来ぬから、非常に不安な気持になってきた。右手の正面は相変らず手もつけられぬ。リッジ沿いに行こうとしたが、ハーケンの割れ目が無くどうしても行けぬ。

再三当ったがついに引き返し、左へ1ピッチトラバースし始めた。今は正面への望みは捨てたが、せめて左の側面を行きたかった。このまま左へ行けばどうしてもコンタクトへ出る。残念だが致し方なく、コンタクトへ入った。ガスは犇々身に逼って、小さい雨粒がポツポツ両方の腕に当り、暗憺たる気持だった。砂を被った岩角の感覚が、今にも落石の雨を降らしそうに思えたが、1ピッチまた進んだ。そこでジッヘルを頼んで、ハーケンを打ちながら、いよいよあの、又白の池から見てコンタクトの中で一番白く細くなっている部分へ入って行った。全く脆くて悪い。2回、3回と当ったがどうしても身動きがとれない。ハーケンが何本打打っても動く。暗憺たるガス、落石が降ってきそうな不安で、苛立たしい、何ともいえぬ気持だった。正面を逃げ、リッジを逃げ、左の側面を逃げて、コンタクトでこんな悲惨な目に遭うとは夢にも思わなかった。左のCフェースへ少し捲けば、楽に行けることは分っているが、もうこれ以上逃げるなど、思いも及ばなかった。利かぬと分り切ったハーケンをただホールドとしてだけ用い、じりじりとにじり上って行った。ホールドがボロボロして一番困った。20米ほど上ったが良い所に出ず、ついに6個のカラビナを全部使ってしまった。ザイルが非常に重いから、口で咥えて引張り、それからおもむろに登るという方法で、やっとさきの目鼻のつく所へ来て、ほっとした。カラビナがないからゼルプストジッヘルを岩の突起に捲き付け、一寸ほどの岩角を支点にしてジッヘルした。カラビナ6個を通っているから、下からの衝撃にも平気なかわりに、ザイルの弛をなくすため一寸ずつ引張るのも一苦労だった。

それからまた1ピッチ、相当悪い所を進んで、ひょっと見ると第一テラスだった。非常に嬉しかった。場所も場所だし、天気も天気だったので、実に陰惨な苦闘だった。ガスの間に、右岩稜の左リッジの頭が見えたが、見るのも苦しいくらいにかぶっていた。リッジを行かなくて良かったと胸を撫でた。プロテクトパーティに時間を聞くと、意外にもすでに2時25分だったので、急に腹が空くように思えた。ただちに左へトラバースしてテラスの左端へ出て、偃松を見て微苦笑を洩らした。ガスの間に今朝松葉酒を飲んだテントが見えた。

昼食の乾パンを水で流し込んで、第二テラスへ行きAフェースを通って前穂高の頂上へ3時45に着いた。いつもなら緊張するAフェースも、畳の上を行く思いがした。頂上には、今朝テントで別れた

前穂頂上
第二峰
第三峰
第四峰
第二テラス
第一テラス
V字状雪渓
第一尾根
A沢
第二尾根
B沢
C沢
ザネ尾根
奥又尾根
奥又白本谷
S
N
凡例
A 壁
B 壁
C 壁
D 壁
E 右岩稜
F 始めの滝
G (Bルンゼ)
H 終りの滝

前穂奥又白側スケッチ

連中が、いずれ劣らぬ達者な顔を並べていた。武装を解いてみると、ハーケンは12本用いたことになっていた。も一度楽しく乾パンなど嚙った。

この悲惨な敗戦行は、しいて題を付ければ、東壁の真中を行く一つのバリエーションの完成ともいえる。というのはAフェースも、Bフェースも中央を登ってあるのだから、今度のルートを繋げば、本当に幾何学的に東壁の真中を行ったようなことになる。（恩地裕記）

（Ⅱ）前穂東壁試登行

11月24日；起床1時、池（前9:00）－第二尾根頂上（10:20）－第二テラス（後0:15）－A壁取付（後0:30）－前穂頂上（後3:15～4:00）－池

11月25日；午前4時雪、6時より晴、午後1時頃より吹雪
起床（前2:00）－テント（7:00）－三峰取付点（10:30）－北壁取付（11:00）－ビバーク地点（後5:00）

午前2時目覚し時計に起こされ寝呆け眼で天気と思い用意する。いざ出発と出て見ると全くの吹雪で、がっかりしてアイゼンを付けたまま寝込む。7時再び目を覚ますと快晴なのでただちに出発。本谷は先日の雪崩でつるつるしている。山崎20米ほどスリップし、どうも調子が悪いと言い出した。B沢の滝は氷に覆われ第二尾根から氷片が落ちてくるので登り悪く、ザイルを出したりして手間取った。滝から上は踝が痛くなるほど雪が緊まり、雪面は凍ってメラメラと光っている。10時半三峰下の岩蔭に休み昼食。相当時間も遅いし、行くか、行かぬか、相談したが、止めねばならぬような理由は何もなかった。万一吹雪かれても、その時はゆっくりビバークして行けば良い、おそくとも明日の昼までに帰れるだろう。吹雪けばせいぜい零下5度だということは先日来寒暖計の教えるところだ。11時北壁に取り付いた。恩地－（40米）－清水－（30米）－山崎の順にザイルは2本用いた。3人がこんなに長々連なって尺取虫のような進み方をしたから時間が異状に掛かったのだが、そうかといって2人にして清水1人テントに残すのも酷な気がするし、3人なら後顧の憂いなく落着いて登れると判断した。先日の失敗により夏通りのルートで一途に登った。夏秋に打ったハーケンが氷の下に赤く錆びていたが全部使えた。岩には一面に薄くて硬い氷が付いて岩角は手懸りにならないのでピッケルを突きさしたり、雪や氷を刻んで作ったりした。例のかぶっているチムニー状の所は四苦八苦で後の2人に足を押えてもらったり、突き上げてもらったりして右の方へザイル横断してアイスハーケンを手懸りに打って押し上った。最後の山崎がここで何個かのカラビナを外して行った。終りのカラビナを外した拍子にザイルに振られスリップして、もう下から押し上げる人もないのでつるつるの氷に何度かスリップを繰り返した。そのうちに雪も降って来るし、なさけなくなったがここさえ越せばという気があるので止める気持になれず、非常な無理をしてついに山崎がここを乗り切った時はすでに濃密な吹雪が幕を張ったように降りこめていた。夏は小さいテラス状になっている所の岩蔭に着きビバークすることにした。

同夜（25日午後5時－26日午前7時）

後の岩に利かぬハーケンを4本ほど打ち確保しザイル、リュック等を敷き腰を下ろす。疲れてはいないが、場所が悪いし吹雪くのでビバークの用意も一苦労だ。底辺2尺5寸、高さ1尺5寸ほどの三角形の平面を無理して造りツェルトをかぶる。清水を真中に山崎、恩地が左右に腰を掛けるのだが、山崎はハミ出て腰を入れる場所もなくしゃがんだような恰好だし、清水も2人に足を挾まれ窮屈そう

だ。いくらビバークとはいえ、あまりひどい。パン、紅茶、味醂干の夕食をした。気温は零下５度位に思えた。腰、尻、足、背中と濡れてぞくぞくする。皆眠るとハーケンが頼りないから落ちそうな気がするので交替で１人起きていることにした。ツェルトと岩の間に雪が溜り、段々押し出されて12時までに２回ほど除雪したが、３人一度に動けない。ひどい所だから思うようにいかない。12時過ぎると山崎、清水熟睡してしまい、恩地は独り、知っているだけの歌を唄って起きていた。時々心配になってそっと２人の心臓のあたりを触ってみたり、清水の足を擦ったりした。眠い一方で除雪する気にもならず明方を待つ。一刻千秋の思いであった。

11月26日　吹雪

ビバーク地点出発（前7:00）－第２テラス（後2:00）－Ｖ字状雪渓、Ａ沢を経て－テント帰着（8:30）

６時半頃より仄々として来たので待ち兼ねて、甘納豆、味醂干、パン少々の朝食を摂った。パンは昨夜一本落したらしく、その上残ったのも全くリュックの底でメチャメチャに潰れてしまい、食べられる物はこれで終りになった。一晩３人を結び付けたハーケンが指で苦もなく抜けたのには胆を冷やした。新雪約70糎。ビバーク地点より夏通り半ピッチ水平にトラバースしてＢリッジに取り付いた（12年３月商大パーティは我々のビバーク地点より真上に登り第２テラスにでられたようです――『針葉樹』10号による）。ここは右岩稜の頂点に当り下はすっぽりと切り立っている。昨日から手懸り、足懸りにピッケルを振い、そのうえハンマーまで振り廻すのですっかり腕が疲れ、もう３振りと続けられず非常に時間を喰った。Ｂリッジは思ったより悪く、そのうえ、いちいち厚い新雪層を払いのけて行くのでなかなかはかどらない。一寸ピッチ半でオーバーハングになったチムニーに着いた。アイゼンを着けたままショルダーアップしてもらってようよう乗り切った。一面に昼の映画館ほど薄暗くどの位時間がたっているのかピンとこない。チムニーの上は急な雪の斜面で、何個ものカラビナを通ったザイルが少しずつ重く延びて行くたびに下から「もうテラスが、見えるか」と聞かれ、毎度毎度「まだテラスどころか、これから痛沈そうだぞ」と答えるのに気が引けるくらいだ。ついに第２テラスに着くと意外に午後２時であった。雪はますます強く濃く新雪は腰に及び10mも離れると相手の顔も見えない。午前９時頃だと思っていたのが午後２時なので「これはしっかりしないととんだことになるぞ」と３人とも身の締まる思いになった。ここから山崎がラッセルして行った。テラスの真中で足下から新雪層がスッポリと崩れ落ち、清水スリップしキイキイとピッケルを軋らせつつテラスの下端でやっと止まった時は心臓が凍るかと思った。その時恩地は急いで確保の綱をにぎった拍子に、今毛皮防寒手袋にかえたばかりで持っていた豚皮の登攀用手袋を片方落してしまった。それは清水の身代りのようにスッと滑ってテラスの下端から闇に消えた。Ｖ字状雪渓は下を廻って安全にトラバースしてＡ沢に入りアンザイレンしたまま泳ぐように下る。首を没する雪で、転んだら頭を下に沈んで行き独りではなかなか立ち上れない。踏替点より全く暗くなり、視界は周り20m足らずだ。傾斜が緩くなるにつれラッセル段々重く一歩一歩が苦痛になってきた。５mおきくらいにラッセルを代りながら下って行った。奥又尾根を忠実に伝って行ったが時間があまり掛かるので（今にして思えば疲れた気のせいであったが）天幕を知らずに越して中又白谷に降りかけているのでないかと思われてきた。今慌てたら大変なことになると思いツェルトを出して一休みした。腰を下ろすと朝から食物のないのと昨夜よりの疲労一時に出てリュックを開けるのも面倒なくらいになった。体が段々冷えてきて眠りそうなので、今日ビバークするとなると悲惨だと直覚し無理にも元気を出そうとした。清水が煙草に火を点けようとしたが濡れて点かない。そうこうしているうちに体力より気力が回復して思うところ

を貫こうとする気が湧いてきた。立ち上って再び重いラッセルを繰り返していると清水が極度に疲れて、俺はここで待っているなどと言い出したが、無理に激励して行くとラッセルも代って出来るほど元気を出してくれた。道は種々考えた結果、間違うはずがないということになり、そのまま進んだ。急な下りがあったので恐る恐る下りてみると、そこは出発した時とは似ても付かない又白の池であった。雪の上に白い天幕が一尺ほど出ていた。拷問からでものがれるような気持で夢中で飛び込んだ（午後８時半頃）。長い間結んだザイルも凍り付き、何の感慨もなく大苦労で解いた。蝋燭を点じ、動かぬ手足を無理に動かしやっとの思いでアイゼン、靴、オーバーシュを脱いだ。鮭罐を開けて食い次のよく乾いた一服でやっと生きかえったようになった。ろくに食べず、シュラフにもぐり、一生懸命手指を擦っているうちに寝込んでしまった。

11月28日　雪　沈澱

午前７時起床、用意して12時下山に掛かったが顔を埋めるラッセルで、体も疲れているし、とうてい今日中に徳沢に行けないから中止した。３人の指先には水泡が出来、恩地の掌は全指にわたり激痛を伴った。二人に炊事等一切まかせて「痛い、痛い」と唸(うな)っていた。

11月28日　雪　沈澱　雪崩に遭遇

午前７時半起床。ルンゼを下ることは前日にも増して危険なことはよくわかっているが、下の人達の心配を考えれば下らざるを得ない気持になった。８時より下山の用意に掛かる。山崎は天幕の前に穴を掘り用便中で、清水は天幕の内で片付けていると突然突風のような気配とともにドンという鈍い音がして、雪崩押し寄せ天幕の物干竿のような支柱がメリメリ折れて一時に真暗になった。岩場で手懸りが抜けて落ちる瞬間の生命に危険を感じる時のあのいやな気分に襲われた。後になってもこの時の暗黒の恐怖が頭にコビリ付いて取れなかった。すぐ山崎のことを思い出し、潰されそうになった天幕を一心に肩で支え「山崎！　山崎！」と連呼しながらピッケルを振って天幕の天井を破り穴を掘り始めた。粉雪で硬くはないが息が切れて非常に深い雪の底のような気がする。80㎝ほど斜め上に掘ると外が見えた。「おい山崎！」と飛び出すと一面のデブリの中に山崎も片手と首だけ出しても掻いている。二人顔を見合せて思わず笑ってしまった。この間５分も経っていないくらいであろう。雪の下に捻られている山崎の体を踏まぬように掘り出すと、まだ済んでいなかったとみえてあまりに寒そうで見る目も辛かった。全くほうほうの態で天幕の入口を除雪し、３人尻だけ押し込んで顔見合せ意気消沈してしまった。誰でも「死なないのなら一度くらい雪崩にも遭ってみたい」と一応思うが、この場合は助かったとはいいながら、松高ルンゼを下ることの危険性を如実に見せつけられたようで全く消耗された。これでは成らぬ、歌でも唄って元気を取り戻そうと思ったら、自然「ジプシーの月」が出てきた。鮭罐の御馳走をしたり、それに蝋燭で雪を溶かしたり、煙草を喫ったりしていると気分も落着いてきて、この暴威を振って達ばかりを目の仇にする自然に対し敵愾心が湧いてきた。何かと喰い下って勝ち抜いてやろうと思ってきた。ウィンパー天幕を引っ張り出し、比較的安全と思われる池の東北隅に建て生活必需品も移した。雪崩で池の水が雪の上に浸み出ている。この雪崩は先日来の積雪によりＡ沢から中又白谷にかけて押し出した主流の飛沫にも相当するものであろう。

11月30日　雪　沈澱

昨日の雪崩でルンゼの雪崩発生の確実性をすっかり見せ付けられ下る気にもなれぬ。もう明日くらい晴れるに相違ない、早まって迷惑掛けるより一日待とうと思う。座っていると非常な焦躁に襲われる。

12月１日　雪　沈澱

宝の木までラッセルし、昨日のような気持になり下山中止する。

12月2日　雪　沈澱

昨日除雪を怠ったので支柱が一本折れたが少し短くなるだけで済んだ。天幕も凸凹になりシュラフまで濡れ、非常に住みにくい。無為焦躁のうちに送るこのアニマルライフが全く耐え難く思えてくる。

12月3日　雪午後5時より晴　沈澱

今日こそ下りようとラッセルしてみるが首を没するほどで、先日の雪崩の生々しい印象と結び付きどうにも下る気にならぬ。天幕の除雪をして中に座り、私達の帰る予定の日から今日までの日数を色々と見積ってみたが、どう遅くとも明日は必ず下の者が心配して登って来るに違いない。もっと真実に下のことを思えば昨日にも、一昨日にも私達は危険を冒しても下らねばならなかったのだ、しかし未熟な私達は先日の雪崩のため、この未練を振り切り得なかったのだ、明日こそはいかに危険な状態でも、皆が危険なルンゼの下に達する前に私達が下ってしまわねばならない。冗談ではなく「もし私達がルンゼの中で雪崩にやられても、この気持だけはわかってもらえるように遺書を書いておこう」と相談した。この重苦しい気持にさしうつ向いて暗い、濡れた天幕の内に座っていた。今日の午後まででで丸八日降り続いたことになる。夕食の頃より強い風が吹き出しどうしても晴れていそうな気がするので、幸運を疑うようにそっと首を出すと満天の星だ。突き詰めた悲壮な気持に成っていただけに、この素晴らしい真実をしばらくは信じ得ないほどであった。3人とも靴も履かず呆然と立ちつくした。そこには8日間に見違えるばかり美しく冬化粧した奥又白の岩壁が、私達が胸に描いて一心に憧れ飛び込んできたそのままの姿で聳えていた。奥又白にはこれほど散々に虐めつけられていながら、やはりこの素晴らしさの前には文句がなくなってしまう。私達と岩壁との間には一点の雲もないほど澄んでいたが、その空間に強引な風の神が力一杯歓喜の乱舞をしているように感じた。明日下から来るであろう救援隊のことももう安心になった。友情と登山を二つながら完成させてくれてこの星空を見て私達の感慨は尽くるところを知らない。　（恩地　裕記）

（Ⅲ）

①　奥又白第二尾根登攀

テント（前7:00）－取付（9:30）－第二尾根コル（12:00）－前穂頂上（後1:10）－テント（2:00）

午前7時出発、テント前の奥又尾根を踝くらいのラッセルで登り、その上部で本沢にトラバースし、本沢より第二尾根の中ほどに深く入り込んで上部に小さいコルをつくっている雪渓をつめて行く。上と下から照らされて酷く暑い。途中にかかった雪庇が人間の顔のように見えるのを写真に撮ったりして悠々と9時半そのコルに着く。一休みしてからアンザイレンして登り出す。右手には東壁のC壁、右岩稜がそそり立っている。初めの1ピッチは岩であったが雪が少ないので大したこともなく、後はリッジ沿いに急で硬い雪にステップを切って登り、約3ピッチで丁度12時V字状雪渓に続くコルに着いた。もう折井、清水が到着して待っているのでただちにバトンならぬザイルを渡して昼食にする。折井、清水はやがてV字状雪渓にステップを切り出した。私達2人は食後、徳沢から登って来た1年パーティの後を追って前穂に登り東大の先輩のクリスマス・プレゼントだという怪しげな飴を貰って喜んだ。12月の前穂頂上は私達の憧れの所であったが、このように賑わしく立とうとは思いもよらなかった。岳川からの風が冷たいので頂上を後にし、A沢を6人連続して尻滑りで下る。テントに到着

して、今頃A壁でハーケンでも打っているのだろうと、清水、折井に「ヤホー」を掛けてから1年パーティと共に雪崩にやられた倉庫天幕の発掘を開始する。先ず埋没地点らしい所を歩いて位置を決め交代で広さ1坪半深さ6尺位に掘り下げたが、片鱗も現れずがっくりしてきた。しかし2時間の作業の後1年パーティがそろそろ下る用意をし始めた時やっと張り綱が見つかり歓声を挙げた。「明日また上ってくる」と言って下る1年パーティを名残り惜しく見送った後、2人でくたくたになるまで掘り続ける。全くペシャンコになった天幕を破ると、中には雪さえ入っていず、地下室の空気を思わせる臭いがする。早速明日2パーティ編成するのに是非必要なザイル、ハーケン、カラビナ、ハンマーや鮭の切身等旨そうなものを物色して5時発掘を終え、テントに入る。清水、折井が帰る前に飯を作っておこうと炊事を始めていると、意外に早く元気よく帰って来た。　　（恩地　裕記）

②　北尾根三峰奥又白側登攀

テント発（前8:00）－取付（11:00）－三峰頂上（後6:00）－前穂頂上（7:30）－テント着（8:30）

日のカンカン照る中を4人揃って出発した。奥又尾根について登りその上部から本谷にトラバースしてC沢に入り四峰への浜口、清水と別れた。三峰の取付のケルンの所で休み、パンを噛りつつ、取り巻く岩壁を見上げていると「ついにここまで来たか」との感慨が深い。アンザイレンして取り付き真中の雪の着いている所をつめて行く。この頃より日はすでに前穂にかくれ、岩や雪を摑んでいると11月の凍傷のため指先が痛み出したので、主に折井に先登してもらう。リッジに沿って忠実に行くと確保にも良い岩があるのでハーケンを打って登るほど困難な所はなかったが、決して楽な登攀ではなく息をつめては岩の間の堅雪に手懸り足懸りを刻んで行く。2時半頃ガスが掛かり、すぐ雪もちらついてきた。しかしもう相当上まで登ったのでこちらの心配はなかったが、四峰の連中のことがしきりに案ぜられてきた。やがて日が暮れてしまった。頂上の20mほど下で、先登していた折井は、手懸りの岩が抜けてアッと思う間に宙に1回転して堅雪の上に落ち、さらに3mほど滑り確保のザイルでぐっと止まった。その時頭を下にして滑っていたのでザイルでヤッケ、上衣、シャツがまくれ上って臍まで雪をつめていた。さすが元気な折井も消耗してしまう。これより1ピッチで頂上に着いた。この頃すでに雪も止み皓々たる満月で物凄い風だ、2人共縮み上ったが周りの景色の壮麗さに目の覚めたような思いであった。テルモスを出し、甘納豆を食べてから北尾根を前穂へと登る。真白に照らし出された涸沢、黒々と聳え立つ奥穂、行手の前穂へのルートは氷がピカピカと銀鱗のように光っていた。ザイルは2人の間でビュンビュン鳴っている。この風に抗して岩と氷雪の壮麗に向って歌でも歌ってやりたいような気がした。二峰のキレットは飛ばされぬようにしがみついて下り、やがて前穂の上に着いた。私には折井としたこの登攀が今までで一番美しい登攀であった。頂上を後にA沢に入れば、風は全然なく深海のような静けさであった。途中でちょっと吹雪かれたから4峰の連中はどうしているかと心配して、テントに着いたがやがて本谷から「ヤッホ」が聞こえ、2人共安心した。

折井を失って以来、思い出はいつもこの時の不思議なほど壮麗であった景色と結び付いて脳裡に浮び上ってくる。そして「折井よ、あの時はあんなに美しかったではないか。君は引っくり返って臍まで雪をつめていたではないか。」と奥又白の写真に向って呼びかけずにいられない。（恩地　裕記）

恩地　裕先生を偲ぶ

大工原　　恭（歯38）

私が恩地先生にお目にかかったのは、1967（昭42）年の春、篠田軍治先生が阪大を停年退官されるに際し、後任の山岳部長を恩地先生にお願いしたから中之島にいる者は下働きをするようにとのお話があり、医学部病院内にあった恩地先生のお部屋にうかがったのが最初である。先生は、奈良医大から麻酔学講座の初代教授として阪大にお帰りになって1～2年目の頃であり、御多忙の時であったと思うが、「篠田先生から頼まれては仕方がない」とおっしゃりながらも、満更迷惑ではないというお顔付であった。しばらくお話をうかがっている内に、根っからの山好きであることが私にも分かった。それから時折先生のお部屋にうかがうようになった。教室員に対して大変厳しい先生であることは、当時の歯学部にも聞こえていたが、山の用件が出来て電話で御都合を伺うと、いつもすぐに時間を作って下さり、私の話を聞いて、手短にかつ的確な判断をして下さった。当時の麻酔科の教室員には、何故歯学部の若僧が教授室に大きな顔をして出入り出来るのか、不思議がっていた人も多かったはずである。

1969（昭44）年のポストモンスーン期に第3次P－29遠征隊を出すことが決まり、その準備が始まった年頭に、田中喜樹君達のパーティが白馬岳付近で消息を絶つという事件が発生して、先生から電話を受けた私が教授室にかけつけた頃には、新聞記者も先生のお部屋にどっと押しかけて来た。先生は、「天気が悪いから予定より下山が遅れているだけで、今頃は白馬頂上の小屋でのんびり餅でも食っていますよ。山では良くあることで、こちらから捜索隊を出す予定は今のところありません。」などと記者達にはにこやかに話され、「現地の警察と連絡をとる恩地部長」の写真を撮りたいから、電話で話をするまねをしてくれという柄の悪い記者も適当にあしらって御引取り願った直後、総長、学生部長、長野県警、ヘリコプター会社と矢継ぎ速やに電話され、翌朝天気が良ければ捜索ヘリコプターを飛ばす話をつけてしまわれた。私はそばでその手際の良さにたゞア然としているばかりであった。その夜は結局何人かが先生のお部屋に泊まることになり、整然としていた教授室は合宿のテント場のような有様になってしまったが、翌朝天候が回復し、小蓮華岳付近を下山して来る田中君達のパーティをヘリコプターが発見して、この件は先生の予言通りの結果で落着した。その後何日かして、長野県警や白馬村へ御礼に出かけられた先生は、帰って来られると「遭難発生時に即座に動けるよう山岳部長には手元準備金が必要だから考えておくように」と私におっしゃった。もっとも、私にはそんな資金を集める能力もなくそのままにしておいたところ、先生は時々寄付金や臨時収入があると、私に渡して下さるようになり、それを貯めたものが、今も山田部長のお手元に残っているはずである。もっとも恩地先生は、この金のあることがＯＢ連に知れるとヒマラヤ遠征に食われてしまうかも知れんから、黙っておくようにと言われたのだが、今はもう恩地先生の御遺志として公開しても良いと思うのであえて記した。

お金のことと言えば、先生にはその後のＰ－29遠征隊（1969年の第3次と翌年の第4次）の資金集めにも全面的な御協力をいただいた。特に第3次を組織している頃は、折からの学園紛争で学内はもとより世間全体が騒然としている時期であり、先生は普段以上にお忙しかったに相違ない。第4次の時には紛争も下火になっていたが、今度は隊長を引き受けられた故水野祥太郎先生からの圧力と、「これでは隊は出せません」との会計面を担当した私からの板ばさみで御苦労をおかけしてしまった。最終的には、この2つの隊は赤字を出すこともなく、報告書も出すことが出来た。恩地先生のおかげ

である。

話は前後するが、第３次の遠征隊を組織している頃、現役を隊員に加えるよう主張されたのは先生であった。当時現役をヒマラヤに行せるについてはＯＢの間でも異論があったようだが、現役とＯＢが一体となって事業を進めるには、現役が隊員に加わっていなければうまく行かないとの先生の御意見で、田中、甲田の両君が隊員に入った。そしてこの方式は、その後のすべての遠征隊に踏襲されている。遠征隊のことでもう１つ記しておかねばならないことは、第４次隊（1970（昭50）年）の渡部洋君とハクバ・ツェリンの事故の時のことである。現地から第一報が入って以来、教授室とその隣の研究室を留守隊本部として使わせて下さり、電話も２本確保して、外務省、当時カトマンズにおられた水野隊長（カトマンズに事務所を持っていた日商岩井の連絡網を使わせていただいた）、御遺族はもとより、学内外各方面への連絡、保険会社との折衝からマスコミへの説明まで、右往左往する私達を指揮してテキパキと処置を進めて下さったことは忘れることが出来ない。事故そのものは大変悲しい出来事であったが、事後処理がきちんとしていたと後であちこちからお褒めのお言葉をいただいたのは、ひとえに故水野、恩地両先生のおかげである。

もちろん遠征隊のことばかりではない。現役の合宿計画、報告書にはきちんと目を通され、いつも「もっと分かり易く書くように」とのお小言と共に、適切な御助言をいただいた。その他新人歓迎会などにも努めて参加されたが、その後宝塚のお宅にまで押しかけて先生を酔いつぶれさせ、奥様にまで御迷惑をおかけした悪童も多いはずである。また私が単に大学にいるからという理由で柄にもない監督をお引受けした約２年間と、先生が香川医大に移られることが内定してお忙しくなり、私が部長代理をお引受けした阪大最後の１年間は、全面的に私をバックアップして下さった。この間、私はあちこちで「恩地先生の御意見」なるものをふりまわし、「虎の威を借りる孤」を地でいったため、先生の所には苦情が殺到したはずだが、先生は一言も私にはもらされなかった。感謝にたえない。

こうしてみると、先生に山岳部長をお引受けいただいていた10余年間、結局先生には一度も表に立っていただくことなく、裏方の仕事ばかりしていただいている。これは、先生が山への情熱を失っておられなかったことを物語るものであろう。このことは、Ｐ－29の報告書（1975年刊）のあとがきに、先生が「それまでにしてなぜ山に登るのであろうか。 30年の間はまだそのままである」と記しておられることでもうかがえる。第４次のＰ－29遠征隊を準備している頃一度、先生に隊長を引受けていただけないだろうかとお話したことがあるが、「今は君、無理だよ」とおっしゃり、水野先生を口説く手伝いをして下さった。その時のことも含めて、一度も先生を山へお誘い出来なかったことが今更ながら悔やまれる。

香川医大へ副学長として赴任される先生の歓送会を在阪のＯＢを中心に行ったのは、1979.(昭54)年２月24日のことである。私の手元に残っている記録によると、当日は篠田、山田両先生を初めとして41名のＯＢ、現役が集まっており、先生の御人徳と山岳部、山岳会への御業績が偲ばれる。また、この日が先生のお元気なお姿を見る最後となった人も多いと思う。私も先生と時期を同じくして鹿児島に移り、その後先生にはお目にかかっていない。高松から２回程長いお手紙をいただき、また３年程前にお電話をいただいたのが先生との会話の最後となってしまった。心から御冥福をお祈りすると共に、もしいつかあの世でお会いすることが出来れば、今度は少し強引にでも山へお誘いしたいと思っている。

松久　博君を偲んで

S 26 M同期卒　徳　永　篤　司

あれは昭和62年の夏頃であった。私の病院の婦長が松久君の様子がたゞごとではないと云って来た。彼が私の病院に週1～2回定期的に来てくれる様になったのは、同級生として学生時代よりちっとも臨床に身を入れたことのない私のことをよく知っていて」頼んだ訳でもないのに見るに見かねて10年以上、胃や肺を始め私の専門である外科領域のレントゲン像迄も再チェックし、心電図やカルテを調べなおし、重症の入院患者を廻診してくれていたのである。松久君の来てくれている時は当然の事の様に外出していたから、私が彼とゆっくり会って話をするのは、数年前元気なときの篠田先生が検診に来られる年1～2回のそのとき位であった。その彼が真黄色で痩せ細り、息をはずませ乍らそれでもきちんと定期的にやって来て仕事をして帰るのを婦長がみかねて私に注進したのである。彼の十三の診療所でじっくりと話し合ったが、入院や手術をしないという彼を説得するには、相手が私よりも専門家であっただけにむづかしかった。「専門の病気のことを自分で決めはったんですから、私は主人の云う様にして上げるより他に仕方がありません」と奥さんは云われた。その2年位前、口腔粘膜に出来た腫瘍を彼が卵黄と粉ミルクだけという断食療法に近い一年間で切りぬけたという話を聞かされたことがあった。試験切除も何らの病理検査もせずに癌を治したとする彼をなじる私に、彼は「そんなことをすると転移してしまうやないか」と答えるだけであった。今度の黄疸も鍼(はり)や減食療法で乗り越えようという彼の意志は堅かった。電気鍼や漢方薬の多い彼の診療所は、長年に亘る彼の経験より西洋医学の領域の行き詰まりを感じさせるものであった。

しかし、最後には折れて私の病院に入院してくれた。暑いお盆の頃であった。そして膵腫瘍による閉塞性黄疸の診断が確定され、彼の出身である国立大阪病院での手術も同意してくれた。開腹所見は膵、胃の同時多発性腫瘍で、何れが原発かも不明の状態であり、外科的には試験開腹かバイパスを行うのが常識であったけれども、何もしなければ術后に本人が悩むといけないので多少の危険を冒してでも取れるだけ取る様にという私の主張に従い8時間に亘る手術が行われた。しかし病勢の悪化は誰れの目にも明らかであった。翌昭和63年の初めに再入院した彼は、背部の激痛に悩まされつづけ、モルヒネの助けがなければ休めなくなっていた。脊髄への転移が始まったのである。3月初めのある日病室に見舞ったとき、彼はすっかり痩せ細った背中に息子の手で鍼を打って貰っていた。「何か出来ることが……」と云う私に「阿部院長と福井副院長に君からよくお礼を云っておいて欲しい」と、そして「頑張っているけど、……もうしんどいわ」とつぶやいてから少し笑った。その2日后の3月4日夕方私は彼の訃報を聞いた。私には彼がまるで私の訪れるのを待ってくれていたかの様に思われてならなかった。

松久　博君との出合いは医学部2年生の頃であった。正月の鹿島槍北壁を了って大学に顔を出した私の許にやって来て一緒に山登りをしようと申し出てくれた。昭和24年全学統一山岳部としての最初の合宿であった厳冬期の白馬五稜や鹿島槍八方の雪洞往復や富士山、そして卒業試験に手こづって入

山の遅れた私を待って一緒に入った後立山逆縦走のなだれの冷沢と、何時も影の如く私をサポートしてくれ、仲間達の尊敬と信頼を集めていた。

彼は大正13年9月23日、大阪市天王寺区の古い和紙問屋の5人の子供の次男として生まれ、今宮中学より松江高校に進学した。大山合宿中に豪雪に閉じ込められ留年したと云う話をずっと后に吹雪のテントで聞いたことがあった。阪大卒業後は第1内科に入局し、「肝臓代謝に関する研究」で学位を取得、朝日新聞診療所、和歌山医大レントゲン科、国立大学病院消化器科を経て昭和45年頃十三で開業した。開業后の彼は専ら磯釣りにこり、毎週末になると伊豆へ最新鋭の竿をもって出掛けるのが唯一のたのしみであったという。彼の死后私の病院へ移って来た患者で彼の親身で真摯(しんし)な診療態度を今だに懐しく私に話してくれる人は多い。

行年65才、もう少し早く病気に気付いていたとしても、あのとき手術をしなかったとしても、何れにしてもテントの脇で黙ってにこにこしていた彼はもう帰っては来ない。

昭和62年度　行事報告

昭和６２年度　総会報告

日　時：昭和６３年５月６日
場　所：関西文化サロン　阪急グランドビル19階
出席者：山田朝治部長、徳永篤司会長、遠藤常忠（工電気１３）、四宮誠祐（工船２８）
田島　汎（経２８）、山本光二（法２９）、坪井圭之助（医３１）、岡田博司（法３３）
広瀬貞雄（工溶３６）、佐藤　茂（文３６）、打出英樹（工構３７）
五百蔵弘典（理化３７）、高田邦雄（経４０）、石浜高明（工船４１）
大野義照（工構４２）、甲田吉彦（基４４）、明神　知（基制５３）、松尾敬志（歯５５）
越智栄次郎（経５８）、今村義弘（工機６１）、大倉徹雄（現役）
以上　２１名

議　題：

一、山岳会会計報告
資料１の会計報告が承認された。
残高の５８万円を時報の印刷・発送費に充当することが認められた。

一、行事報告
栂の木寮例会、栂の木寮２５周年記念行事、東京支部懇親会ならびに篠田先生お見舞いの報告がなされた。

一、現役山岳部活動報告
大倉徹雄サブリーダーより活動報告ならびに６３年度の山行計画が説明された。

一、昭和６３年度行事予定
栂の木寮例会を８月２０日の土曜日と決定。
東京支部懇親会および総会を年度内に行うこととした。

一、その他
従来、現役山岳部の活動報告書であった時報に、ＯＢ会誌の役割も持たせ、隔年に発刊することになった。
会員名簿は時報を出さない年度に発刊する。

総会の後は、晩さん会に移り、大先輩の遠藤氏より現役当時のお話を伺うとともに、近況を報告し合い、愉快な時を過した。

昭和６２年度会計報告

昭和６３年３月１３日　現在

収入の部		
前年度繰越		１６４,９４４
会　費（９８名、内１９名２年分）	５,０００×１２７＝	６３５,０００
利　息		１,４４９
計		８０１,３９３
支出の部		
日本山岳会会費（昭和６２年度）		９,０００
昭和６２年度総会報告書印刷費		８,２００
昭和６２年度総会報告書送料		４０,０００
栂の木寮例会・２５周年記念行事案内送料		１０,０００
栂の木寮建設２５周年記念行事分担金		２０,０００
現役山岳部援助（テント２張り４７,８１０、５３,０１０）		１００,８２０
総会案内（往復ハガキ２１０枚、印刷費）		１８,８００
雑　費（通信、事務、弔電、写真他）		７,０００
郵便振替払込料金		５,２７０
計		２１９,０９０
差引残高		５８２,３０３

栂の木寮例会

日　時：昭和６２年８月２２日（土）　晴

出席者：山田部長、徳永会長、田島　汎、山本光二、木村裕一、野田憲一郎、広瀬貞雄、前沢祐一、米沢成二、大野義照、甲田吉彦、現役２名（来村宗紀、東條公資）、同行者（家族）８名

計　２１名

條田先生の音頭で始まった栂の木寮例会は、途中小屋の改修で一回休みましたが、今回で８回目になります。期日は盆休みの次の土・日と当初から変りません。山田先生、徳永会長を初め毎回参加されている方、初めて参加の方、ならびに家族・友人等の同行者で、いつも２０余名の参加があります。

親の原は栂池高原スキー場として開け、小屋の２０ｍ横には栂池自然園まで自動車道が通じ、無雪季にはバスが走っています。しかし、しらびそに囲まれた小屋のたたずまいは変らず、また窓から見渡す乗鞍、小連華から白馬３山の山々も昔のままです。

早く着いた人は、整備されて栂池自然園となった栂池湿原を散策したり、天狗原まで往復して、久し振りに山の空気を楽しみました。夜は、小屋管理人である猪股御夫婦に用意していただいた夕食をとりながら、話はいつまでも続きました。

野田憲一郎
廣瀬貞雄
前沢祐一
米澤成二
大野義照
大工原恭

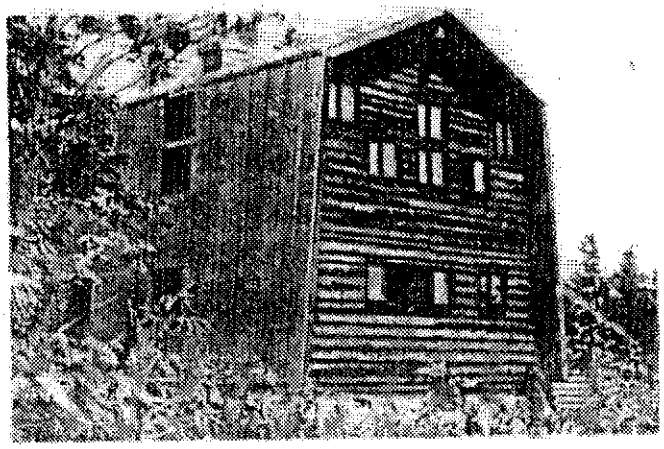
山田朝治
徳永眞司
田島洲
山本光二
木村裕一
甲田吉彦
松尾敬志

大阪大学山岳会
柵の木案例会
1987.8.22

柵池ヒュッテ創立25週年にて
建設当初の苦労話の抱負を
しのび例会を行いました

現在 新人4人
現役計10人

来村宗紀
東條公資



東京支部懇親会　　昭和６２年７月９日

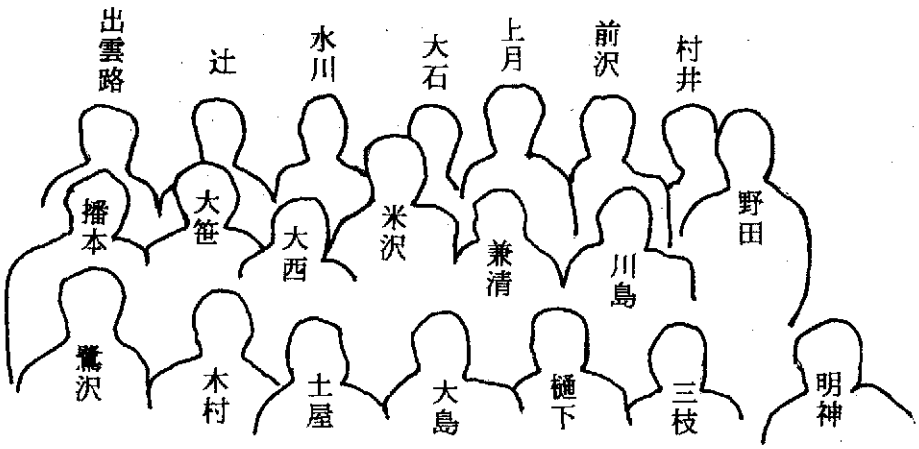
参加者：大島輝夫、川島　勇、土屋　直、三枝礼子、木村裕一、鷲沢　忍、樋下重彦、兼清喜雄
前沢祐一、米沢成二、野田憲一郎、村井忠雄、播本裕晃、辻　信男、出雲路敬孝、大笹秀一
大西啓之、水川朋吉、大石真也、野口　明、明神　知　　以上　２１名

今回の支部総会は大島輝夫氏の日本山岳会評議員就任祝いならびに水川、大西両氏によるロブジェ遠征報告会を兼ねて、７月９日、東京八重洲の「番屋」で２１名の出席者により開催された。

ロブジェ遠征報告はスライドを使って行われ、全員山への想いがこみあげてくるものがあり、熱心に見入っていた。

頂上の誤認で前衛峰で終ったことは残念でならないが、このような遠征は続けてもらいたいものである。

懇親会は６３年度も夏に開催予定であり、関東地区はもちろん東京に来られるＯＢは、下記幹事にご一報願います。



６３年度幹事

木村裕一、野田憲一郎、田中喜樹、木嶋良雄　　（明神記）

木島良雄氏　連絡先

自宅　03-483-3532

会社　住友金属鉱山㈱

新事業推進部　0462-76-0313

メタモールド開発センター　FAX　0462－76－7231

野田憲一郎氏　連絡先

会社　トヨタ中古車販売㈱

03-281-2456　FAX 03-281-2450

自宅　名簿どおり

篠田軍治名誉会長訪問　昭和６３年３月５日

参加者：山田朝治部長、住吉仙也、田島汎、山本光二、尾藤昭二、岡田博司

ゴルフコンペ　昭和６３年３月６日

福山市マーメイドゴルフカントリークラブ

参加者：　同　上

栂ノ木寮開設25周年記念

記　念　式　典

建設に直接携わられた元学生部の保田氏（現・微研経理課長）、紙野桂人工学部教授（設計者）、山岳会関係者らの呼びかけにより、８月２３日（日）、長野県安曇郡小谷村栂池高原において、学生部主催、体育会、山岳部、スキー部、ワンダーフォーゲル部及び各ＯＢ会協賛で、標記の記念式典が挙行された。

式典ならびに続いての祝賀会には、小谷村村長竹田保二氏、栂池観光開発委員会委員長深澤祐一氏、株式会社早川組社長早川学治氏、学生部長、関係教官、学生部関係職員、体育会学生、各部ＯＢ計２７名が参加した。山岳会からの出席者は、山田部長、徳永会長、野田、大工原、広瀬、栗原、大野、来村の８名である。

式典では、福岡学生部長が地元及び関係３部ＯＢの長年の協力に対し謝辞を述べ、一層の協力を要請した。

山田部長、徳永会長の挨拶の後、上記の来賓ならびに同寮の管理人である猪股直衛氏の功績に対して、体育会関係各部を代表して、山田部長から記念品が贈呈された。

式典に続く祝賀会では、建設当時の状況を語り合った。

なお、後日、篠田軍治名誉会長に栂ノ木寮建設の貢献に対して大阪大学より感謝状が送られた。

感謝状

篠田軍治殿

貴殿は大阪大学栂の木寮(山の家)の建設に多大の貢献をされましたよって栂の木寮開設二十五周年に当りその功をたたえ感謝の意を表します

昭和六十二年十一月二十三日

大阪大学総長

熊谷信昭

記念式典に寄せて

栂ノ木寮建設からU.S.A

山　本　彰　三（旧姓：浜田、法３８）

栂池寮建設に熱中した頃をほんの昨日のように思えますが、あれから２５年も経ってしまいました。あの係は安保闘争の時代で安保是非の議論にあきたのか、あるいは闘争のざ折感の中で何かを求めるように山小屋建設に熱中してしまったように思います。

４年の１１月竣工までは明けても暮れても"山小屋"になってしまったわけです。

卒業記念になってしまったのです。学生として他に熱中すべきことがあったかも知れませんが、ひとつの事に熱中できただけで幸せだったと今思っています。

社会に出てからは山にはご無沙汰してしまいましたが、目下のところ人生の山にとり組んでいます。

２３年９カ月勤めた日立造船が沈みかけ、石浜君など同僚の去っていくのにつられて、アメリカまで来てしまいました。今は秀和という国盗り合戦みたいな会社に身を置いていますが、日立造船を辞めた以上、この会社には余り愛着も執着もありません。

これからは、これと思う仕事があれば単独行ででも後の人生を賭けてみたいと夢みています。

今、秘かに日本の大学をアメリカに進出させるような仕事にとり組みたいと想いを練っています。

栂池寮のひと廻り大きな話みたいになります。自然に触れさせ、視野の広い人間複眼の人間を育てるには、今の日本の大学はアメリカに分校でも造り、そこで教育した方がよいかも知れないと考えているからです。

５０周年記念号には必ず投稿いたしますので、今回は残念ながら仕方ありません。

（栂ノ木寮開設２５周年を記念して、建設に現役山岳部を代表してお世話された山本氏に原稿ををお願いしましたところ、手違いで原稿締切日に間に合わず、代りにこのようなお手紙をいただきました。　編著記）

栂ノ木寮建設時の山岳部

梶　本　孝　治（工船３８）

山岳会の皆様方にはすっかり御無沙汰しています。小生、最近はすっかり山登りらしい山からは遠のいていますが、神戸在住という地の利を生かし、六甲、摩那山だけは息子を連れてよく歩いている昨今です。

さて先日、栂の木寮建設の苦労談を……とのお葉書いただきましたが、小生当時は、山岳部の上級生が少なく、又、工学部ということもあり、栂の木寮建設はもっぱら山本彰三君（旧姓浜田）に学生課や先生方との接衝から現地での荷上げボッカ合宿と称したもの、いっさい彼にやっていただき、もっぱら山登りだけに専念させてもらった次第にて苦労話しなど出来る事は何一つやっていない有様です。今でも寮の建設は山本兄の両肩に負う所大なりと思っています。ぜひ彼に一度御相談いただけませんか。御役に立てず申し訳ありませんが。皆様によろしく。

（栂の木寮建設時の話をという編者の原稿依頼に対しての返事。　編者記）

私の青春25年

畑中　薫（医44）

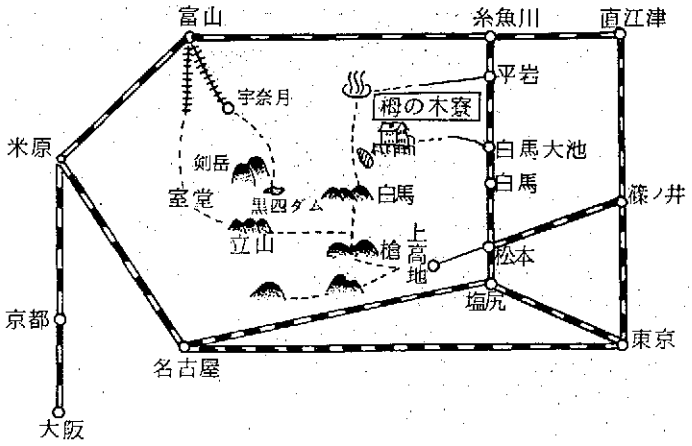
あれからもう２５年もたったのか。今ではレジャー・スキーのセンターとしての栂池スキー場の片隅にひっそりと位置している我が栂の木寮が竣工されてから ― ２５年。当時の栂の木寮のイメージはそんなものじゃなかった。スキーゲレンデははるか下方の“鐘の鳴る丘”までしかできておらず、それより上方は昔ながらの登山道であり、それを辿って我々が建築資材をボッカして建設された栂の木寮は当時の状況としては人里離れた登山の前進基地の観があった。

６才の時に小児結核を患い、１年の大半を入院生活で過ごした私のその後は体育の授業はいつも見学に終わり、子供ならだれもがやっていたソフトボールや鉄棒の練習に参加することができなかった。その後高校までは受験のための勉強に明け暮れた。念願の大学入試に合格できた私は今こそそれまで辛抱していたことを思う存分やって人間性を回復しようと思った。それはスポーツだった。体育系のクラブの中で過去の経験を持たない私を受け入れて下さった数少ないクラブの一つが山岳部であった。

私が入部した昭和３７年当時の部は通常のクラブ活動以外にＰ２９峰の初遠征計画があり、その資金集めに我々もかり出されたことと、山小屋の建設であった。記憶にあるのが、栂の木寮のストーブのボッカである。浜田（現山本彰三）先輩を隊長に栗原君がストーブの煙突、私がストーブの本体をボッカしたのである。なぜそんな話に乗ったのかは憶えていない。とにかくストーブの本体は背中に安定せず、あっちへズルリ、こっちへズルリと難渋した。そのあげく背中の皮が擦りむけた。そのとき栗原君が「治療には塩を擦り込むと良い」といった言葉も忘れられない。こんな経験は今の私にはもうできない。体力も気力も無くなっているが、あんなことを実行できた、あの当時の私達が持っていたあり余る暇と自由度。それがむしょうになつかしい。

私は山岳部で初めて体を鍛え、集団生活を教わった。その後学園紛争の波に巻きこまれ、その真ん中へ跳びこんだ。卒業してからは臨床医、病理医、そして今は研究者と転向していった。この25年間は私にとって何にも知らなかった自分が初体験を連続して受けつづけたともいえる日々であり、目まぐるしく刺激の強い日々であった。今から反省すると自分の誤ちも数多くあり、振り返ると恥ずかしく思うことがある。しかし、それを実行した当時の私はその誤ちに気付かなかった。だから全体として私の生きざまとしか言いようがない。その未熟さを青春と呼んで良いのなら、私はいまだに青春の中で必死にもがいている。

以　上



会　員　寄　稿

篠田先生語録（その１）

山　本　光　二（法29）

私が山岳部に入った昭和２５年の５月のある日、理学部構内にあった阪大本部の建物の屋上にあった部屋で、定例の集会があった。その日はその月の上旬に行った槍平から槍ケ岳東鎌尾根を通って燕岳への縦走について家田リーダーから報告があった後、前月初旬に発生した赤岩岳東側斜面での雪崩による滑落事故で、神戸大学の八巻、詠村両君が死亡した件の検討を行った。種々話が出て窓外が暗くなり集会も終りに近づいた頃に、篠田先生がふと立上り次のように結びの言葉を述べられた。

「一般的なスポーツと異なり、山登りというのは幸いにして長期に亘り楽しむことのできるスポーツである。私は１０才台の終りから４０才台まで、それぞれの時期に応じた山登りを体験し、時期により別々の楽しみを味わって来た。諸君が現在直面している２０才台の激しい山登りは諸君にとって限りなく魅力のある対象だと思うが、その次に３０才台、４０才台の山登りが続いており、運のよい人はもっと年長になっても自分に適したやり方で続けることができるのだ、ということを忘れないでほしい。いわば２０才台の山登りは、それに続く長い道程のワンステップであって、ここで生命を失うことは本人にとってもっと面白いかも知れぬ次の時期の山登りを放棄するになり、もっとも不幸なことになる。もし山登りの計画の段階で、このような考え方を基本に置いてあれば、猪突猛進的な行動で遭難事件を起すケースはかなり減少すると思う。

とはいうものの自然の力は人智を超えたものであり、如何に周到な計画を立て慎重に行動しても私達が事故に遭遇しない保証はない。もし不幸にして諸君が危機に直面したとき、第一に心すべきことは事態に冷静に対処することである。「治にいて乱を忘れず」という諺があるが、危機に際して必要な心構えは「乱にいて治を忘れず」であり、一見回避不可能に思える危地にあっても、理性を失わず冷静に対策を行えば必ず活路はあり、生命に係るような遭難事故には至らないと確信するものである。」

３０年以上前の出来事で話の表現がこの通りであったかどうか記憶が鮮明でない点もあるが、主題である「山登りは年令に応じて楽しむことのできるスポーツである」ことと「乱にいて治を忘れず」の二点はよく覚えている。

この言葉が同席した人々にどのような感銘を与えたかは解らないが、阪大山岳部では、このときから１２年後の昭和３７年秋に富士山で事故を起すまで、生命に係るような遭難事故が発生していないのは単なる偶然ではないように思われてならない。

以　上

ヒマラヤ・トレッキング雑感

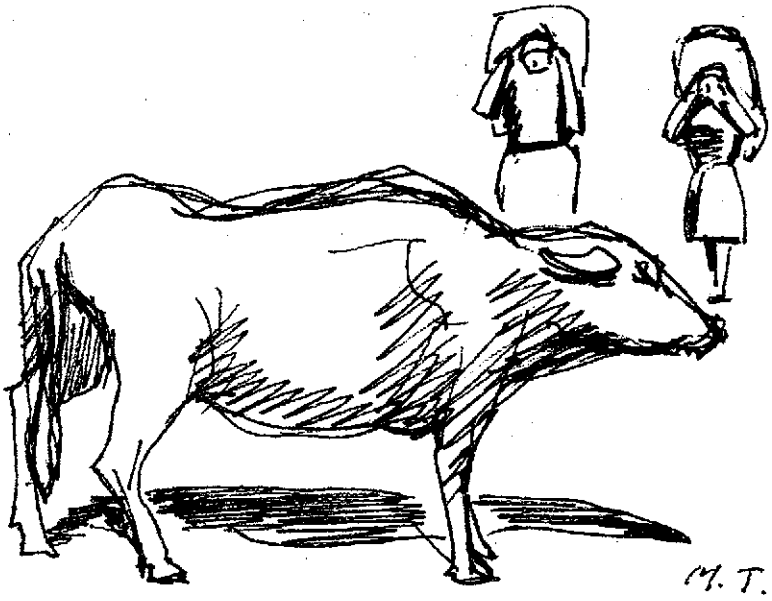
辻 川　　真（経32）

５０才に達し、画家に惚けがいないのに気付き、これだと思い立ち絵を描き始め、さる高名な先生に薦められ個展を開いた。その事が大野助教授の耳に達し、会誌のカットを描けと御指名あり、ついでにヒマラヤ・トレッキングの雑文でも書き添えよとのことになった。

昨秋細見先輩の御家族と一緒にアンナプルナ内院手前のガンドルンまで行きました。谷すじの行程を除いては、ポカラ寄りではマチャプチャレが主役でアンナプルナⅢ・Ⅳ・Ⅱと従えたパノラマが展開し、内院に近づくにつれアンナプルナ南峰を正面に見、マチャプチャレがその名の通り魚の尻尾の特異な形に見えて来る。以前心臓を煩い、リフトで登ってスキーで下る以上の無理を避けていた細見さんは、四人の一行に七人のシェルパやポーターを従えての空身の行楽とは言え、夜はダウンコートを着込んでの寝袋でもまだ寒く、昼はＴシャツ１枚で日傘を差しバンコックで買った椰子の葉の団扇でバタバタやりながら（これは私の話）でなくては辛抱出来ない暑さの中での、幾日もの登り下りに耐えられるまで体調を回復し、ヒマラヤを目の当りに見れる場所に立つことが出来たことに、いたく感動の体でありました。

すっかりネパール付いてしまった細見さん、来春にもエベレストを見に行くとの意気込みでいらっしゃる。

私にとっては絵のスケッチも主要な目的の旅でもあるので、文字通り暇を盗んでの作画でありました。カトマンズーのホテルにあっては、朝は暗いうちに飛び出し、画題を求め朝靄の晴れ際の寺の屋並みを描き、風にはためく経文の掛った仏塔を写し取る快楽に没入し、群がり覗き込む童子や無職者の中にも又埋没していると、このまま一年中ここに暮して妻子を顧みず、傾いた家や彫り物を施した窓枠や牛や裾長の女性の姿などをいつまでも描き続けたいと言う思いにさせる空気が漂う。



しかしこの年令ではタヒチの絵描き気取りもなるまいと心を制し細見さんとの約束の時間に戻るのでした。

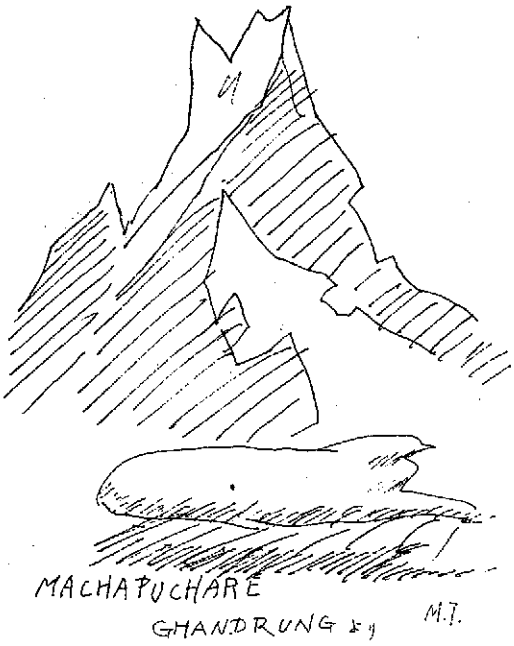
ネパールの魅力と言えば屏風を立てたようなヒマラヤの眺めに劣らず、明治の初めの日本が持っていた、非西欧文明の安らぎめいたものではないかと地面にへたり込んで、見える景色の美しさを写し取っていると尻の下からそんな感じが伝わって来るように思う。

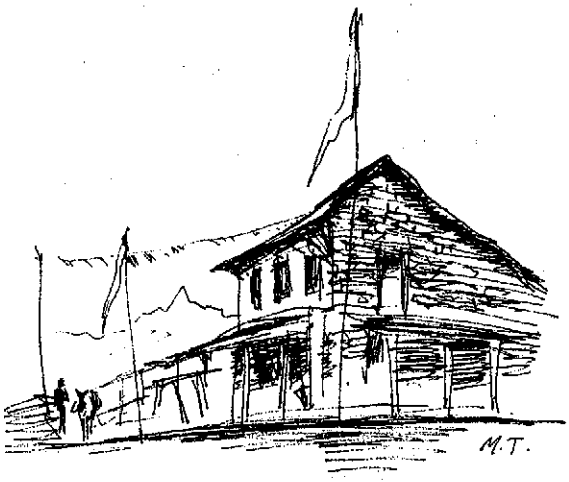
トレッキングに出て気付くことは、通常の海外旅行での著名な観光場では、到る所に威勢よく陣取っている日本人が、ヒマラヤ山麓まで来てしまうと、決定的に少数派であると言うことである。

その上圧倒的に多い欧米人の様態も、若い女の子のパーティーは太股もムキムキでゴム草履ばき、青年のパーティーはポーターを雇わず全装備を背負い汗を流し、中年の男達は椅子テーブルまでポーターに運ばせながらの旅を楽しみ、家族連れどうしのパーティは７０才を過ぎたような頭が真白なお婆さんまで連れ出し、トレッキングの最終坂路を下り了え、平地に降り立てば、よく無事に頑張り通したと皆でワイワイと喚声を上げ、拍手で迎え、当人は満面の笑みで喜びを返している。

これからの実に様々な楽しみ方をしている彼らの様子に、欧米人のヒマラヤ・トレッキングに親しんで来た層の広さ、時の長さのようなものを感じさせられてしまうのでした。

最後に、自分で言うのも何ですが、四十枚程のスケッチのうちには、2,3点は珠玉のように感じて悦に入っている絵も描けていますので、万が一大阪で個展でも開ける機会があれば、見に来てやって下さいますよう伏してお願い申し上げます。三枝大先輩も私の淡彩スケッチは褒めて下さっていますから。





谷川岳滝沢リッジ

越　智　栄次郎（経 58）

メンバー：越智栄次郎（経・58）
　　畑　　秀信（人・59）

3月20日　大阪から越智、栃木から畑とで前夜合流するも、本日は朝からたいへんな湿雪の悪天となる。〝遠路はるばる来たのに〟と、暗い気分となる。温泉へ出かけたりしながら1日のんびりすごす。

3月21日　4：30 リフト発～6：30一ノ倉出合～8：00 取付～13：30 ホルン状ピーク付近～18：00　ドーム下ビバーク

待ちに待った満天の星空の下、懐電をつけて旧道沿いに一ノ倉を目指す。薄明るくなる頃出合いに着き、登攀具を着ける。取り付きまではかなり急だから状態は良く、快調にとばす。他に取り付くパーティーが2，3パーティーあり、その横からまばらなかん木の生えた急な雪壁にとりつく。

それにしても壁は急でツルベで慎重に登る。雪が降りはじめる。5～6ピッチでようやく尾根状になるが傾斜は依然強く、なかなかピッチはあがらない。やがて両側がスッパリ切れはじめ、同時に上空も青空となり、すさまじい高度感を感じる。それにしてもすばらしいリッジで最高の気分である。ドームの基部を目指し所々馬乗りになりながら慎重にザイルを延ばす。

なだれそうな最後の急斜面を登るとようやく傾斜もよわまり、ドームの岩壁下の雪のわれ目に入り込む（以上16ピッチ）。本日は満天の星、疲れ切った体ではあるが充実した1日を振り返り、のんびりとねむる。

3月22日　5：30 ビバーク地～ドームの頭 9：00～国境稜線 13：00～土合 15：00

明け方の冷え込みはきびしく、早々にツェルトを出る。さあ本日はアブミに乗って苦しい人工からのスタートである。雪をはらいのけながら高度をかせぐ、2ピッチ目よりルートが不明確で、ボールドスタンスを慎重にひろいながらのフリーとなる。3ピッチ目の途中で再び壁からリッジとなるもなかなか息がぬけない。疲労した体にむち打って稜線を目指す。少し雲もひろがっているが、ようやく稜線上に立つ（以上8ピッチ）。長い間願っていたルートをようやく登った気持はやはり格別である。しっかり握手を交わし、あとは土合目指しかけおりた。

会員の近況

昭和６２年度総会（'88. 5. 6）の出欠の返事とともにいただいた近況報告を前文を省き編者の独断で編集いたしました。

吉見俊一（工船１１）

栂池の山小屋にも一度参加を致し度いと思っております。
５月７日には、小生喜寿を一家で祝ってくれる事になっております。
篠田先生のご健康を唯々お祈りします。
扨、小生、毎年夏末に低山歩きをしています。

河原　暲（工機１２）

仕事の方は一昨年１月第一線より引退しまして時間が出来ましたので、ボツボツ歩いて居ります。
一昨年１１月には八方池山荘まで行って来ました。丁度最初に出来た黒菱小屋が取壊されておりまして一寸残念でした。昨年は５月と１０月に尾瀬、８月には或る旅行業者のスイスハイキングツアーに古女房と参加、グリンデルワルト、ツェルマット、シャモニーに各３泊、ユングフラウ、マッターホーン、モンブランの山麓を歩いて来ました。
４月に入り暖になって来ましたので５月中旬には上高地に行ってみようと計画して居ります。

坂上秀夫（工機１３）

７５才、肺活量不足気味にて起居大儀、当分、諸行事には欠礼します。

斎木静雄（工応化１８）

総会のご案内を頂きましたが、実は小生５月３日から１６日間インド出張のため残念乍ら欠席いたしますので皆々様に宜敷くお伝え下さい。
今回のインド行は希土類の輸入交渉のためで、ヒマラヤの見える北部に足を延ばせましたら幸と考えています。

氏名不詳

小生、年相応にあちこちいたんで参りましたが、山とスキーには未だ熱情を持って居ります。
毎年孫を連れて苗場にスキーは欠かせません。余り山登りは出来ませんが、ヨーロッパの各アルプス、昨年はヒマラヤ（カトマンズ、ポカラ）等、行ける間にと思って気儘な旅をつづけて居ります。
5月11日からはオーストラリア横断のツアーでエアーズロックに出掛ける予定にして居ります。

大久保　勝　巳　（医２３）

３月連休に妙高山麓、池ノ平で久し振りにスキーを楽しんで参りました。戦時中、私、始めて滑った処ですが、当然ながら昔の面影はなく、整備されたゲレンデで若人が大勢上手に滑っておりました。妙高、飯尾、黒姫等々の山塊が、懐かしい姿をみせてくれました。

大　島　輝　夫　（理数２４）

希望１．水野祥太郎先生の時代の記録を同時代の方のご存命中に残すようにして下さい。
　　２．日本山岳会に、若い方が出来るだけ入会して下さい。

渡　辺　修　治　（医２５）

大学に在籍中がなつかしいです。のんびり無責任でした。最近のひどいこと！　責任重大、多忙！を極めています。

川　島　　勇　（工機２９）

セメント、生コン、シポレックス、骨材等、建築材料の販売を担当。
販売店の会で、よく温泉地に出かけ、５０肩に悩みながらゴルフを続けています。
蔵王山、磐梯山、榛名山等、各地の名山と云われている山を麓から眺めています。

濱　　一　枝　（薬３０）

この数十年、山とは遠くながめるものとなってしまいました。登ってみたい気持はあっても足がついて行かないでしょうね。

近　　瑋　三　（工精２９）

毎夏、北ア等をおとずれていますが、体力のおとろえを感じ、トレーニングに精だしたいと思います。もし、名古屋に寄る機会がありましたら、おより下さい。

三　枝　礼　子　（薬３０）

この２、３年、ネパール語関係の仕事に追われております。ネパール語がようやく話せるようになりましたのに、自分では出掛ける暇がなく、くやしいことです。東京在住のネパール人修学生、研修生が急増しており、カトマンズのニュースだけは何かと入って来るのですが ── 。

広　橋　　茂　（法３０）

近況特になし。大腸にポリープができて、連休あけにファイバー検査の予定がある事くらいです。

横　井　保　枝　（文３１）

なかなか思うように山歩きができないので、早く自由の身になりたいと思っています。栂の木寮にも是非一度参加したいと思っていますのでよろしく。

辻　川　　真　（経３２）

残念ながら連休日は栂池へスキーと画を描きに行っておりますので欠席致します。

昨秋は細見一仁氏の御家族とアンナプルナ方面にトレッキング一緒させてもらいました。３０枚程スケッチして来ることが出来ました。何度も行きたい画材がたくさんあります。

年中カトマンズー直行便が出るようになればうれしいですが。三枝さんにネパールのこと、絵のことご指導を仰ぎました。

西　川　元　夫　（工電３２）

小生の近況ですが、目下、名古屋の駅前の「名古屋都ホテル」にて支配人という世の中のしがらみにどっぷりつかった仕事をしております。来名の節には是非お立寄下さい。

野　田　憲一郎　（経３５）

本年連休は５／２に蓼科で会社のゴルフがありましたので足をのばして３、４日と遠見尾根へ行きました。会社の同僚（５３才）を五竜へ案内したのですが、３日夕刻から４日朝まで悪天候のため五竜頂上の直下で引返し、４日朝遠見を下りました（予定は八方尾根でしたが）。雪の多いのには驚きました。

８月は荒川３山を考えていますが、右ヒザを少しいためているので今日は病院に来ています。

東京支部の動きについては近くレポートします。毎夏夕食会をやっている程度です。

田　井　英　男　（工治３６）

富山ではこの冬は雪がずいぶんと少なかったようです。

天気の良い日には毛勝三山、剣立山、薬師岳と並んでよく見えますが、なかなか山へ行くひまはありません。

木　村　弘　子　（医３８）

今は山は登っていませんが、スキーに毎年北海道ニセコなどに行っています。

黒　木　隆　憲　（工溶３７）

山行することもなく、ただのグウタラの中年になっております。

鉄鋼下請経営者としては、特殊溶接主体から拡散接合による複合金属部品の製造へ転換中でバタバタしております。

大工原　　恭　（歯３８）

５月６日（総会の日）は多分九重の山の中で一杯やっているでしょう。鹿児島へ来て１０年目になりました。のんびりやっています。お近くへおいでの節は御連絡下さい。焼酎で一杯やりましょう。

吉　川　信　也　（理生４０）

今年３月１日より姫路工大へ転職しました。単身赴任なるものをやってます。姫路の郊外の書写山という丘の麓にある空気の良いところです。心気一転また頑張るつもりです。

中　村　　稔　（理化４０）

栂池、神の田んぼにも今年あたりは行ってみたいものと思っております。

播　本　裕　晃　（法４０）

現在は夏を中心に年１～２回家族旅行をしています。

昨年は７月に飯豊に女房と４泊で行って来ました。又、３年前の６月の岩手山行は楽しかった思い出です。東北の山は、登ったのは上記２つ丈ですが、地の利を得ているので、今年は朝日と栗駒に行きたいと思っています。

原　　治左ヱ門　（理化４２）

この２月から静岡（工場）での単身赴任生活に終止符を打ち、再び東京の本社に居ります。関東（東京）支部会には極力参加させて頂く所存です。

中　岡　和　哉　（医４６）

山といえば家族で富士山に登ったぐらいで、縁の無い生活です。現在は大阪府立病院の外科で主に呼吸器外科をしています。家は石橋学舎の近くで、先日阪大の桜狩りにいきました。

明　神　　知　（基制５３）

大阪へ帰ってはじめての総会ですので楽しみにしております。転職して半年がたち、今の職場にも慣れ、これからまた何かはじめようとも思っています。よろしくお願いします。

広　田　雄　彦　（経５５）

ゴールデンウィークは、小松ＯＢと一緒にネパールへマチャプチャレを眺めに行って来ます。倒れ掛った会社でこき使われる身にとって唯一のうさ晴らしです。

奥 山 宏 臣（医５９）

現在大阪厚生年金に勤務していますが、７月より医学部小児外科の大学病院へ行くことになりました。

今 村 義 弘（工機５９）

新人部員は何人入ったのですか、心配しています。

6月２６日（日）（１９８８）にホテルプラザで結婚することになりました。

山岳会名の祝電を期待しています。

三 枝 礼 子 （薬３０）

栂の木寮例会の御案内頂きありがとう存じます。

あいにく２１日（日）に７～８人お客さんが来ることになっており、残念ながら例会に参加できません。御出席の皆様によろしくお伝え下さいますよう。

近ごろは山へも、ネパールへも出かけることがなくなり、その代りにネパール語の仕事が来ます。仕事といってもほとんど採算無視のものばかりで、これも道楽のひとつと思ってやっております。

編者注：三枝さんは下記の本を出されています。

三枝礼子／
寺田鎮子訳
四六判・上製
定価 1600円

二十世紀ある小路にて

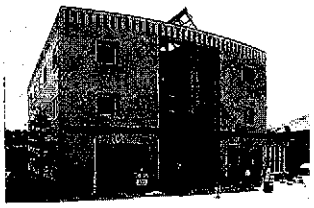
―― ネパール女性作家選 ――

わが国初!!
神々の国の短篇集

発行　段々社
東京都豊島区南大塚２の45の４
電話　03(945)9587
発売　星雲社
東京都文京区小石川５の19の25
電話　03(947)1021

しらびそ館が Front Stage に（編者紹介）

栂ノ木寮を管理されている猪股氏の民宿しらびそ館は、お世話になった会員も多いと思いますが、1987年閉鎖され、同じ場所に新しくホテル「Front Stage」が建設されました。バス停、ゲレンデのすぐ横で、設備も整っています。今迄同様よろしくお願い致します。



長野県北安曇郡小谷村栂池高原
ホテル フロントステージ　TEL 0261-83-2309
FAX0261-83-2661

山岳会記録

昭和６１年

４月　　時報（第18号）出版

７月　３日　坪井圭之助氏全快祝
於マンダリン（中の島ビル）
徳永、尾藤、田島、坪井、山本
川島、四宮、由井浜、細見

８月２３，２４日　栂ノ木寮例会
山田部長、徳永、田島、山本、
木村、岡田、田中、井上、同行
者８名、現役（戸叶）；
総計１９名

８月２５日　ゴルフコンペ
木曽駒カンツリー
山田、徳永、山口他

８月　　日　東京支部懇親会
参加者；大島、川島、土屋、三
枝、林、関本、木村、山本(進)、
鷲沢、辻川、野田、兼清、山本
（信）、田淵、村井、牧野、田
中、明神、木嶋；１９名

１０月２５日　篠田名誉会長訪問
出席者；山田、大久保、加藤兄、
徳永、加藤、住吉、田島、山本、
（吉井　　）

１０月２６日　ゴルフコンペ

昭和６２年

２月１３日　昭和61年度総会（ＫＢＳ）
山田部長、徳永会長、尾藤、田
島、山本、四宮、由比浜、広橋、
村瀬、岡田博司、広瀬、佐藤茂、
高橋、五百蔵、高田、黒田、大
野、甲田、山田靖則、黒岩芳夫、
草尾、越智、今村、上月登喜男、
大西啓之、戸叶聡（現役）

８月２２日（土）　栂ノ木寮例会
山田、徳永、田島、山本、木村、
野田、大工原、広瀬、米沢家族、
前澤夫妻、木原夫妻、栗原、大
野、甲田家族、松尾、現役

８月２３日（日）栂ノ木寮25周年記念式典
11－14時　やまじゅう食堂
出席者；小谷村村長、福岡学生
部長、学生課々員、紙野教授、
学生５人、山岳部ＯＢ、スキー
部ＯＢ

８月２４日（月）　ゴルフコンペ
穂高カンツリークラブ
山田、徳永、田島、山本、木村、
丸山庄司、丸山健吉、徳永夫人

１１月２５日（土）　年次晩餐会
（於大阪ヒルトン）
徳永、田島、木村、坪井、宍戸、
岡田、広橋、広瀬、細見、松尾

１１月２９日（水）関西登行会40周年パーテー
徳永出席

１２月１２日（土）　加藤喜一郎氏葬儀
鎌倉延命寺（出席；徳永）

昭和６３年

１月２７日　ＪＡＣ関西支部新年会

３月　４日　松久逝去 pm 7:50 胃及び膵癌

３月　５日　篠田名誉会長訪問
山田、住吉、田島、山本、尾藤、
岡田

３月　６日　ゴルフコンペ（福山市ユーメイ
ドゴルフカントリークラブ）
山田、住吉、田島、山本、尾藤、
岡田

５月　６日　昭和62年度総会
出席者；山田部長、徳永会長、
遠藤、四宮、田島、山本、坪井、
岡田、広瀬、佐藤、打出、五百
蔵、高田、石浜、大野、甲田、
明神、松尾、越智、今村、大倉
（現役）

８月２０日　栂ノ木寮例会
山田、徳永、田島、山本、大工
原、岡田、高田、大野、甲田

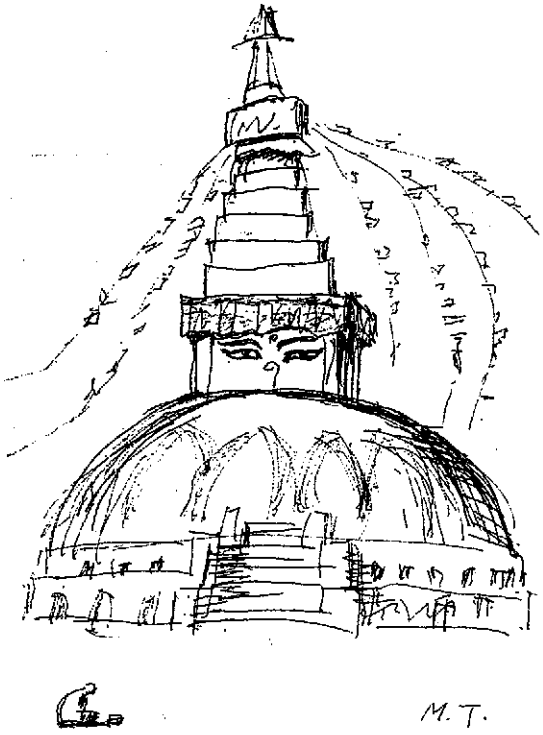
８月２２日　ゴルフコンペ　穂高ＣＣ

１１月２８日　恩地　裕　逝去

１１月２９日　恩地　裕　葬儀

山手会館、山田部長、大野、徳永、田中、山本、甲田、山田、明神参列

１２月　３日　東京支部会（於主婦会館）
徳永、山本、大島、川島、木村、三枝、宮本、田中、辻川、野田、鷲沢



山岳会名簿（1987年版）の訂正ならびに変更

1, 20頁　山本　光二　（勤）紀州製紙株式会社　☎ 06−345−6471
530 大阪市北区堂島浜1丁目4−16（渡辺橋ビル）

1, 12頁　広瀬　貞雄　（勤）阪大工学部生産加工工学科　☎06−877−5111 ex4834

4頁　宍戸　元　（自）666−01　川西市大和西1−49−7

4頁　木村　弘子　（自）565 豊中市新千里南町3−34−1　☎ 06−832−8453
（勤）木村小児科　☎06−338−5050

4頁　中岡　和哉　（自）560 豊中市刀根山2丁目3−92　☎ 06−855−4793

4頁　奥山　宏臣　（自）631 奈良市あやめ池南1丁目2−5
（勤）大学院生（阪大医学部小児外科）

6頁　大島　輝夫　（勤）（社）日本化学物質安全・情報センター　☎03−593−1190

7頁　吉川　信也　（自）☎ 0798−72−4791
（勤）姫路工業大学工学基礎研究所　☎0792−66−1661

7頁　中村　稔　（勤）日立製作所日立研究所第71研究室　☎ 0294−52−5111 ex379

7頁　高橋　正身　（自）194 町田市成瀬2−9−4
ポプラケ丘コープ13−403　☎ 0427−26−9268

7頁　鹿野　信吾　（自）306 茨城県古河市静町20−16　☎ 0280−31−4121

7頁　佐野威和雄　（自）120 東京都足立区大谷田五丁目10−3−106　☎ 03−628−7720
（勤）東大医学部付属病院精神神経科（外来）☎ 03−815−5411

7頁　上月登喜男　（自）272−01 千葉県市川市南行徳1−15−2　コーポ成島102
☎ 0473−97−2941

7頁　水川　朋吉　（自）千葉県松戸市根本155−4　松戸寮305　☎ 0473−63−7378

10頁　四宮　誠祐　（自）545 大阪市阿倍野区相生通2丁目6−39

11頁　西川　元夫　（自）630 奈良市佐保台2丁目840−127　☎ 0742−71−7071

11頁　樋下　重彦　（勤）富士通㈱　伝送無線事業本部

11頁　兼清　喜雄　（勤）日立テクノエンジニアリング㈱　機械システム事業部　☎03−605−1112

13頁　梶本　孝治　（自）651 神戸市中央区葺合町蝉山1−7　熊内台セントポーリア208号

13頁　石浜　高明　（勤）日本情報サービス㈱エンジニアリング部
大阪市西区土佐堀2−2−7　☎ 06−536−7631

14頁　出雲路敬孝　（自）249 鎌倉市植木598−3−306号　☎ 0467−45−6956

14頁　加藤　佑二　（自）273 船橋市金杉7−53　IHI金杉荘3号棟105　☎0474−48−9889

14頁　細川　明彦　（勤）電源開発㈱　東京本社　☎ 03−546−2211

15頁　森　保知　（自）636 奈良県北葛城郡王子町本町2丁目1−19
山善ハイツ306　☎ 0745−73−7385

15頁　小松　二郎　（自）253 神奈川県茅ケ崎1−7−5　曙寮

15頁　金谷　明　（自）581 八尾市美園町1−61−3　グリーンハイツ美園202号

15頁　西尾　良司　（自）316 日立市諏訪町4−6−1−101　☎ 0294−34−4437
（勤）㈱日立製作所エネルギー研究所第2部208ユニット　☎ 0294−53−3111（代）

16頁　佐藤　健哉　（自）590−05 大阪府泉南市信達市場2661−162
（勤）☎ 06−461−1031 ex 3694

16頁　榊原　　淳　（自）558 大阪市住吉区苅田4－12－17
コーポウィステリア4－C号　☎ 06－692－8589
（勤）㈱住信基礎研究所　☎ 06－220－2280
16頁　今村　義弘　機59　（自）662 西宮市柳本町3－23　☎ 0798－72－0427
17頁　浜　　一枝　　濱　一枝
17頁　松尾　敬志　（歯55）
（自）565 池田市井口堂2丁目6－15－509　☎ 0727－61－2242
（勤）阪大歯学部口腔治療科　☎ 06－876－5711 内線2243
18頁　竹林　真一　（自）444 岡崎市上地町欠の下12－1　☎ 0564－54－2790
（勤）川崎市中原区大倉町10番地　三菱自動車　☎044－588－1111
18頁　明神　　知　（自）654－01 神戸市須磨区竜が台1－1－2－20－104
☎ 078－793－7870
（勤）㈱オージー情報システム総研　☎ 06－612－8551
18頁　住田　宏己　（自）静岡県三島市徳倉2丁目29－16
18頁　野口　　明　（勤）野村総研
18頁　森藤　正人　（自）☎ 0723－36－8470　（下宿）高橋方　☎ 06－841－0322
19頁　辻　　光弘　（勤）542 大阪市南区日本橋2－1－15　大栄商会
19頁　黒岩　芳夫　（勤）インドネシア旭化成㈱
P.T. INDONESIA ASAHI CHEMICAL INDUSTRY SUMMITMAS TOWER TK
1861－62　JL JENDRAL SUDIRMAN, JAKARTA, SELATAN, INDONESIA
（留守中連絡先）167 東京都杉並区西荻北2－36－21　児玉方　黒岩茂女　☎ 03－399－0096
19頁　越智栄二郎　（勤）☎ 06－942－4501
20頁　岡田　博司　（勤）日本割引短資株式会社大阪支店　☎ 06－203－0624（代）
541 大阪市東区平野町2－12
20頁　山本　彰三　（自）SHOUZOU YAMAMOTO
（旧姓浜田）　227 EAST FOREST AVE. ARCADIA CA 91006 U.S.A.
20頁　山本　久夫　（勤）北海道拓殖銀行　ロンドン支店
（留守宅）359 所沢市山口5246番地90－1－308　☎ 0429－22－9280
20頁　播本　裕晃　（勤）伊藤忠商事総務部　☎ 03－97－7576
20頁　栗原　完治　（勤）☎06－341－0023
20頁　岡田　謙治　（自）661 尼崎市上坂部2－25－8
21頁　畑　　幸代　（自）680 鳥取市栗谷町70
21頁　大西　啓之　（自）270－01 千葉県流山市松ケ丘1－486　☎ 0471－43－9124
（勤）ニチメン畜産部　☎ 03－277－8285
22頁　戸叶　　聡（経4）563 池田市石橋1－8－2　相沢方　☎ 0727－62－2880
22頁　来村　宗紀（工物4）562 箕面市如意谷2－3－20 福井方　☎0727－23－9408
（研究室）☎ 06－877－5111 ex 4670
22頁　藤田　繁雄（医4）567 茨木市玉櫛1－3－22　☎0723－36－8470
22頁　鈴木　寛道（工精63）（自）432 浜松市神ケ谷町6051　至誠寮327号
（勤）ヤマハ　☎0534－85－0741

編　集　後　記

今やっと時報１９号を発刊できることになりました。本号は 1987年度までの活動記録（山岳部）であり、発刊がたいへん遅れたことをお詫びいたします。

経過を申しますと、現役の原稿の大半は、去年６月中には、私の手元に集まっていたのですが、一部原稿の遅れから去年中に発行することができませんでした。また、ロブジェ遠征の報告も遅ればせながら載せる予定でしたが、間に合いませんでした。

時報とは直接関係ありませんが、この３月に諸先輩の援助も受けて、ネパールのクスム・カングール（6,367 m）という山に、個人山行の形で、戸叶、藤田、来村と甲南大学の宮崎氏の４名で行ってまいりました。結果は、法政大学の遭難に見られるように、不順な天候に悩まされ、またタクティクスの甘さから登頂はできずに終りました。報告書は、できるだけ速かに発行いたしますが、とりあえずこの紙面を借りて報告いたしますとともに、御協力いただいた方々にお礼申しあげます。

今年度の山岳部について少し紹介しますと、部員構成が、４年１人、３年１人と上級生が手薄なのが一番の問題となっています。したがってＯＢの合宿等への参加を大歓迎するとのことです。ちなみに夏の定着は涸沢の予定です。人数が少ないので、他大学、ＯＢとの交流による刺激によってより活発な活動にして行きたいところですので、御支援、御協力をよろしくお願いいたします。

（来村宗紀）

本号を準備中に、恩地前山岳部長が急逝されました。その４年前には水野前会長、昨年は松久氏と、阪大山岳会にとってもかけがえのない先達をなくしました。慎んでご冥福をお祈り致します。徳永会長と大工原氏から追悼文をいただきました。

本号より時報は現役山岳部の活動報告の部と山岳会の会報の部で構成することになりました。山岳会の部には多くの会員の方々から寄稿をいただきました。栂ノ木寮開設２５周年に関連して畑中氏に建設時の思い出を記していただきました。山本氏からは篠田先生語録（その１）をいただきましたが、（その２）、（その３）とどなたか続けて書いていただくことを期待しています。辻川氏にはネパール紀行文の他にカット絵を、越智氏には谷川岳山行文をお願い致しました。

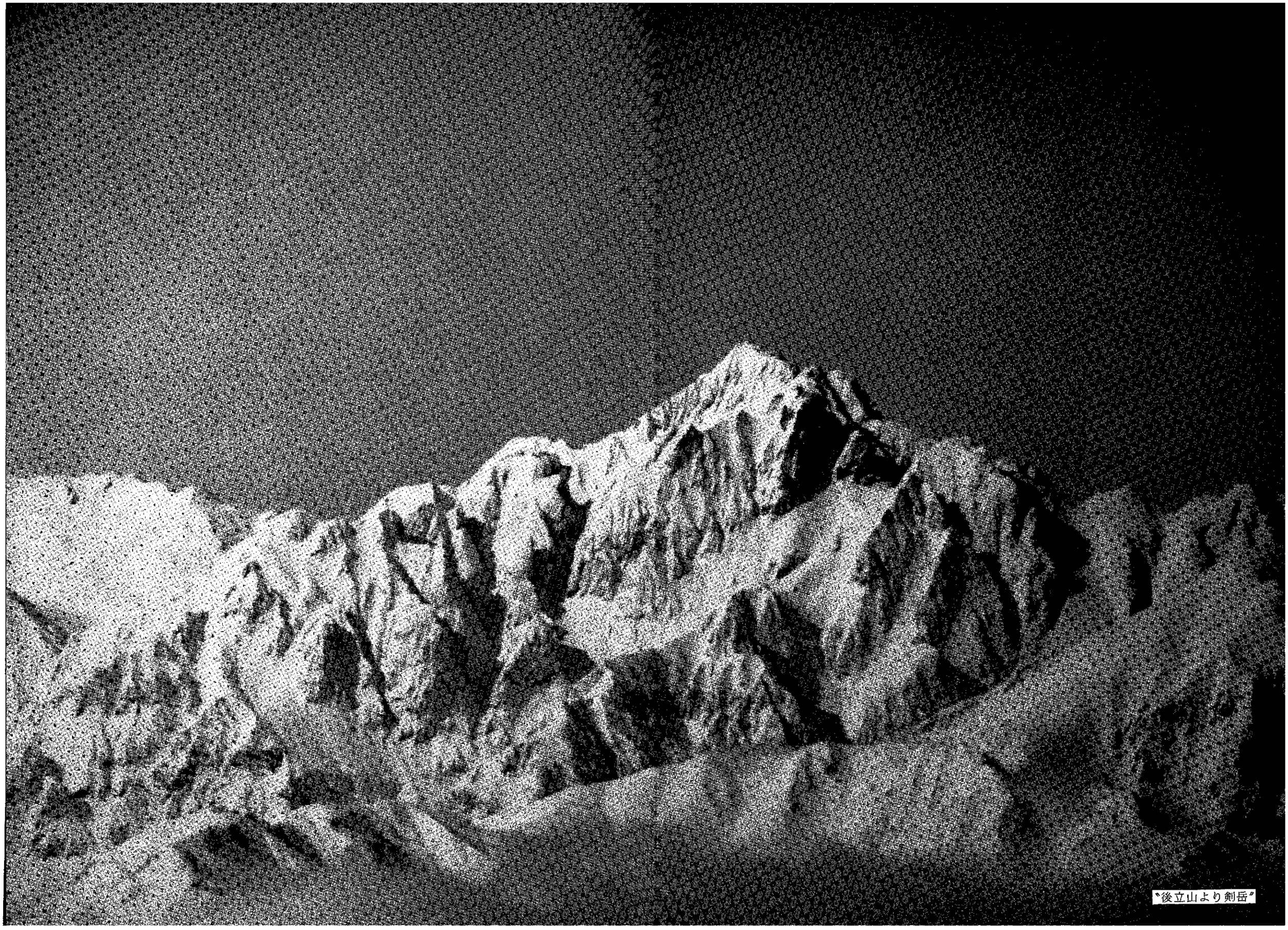
山岳会の部は会員からの寄稿で成り立っています。テーマは問いません。寄稿をお待ちしています。

（大野義照）

平成元年５月２５日

発　行　所　　大阪大学体育会山岳部　　〒560　豊中市待兼山町１の１

印　刷　所　　株式会社　龍史堂印刷　　〒563　池田市石橋３丁目３の１
電話（0727)62－7104
（阪急宝塚線線路沿い畑バレエ隣）



"後立山より剣岳"